

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (12)
— 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 (1251 ~ 1264 年)

中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (12) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1251 ~ 1264 年)

中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一

6759 [1251] 年

【マゾフシェ公コンラート一世の死：1247 年 8 月 31 日】

ポーランドの大いなる公 (князь великий лядьский) コンラート (Кондрагъ) が死んだ¹⁾。かれは
榮譽に充ち **[810]**, いとも善良だった。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれ [の死を]
惜しんだ。

【マゾフシェ公ボレスワフ一世の死：1248 年春】

その後, かれ [コンラート] の息子でマゾフシェ公のボレスワフ (Болеслав) が死んだ²⁾。

【シエモヴィト一世のマゾフシェ公位継承の経緯：1248 年】

[ボレスワフ一世は], ダニール公 [I111] に聴き従って, マゾフシェを自分の兄弟のシエモ
ヴィト³⁾ (Сомовит) に与えた。かれ [ダニール] の姪でアレクサンドル [I121] の娘のナスタシ

1) マゾフシェ公コンラート一世 (Konrad I Mazowiecki) は 1247 年 8 月 31 日にブウォツクで没している [IPSB: KONRAD (MAZOWIECKI)]。コンラートに「大いなる公」の称号が付いているのは, これまでのダニール兄弟との同盟関係に対する年代記記者の評価のあらわれであるとともに, 死亡記事における称揚的表現でもある。

2) 父コンラートが 1247 年 8 月に没したのちマゾフシェの地を継いだボレスワフ一世については, [イパーチイ年代記 (11): 注 279] を参照。かれは, 公位を相続して間もない 1248 年に没している。その時期についてバルザー, フルシェフスキ等は 1248 年 3 月 ~ 12 月の間と推定している [Копляр 2005: С. 278]。

3) 「シエモヴィト」(Сомовит) は, マゾフシェ公シエモヴィト一世 (Siemowit I Mazowiecki) (在位 1248 ~ 1262 年) を指し, 1248 年に長兄のボレスワフ 1 世が没した後で, マゾフシェ公領を相続した。ボレスワフは, 別の弟カジミエシュ一世をさしおいて, 下の弟であるシエモヴィトに公領を相続させたが, これにはダニールの意向が強く働いた (「ダニールに聴き従って」) とするのは本年代記の立場を反映した見解である。シエモヴィトは在位中, ダニール兄弟たちとの同盟・友好関係を維持した。

なお, 系譜学で広く受け入れられている説として (Balzer, Baumgarten 等) シエモヴィトがダニール [I111] の娘 (Переславаの名が伝わる) を妻としたというものがあるが, 史料にその根拠は見当たらず不確かである。もしそのような結婚が成立していたら, ダニール兄弟とマゾフシェ公との関係に常に注意が払われている本年代記に言及されていなければおかしい。また, 現代の系譜学者ドムプロフスキも Переслава の存在やそのような結婚の可能性を認めていない [Домбровский 2015: С. 364-403]。

ア(Настасья)が、かれ〔ボレスワフ〕に嫁いでいたからである⁴⁾。かの女はその後、ハンガリーの貴族ドミトル(Дмитр)に嫁いだ⁵⁾。その年にシェモヴィトはマゾフシエ〔の公座に〕座した。

【ダニール兄弟はヤトヴァグ人討伐の共同遠征をシェモヴィトに呼びかけ、自らはドロギチン経由でヤトヴァグの地への遠征を始める：1248/49年冬】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれ〔シェモヴィト〕に使いを遣って、かれにこう言った。「そなたはわれら二人の善き計らい⁶⁾をすでに見たであろう。われらと一緒にヤトヴァグ人を襲撃せよ⁷⁾」。

4) 「ナスタシア」(Настасья)すなわち「アナスタシア」(Анастасия)はここでは「姪」と訳したが、原文ではダニールの брагучада となっており、この語はダニールの従兄弟(брат)であるベルズ公アレクサンドル [I121] の娘(дочи Алеквандрова)を意味している。かの女が「かれに嫁いでいた」(за ним)という、その「かれ」が誰であるかは文脈では曖昧だが、系譜学ではボレスワフ一世を指すというのが定説になっており、その再婚相手(最初の妃ゲルトゥルドは1244年4月頃に没したと推定)とみなされている。結婚の時期はボレスワフの父コンラートが没する(1247年8月)より前だっただろう。この再婚が成立したと推定される時期(1244～1247年、ドムプロフスキは1245年8月以前と推定)には、かの女の父アレクサンドル [I121] はすでに亡く、父を継いだ兄弟のフセヴォロド [I1212] とダニールは良好な関係にあったことから、この結婚もダニールの政策的な意図が強くはたらいたと考えられる [Домбровский 2015: С. 412-417]。

5) この「ドミトルという名のハンガリー貴族」(боярин угорьский, именьем Дмитр)については、本年代記6727(1219)年の記事に、ハンガリー王カールマンのガーリチ遠征に従軍した者(おそらく軍司令官=貴族)の一人として、ドミトル(Дмитор)の名が挙がっており [Стб. 737][イパーチイ年代記(10): 280頁, 注301]、時代的には20年ほどの幅があるが、この人物と同一視する説がある [БЛДР-5: С. 494, 504]。この人物はハンガリーの大貴族(マグナート)アバ(Aba)一族出身の宮中伯(palatinus)とされている。しかし、ドミトルは一般的な名であり、ハンガリー史料にアナスタシアについての言及がないため、これらの同定は相当程度推定にとどまらざるを得ない [Домбровский 2015: С. 417-421]。

6) ダニール兄弟のシェモヴィト一世への「善き計らい」(добро)とは、全体としては、シェモヴィトの父コンラート一世、兄ボレスワフ一世とダニールとの良好な同盟の関係を指しており、具体的にはシェモヴィトがマゾフシエの公位を継承した際の婚姻同盟に基づく軍事を含む支援(兄カジミエシュ一世との関係において)を指している。

7) マゾフシエ公のヤトヴァグ人に対する共同の討伐遠征の提案は、これより前に1245/46年冬にコンラート一世がヴァシリコに対して行っているが、ダニールの不在(サライへの伺候)と不利な気候(寒気)のために遠征は中断されている ([イパーチイ年代記(11): 注475]参照)。本遠征の時期は年代記の時系列(シェモヴィトの公位継承直後)と遠征には川や沼地が氷結する時期が適していることから1248/49年冬季と見るべきだろう ([Котляр 2005: С. 279]も参照)。

本遠征の動機として、ヤトヴァグ人のヴォルニ公領の北西境界地帯への来襲が頻繁に繰り返されていたこと ([イパーチイ年代記(10): 注429-433][イパーチイ年代記(11): 注413]を参照)が挙げられている [Котляр 2005: С. 278]。カルピニの修道僧ヨハネスの旅行記にも「わたしどもの旅行はルテニア人〔他版ではリトアニア人〕のために死の危険の連続でした。ルテニア〔リトアニア〕人は可能とあらばいつでも、しばしば人目をしのんでルーシの領土、とりわけわたしどもの通路にあたる地方を襲った〔カルピニ, ルブルク1967: 65頁(68頁も参照)]との記述がある。この「リトアニア人」は「ヤトヴァグ人」も含まれていると考えられる [Пашуто 1950: С. 280-281]。

ふたり〔ダニールとヴァシリコ〕はボレスワフから軍司令官スード(Суд)とシグネフ(Сигнѣв)の援軍⁸⁾を得ていた。そして、かれら〔ダニールとヴァシリコ〕はドロギチン⁹⁾(Дорогычин)に集合して、進軍を開始し、沼地を越えて、かれら〔ヤトヴァグ人〕の地方への襲撃を行った。

【他方、ポーランド人遠征軍はダニールの到来を待たずにヤトヴァグ人を襲撃する。ダニールはこの抜け駆けに激怒する】

ポーランド人たちは〔ダニール軍の到着を〕待ちきれずに、かれらの〔ヤトヴァグ人〕最初の〔遭遇した〕村を焼き払った¹⁰⁾。これによってかれら〔ポーランド人〕は悪しき事をなした。すなわち、かれら〔ヤトヴァグ人〕に〔遠征の〕兆候を知らせてしまった。これについて、ダニール [I11] とヴァシリコ [I12] はかれら〔ポーランド人〕に怒りを発した。

【ヤトヴァグ人は評議して、ダニールに使者を派遣して、ダニールの遠征軍からの離脱を図る】

〔ポーランド人たちは〕夕方までかれら〔ヤトヴァグ人〕を掠奪し、多数の捕虜を獲った。夕方になって、ズリナ人たち¹¹⁾が〔ヤトヴァグ人の援軍として〕やって来た。そして、ヤトヴァグ人のすべての地の〔者たちが〕集まり、ダニール [I11] に対してネビヤスト¹²⁾(Небяст)とい

8) 「スード」(Суд)と「シグネフ」(Сигнѣв)は、ボレスワフ一世の治世(1233年~1247年)にポーランド(マゾフシェ)から派遣されてダニールに仕えていた軍司令官(воевода)で、ダニール兄弟のもとでヤトヴァグ人、リトアニア人、騎士団勢力などに対する共同の防備にあたっていたと考えられる。シグネフについては、本年代記の6765(1257)年(下注213)および6776(1268)年の記事でも言及されている。

9) 「ドロギチン」(Дорогычин)はベレスチエから北西へ15kmほどの西ブグ川河岸の城砦で、現在のドロヒチン(Drohiczyn)に相当する。当時はダニール兄弟の支配下にあった。[イパーチイ年代記(11):注151]を参照。

10) この共同遠征は、以下の記述に繰り返し捕虜の捕獲が言及されているように、ヤトヴァグ人捕獲のため(さらに、ヤトヴァグ人のもとにいたルーシ人、ポーランド人の捕虜奴隷の解放のためもあった)の大規模な掠奪遠征でもあり、西(プウォツク方面)からのシェモヴィト軍と東のドロギチンからのダニール兄弟軍が合流して、共同で捕獲・掠奪を始めることになっていたのだろう。「ポーランド人は待ちきれずに」(не стерпѣвшим ляхом)とあるのは、シェモヴィト軍が最初に見つけたヤトヴァグ村の掠奪・捕獲を抜け駆け的に始めてしまい、不用意に遠征軍の到来を相手に知らせて、ヤトヴァグ人の反撃の余地を与えてしまったということ。そのことが、ダニールの怒りを呼んだのである。

11) 「ズリナ人」(злинці)はヤトヴァグ人の城砦ズリナ(Злина)の住民のこと。ズリナはウクライナ語訳索引によれば、プレゴリャ川(Преголя)上流域の現在のリトアニアの南西部ヴィルカヴィシスキオ自治区(Vilkaviškio rajono)の城砦と推定されているが確定的ではない。

12) この「ネビヤスト」(Небяст)はヤトヴァグ人の身分の高い使者と思われる。総じて、本年代記のヤトヴァグ人との交渉や戦闘の描写には身分の高いヤトヴァグ人諸侯・軍人の名が具体的に言及されている。さらに戦闘の描写も詳しいことから、遠征に従軍した人物の報告が年代記の資料に使われたことは明らかである。

う人物を派遣して、こう言った。「そなたはポーランド人たちをわれらに残して、自分はわれらの地から平和に出て行くがよい。〔そなたは〕望みを得ることはできないだろうから¹³⁾」。

【ポーランド人はヤトヴァグ人による夜襲によって非勢になるが、ダニールからの援軍でもちこたえる】

ポーランド人は〔幕営を〕逆茂木で固めていた。夜間にポーランド人への〔ヤトヴァグ人の〕攻撃が行われた。他方、ルーシ人は〔幕営を〕逆茂木で固めていなかった¹⁴⁾。ポーランド人は激しく戦った。投げ槍が投じられ、松明が稲妻のように飛び、石礫が雨のように天から【811】降り注いだ。ポーランド人たちの防御が難しくなったとき、シェモヴィトは〔ダニールとヴァシリコに対して〕使者を遣って「射手をわれらのもとに派遣せよ」と言った。〔ダニールとヴァシリコの〕二人は、最初の村を焼いたことに対して怒りを持っていたので、射手の派遣を渋っていたがようやく派遣した。なぜなら、〔ヤトヴァグ人は〕逆茂木を破壊しようとしており、白兵戦で戦っていたからである。〔ダニールが派遣した〕射手たちが到着して、多くの〔敵を〕傷つけ、多数を矢で射殺した。こうして、逆茂木からかれら〔ヤトヴァグ人〕を追い払った¹⁵⁾。その夜は、かれら¹⁶⁾〔ヤトヴァグ人〕ゆえに〔遠征軍にとって〕安静はなかった。

【遠征軍は前衛、本隊、後衛の三つの部隊に分かれる。ヤトヴァグ人は後衛部隊を襲撃し、さらに本隊と全面的に戦う】

翌朝、すべてのヤトヴァグ人が集まった。歩兵も騎兵も大変多く、森はかれらで溢れていた。

13) ヤトヴァグ人は防備・反撃の態勢をととのえた上で、ダニールに対しては、すでに捕獲・掠奪は無理であることを通知して撤退を促し、そのことによって遠征軍の分断を図ったのである。

14) この「ルーシ人」(руси)はダニール兄弟の遠征部隊を指している。この個所の文意は分かりにくいだが、ダニール軍にとって幕営を森で切り出した枝でつくった逆茂木(防柵)で囲うような習慣はなく、そのような手間をかけなかったため、敵に見つからず機敏に行動できたということなのか。

15) 以上の描写から、遠征部隊におけるポーランド軍とダニール軍の戦術上の違いを見て取ることができる。ポーランド軍は幕営を逆茂木で囲い、投石や松明を投じる重機を使うなど、大規模な戦備をもって遠征にのぞんでいるのに対して、ルーシ軍は射手(弓箭兵)(стрѣльцы)を中心とした機動的な部隊で遠征にのぞんでいた。コトリアルは反撃が効果的だったことから、この射手(стрѣльцы)は強力な弩(石弓)を装備していたと考えており【Котляр 2005: С. 279-280】、たしかに以下の描写でもダニールの射手は弩(рожанци)を手にしてたことが記されている。

16) 文章があいまいなため、この「かれら」は「遠征軍」のこととも解釈できるが、文脈と英訳の解釈にしたがってこのように訳した。

かれらは決起すると、自分たちのコルイマク、すなわち幕営¹⁷⁾を焼いた。いわゆる主日の日曜日のことだった。

ダニール公 [I111] は前衛として出発し、ボレスワフ配下のポーランド人たち¹⁸⁾とともに遠くへと離れて行った。ヴァシリコ [I112] はシェモヴィトとともに〔本隊に〕とどまった。ラゾリ¹⁹⁾ (Лазорь) はポロヴェツ人²⁰⁾とともに後衛にいた。〔ヤトヴァグ人は〕かれ〔ラゾリ〕を激しく攻撃して、かれの軍旗を奪い取った。かれ〔ラゾリ〕はヴァシリコ [I112] とシェモヴィトのもとに駆けつけた。双方〔遠征軍本隊とヤトヴァグ人たち〕の間で激しい戦いがなされた。双方ともに斃れた者は多かった。ヴァシリコとシェモヴィトは激しい戦いを続けた。

【本隊にいたダニールの宮廷官アンドレイの戦いぶりについて】

宮廷官アンドレイ²¹⁾ は、固い心を持っていたが、身体や両腕は力が弱っていたために、頑強ではなくなり、かれが〔敵の〕戦士たちを突いたときに、槍を取り落として、危うく殺される場所だった。

【本隊のヴァシリコは前衛のダニールに支援を要請し、ダニールは引き返す】

ヴァシリコ [I112] は自分の兄〔ダニール〕に使者を遣ってこう言った。「戦闘は大規模である。われらのもとに急ぎ来たれ」。ダニールは引き返して、【812】かれら〔ヤトヴァグ人〕を森まで追いやった。他の〔味方の軍勢も〕かれらを強襲して、双方ともに斃れた者は多かった。

17) ここの、「幕営、陣営」を意味するチュルク語起源の「コルイマク」(колымак)の語とスラブ語 станによる説明の並記は、1211年のハンガリー人によるズヴェニゴロド攻撃の描写の際にも使われている(『イパーチイ年代記』(10):255頁,注143)参照)。

「幕営を焼く」という行為の意味も分かりにくいですが、長期戦を想定せずに、一気に勝敗を決するという意図の表明なのだろう。

18) この「ポーランド人たち」(ляхи)は、上注8のポーランド人軍司令官スードとシグネフおよびその配下のポーランド人のことを指している。

19) 「ラゾリ」(Лазорь)は反ダニール派のガーリチ貴族ドマジル(Домажир)一族の当主ラゾリを指しているのだろう(『イパーチイ年代記』(11):注394)。かれはこの遠征に、ダニールの呼びかけに応じて参加したが、ダニールとは行動をともにせず、後衛部隊を指揮していた。ここでラゾリの振る舞いが好意的に描かれていないのも、それまでのかれの政治的立場が反映しているのではないか。6725(1217)年の記事(『イパーチイ年代記』(10):278頁,注294)にすでにかれについての言及があることから、かなりの年配者だったと思われる。

20) この記述からも、ダニール=ヴァシリコの対外的な遠征軍の中にポロヴェツ人(ハンガリーからの傭兵?)が混じっていたことがわかる(『イパーチイ年代記』(11):注426)参照)。

21) 「宮廷官アンドレイ」(Андрѣй же дворьскій)はダニールの重臣貴族であり、この時にはヴァシリコがいる本隊に身を置いていた。かれについては、すでに6733(1225年)の記事に、デミヤンと並んでダニールの側近の一人として言及されている(『イパーチイ年代記』(10):295頁,注377)。遠征に従軍して戦ったくらいだから、かれはこの時点でも現役だったが、かなりの年配者だったことは確かである。

フョードル・ドミトロヴィチ²²⁾ (Федоръ Дмитровичъ) は激しく戦って負傷し、この傷のためにナレウ川²³⁾ (Нарѣвъ) で没した。

〔ヤトヴァグ人の侯〕ヤシチェルト²⁴⁾ (Ящелъгъ) は〔ダニールとヴァシリコに対して〕言った。「われらが乗馬したほうが良い〔とでも言うのか〕。そなたたちは、われらのことを残念がって〔見くびって〕いるが、まず、なによりも自分たちのことを残念がるがよい、自分たちの名誉〔捕獲物〕を得られないことを〔残念がるがよい〕。そなたたちはわれらの首級によって自らの名誉〔捕獲物〕を得る〔ことなど出来るものか〕²⁵⁾」。

【ダニールの巧みな戦術によって遠征軍が有利に戦い、ヤトヴァグ人の防衛部隊は撃ち破られる】

そして次のようになった。ダニール [P111] は自分の戦士たちに下馬するように命じた。〔戦士たちは〕下馬すると、行軍を始めた。行軍することで、ルーシ人、ポーランド人の強さを見たヤトヴァグ人たちは心が弱くなった²⁶⁾。

こうして、かれら〔遠征軍〕は進軍しながら、かれら〔ヤトヴァグ人〕の地を捕獲した。かれら〔遠征軍〕はエウク川²⁷⁾ (рѣка Олегъ) を渡河して、狭い場所に布陣しようとした。ダニール公 [P111] はこれを見て、大声でかれらに言った。「おお、戦士の者たちよ、そなたたちは知

22) 「フョードル・ドミトロヴィチ」(Федоръ Дмитровичъ) は、ダニールの部隊に従軍していたガーリチ貴族と推定される。

23) 「ナレウ川」(Нарѣвъ) は西ブーク川(Буг)の右岸支流の現在のナレウ川(Narew)のこと。シェモヴィト一世配下のポーランド人遠征軍はプウオツク(Plock)方面からブーク川を遡ってナレウ川に入り、ダニール=ヴァシリコの部隊は反対にブーク川を下ってナレウ川方面でポーランド人遠征軍と合流したと考えられる。ここでフョードルは、重傷を負って、ナレウ川まで引き返したときに息絶えたということだろう。

24) 文脈から判断して、「ヤシチェルト」(Ящелъгъ) はヤトヴァグ人の侯の名だろう。本年代記におけるヤトヴァグ人の人名の使用については上注 12 を参照。

25) このダニールにとっての敵将が発した戦場の発言の意味や意図は分かりにくく、現代語訳の解釈もさまざまである。これに続くダニールの下馬戦術との関連で解釈するなら、発言の最初の文を反語的に解釈して、「馬なしで戦っている自分たちのほうが有利であり、自分たちは戦いに勝てる」という主旨の、敵を牽制する言葉と解釈できるのではないか。

26) このダニールの戦術についての描写も分かりにくい。これに続く叙述から判断すると、ヤトヴァグ人は狭い森の中に敵を誘導して、騎馬兵が主体の敵軍の動きを封じようとしたが、ダニールはあえて下馬して、歩兵の隊列をつくって進軍した。自分たちの戦術を見破られたヤトヴァグ人は戦意を喪失したということだろう。

27) 「エウク川」(рѣка Олегъ) は、下注 30 で рѣка Лъкъ と表記される川と同じもので、ナレウ川(Narew)の支流ビエブジャ川(Biebrza)の右岸支流で、現在のエウク川(Elk)に相当し、訳語も現代語で表記した。この川は古プロシア語で Luks と呼ばれ、そのポーランド語形 Lęg/Lęka から Лъкъ の表記が発し、場所をあらわす前置詞 we と融合した語形 Welku から Олегъ の表記が発した(現在のポーランド語表記 Elk も同様)と考えられる。

らないのか。キリスト教徒にとって広い場所で〔戦いに〕強く、異教徒にとって狭い場所、茂み²⁸⁾ (деряждье) の中で〔強くなる〕。これが戦闘の慣習なのだ。〔遠征軍は〕捕獲を行いながら茂み²⁹⁾ (жака) を通過して、開けた場所に到達した。ヤトヴァグ人はそこに陣を張っていたが、かれら〔遠征軍〕に襲いかかった。ルーシ人とポーランド人はかれら〔ヤトヴァグ人〕を追撃し、多くのヤトヴァグ人の諸侯が撃ち殺された。かれら〔ヤトヴァグ人〕をエウク川 (Олеги) まで追い立て、こうして戦闘は終結した。

翌日になって、〔ヤトヴァグ人の〕指揮者は様子が分からず、迷っていた。〔そのうちの〕二人の蛮人 (варьва) が殺され、三人目は生きて捕虜になった。この者は【813】ダニール公 [П111] のところに連行された。〔ダニールは〕かれに言った。「わしを正しい行路に案内せよ。〔そうすれば〕そなたは生き残ることができるだろう」。〔ダニールは〕かれ〔捕虜〕にその保証を与えて、〔捕虜は〕かれ〔ダニール〕を案内した。こうして、〔遠征軍は〕エウク川³⁰⁾ (река Лъкъ) を渡河した³¹⁾。

翌日、かれらに対してプルス人³²⁾ (прусы) とバルタ人³³⁾ (борты) が追撃してきた。〔ダニール軍の〕戦士たちはみな下馬して³⁴⁾、陣営で歩兵の軍装をした。かれらの楯は朝焼けのごとく、かれらの兜は朝陽のごとく、両手に握られた槍は林立する灌木のごとくだった³⁵⁾。射手たちは

28) 「茂み」と訳した деряждье はここが唯一の用例で、ヤトヴァグ人の言葉 (古プルス語) をとったと思われるが、語義は不明。文脈から解釈して「茂み」とした。別の戦闘場面の文言 ис хвороста (茂みから引き出す) (下注 203) に相当すると思われる。枝をもちいた人工的な逆茂木とする説もある ([Котляр 2005: С. 280])。

29) 前注と同様に、жака 語も希有な用例で語義は不分明。やはりヤトヴァグ人の言葉に発し、前注の語とほぼ同じ意味を持っているのではないか。ロシア語、ウクライナ語、英語の訳も、これを「森、茂み」と解釈している。

30) 上注 27 を参照。

31) すでに十分な掠奪・捕獲を行っていたダニールは、帰還することを決め、最短の帰路について捕虜に問いただしたのである。次に述べられているプルス人とバルタ人の援軍が到来する情報が入っていたのかもしれない。

32) 「プルス人」(прусы; пруссы) は、「ブルーセン人」「プロイセン人」とも表記され、ヴィスワ川とネマン川の流域に居住するバルト語族古プロシア人の民族名。ヤトヴァグ人と近縁の民族である。かれらは、13 世紀の 30 年代にチュートン騎士団と戦い、1283 年に騎士団によって征服された。

33) 「バルタ人」(борты; барты) は、「湿地」を意味する *bor- から形成されたと考えられ、ドゥスブルグのペトルス (Petrus de Dusburg) の『プロイセン年代記』(Chronicon terrae Prussiae) (1326 年頃成立) に Bartha (バルタ) として表記されるプルス人の代表的な部族である。ラヴァ川 = ウィナ川 (Лавалына) の中下流域、シフィナ川 (Świna) 流域、マムリ湖 (Mamry) 周辺に広範な居住区域を持っていた。この地はバルティア (Bartia) と呼ばれる。[Петр из Дусбурга 1997: С. 274]。

34) この戦術については、上注 26 を参照。

35) このダニール軍の軍装の比喩的描写には、宮廷に伝わっていた諸公の軍功を讃える頌歌からの影響をうかがうことができるだろう (下注 39 参照)。

両側を進み、その手には自分たちの弩弓 (рожанци) が握られ、〔敵の〕軍兵に向かって、かれらに対して矢を射かけていた。ダニール [I111] は馬上で戦士たちを指揮していた。プルス人がヤトヴァグ人に言った。「お前たちは木槍で大木を支えることなど、このような軍隊を攻撃するなどできるものではない」³⁶⁾。ヤトヴァグ人はこれを見て、撤退して帰郷した。

ダニール公 [I111] は、そこからヴィズナ³⁷⁾ (Визьна) へ行き、〔そこから〕ナレウ川 (Наровь) を渡った³⁸⁾。

【ダニールとヴァシリコへの讃詞】

二人〔ダニールとヴァシリコ〕は、多数のキリスト教徒を虜囚の身から救い出した。かれら二人に対して栄光の歌が唱われ、神はかれら二人を救い、二人は栄光とともに自らの地に帰って来た。自分たちの父、大いなるロマン [I11] の道を継いだのである。かれ〔ロマン公〕は、かつて研いだ剣で異教徒を獅子のごとく襲撃し³⁹⁾、ポロヴェツ人はこれを持ち出して子供たちを脅かしたのだった⁴⁰⁾。

36) この「木槍で大木を支える」(поддръжати древо суличами)の比喩表現は、「衆寡敵せず」を意味する格言で、おそらくダニール軍の周辺で用いられていたものを、ここではプルス人の口から言わせただけではないか。

37) 「ヴィズナ」(Визьна, Визна)は、ナレウ川(Narew; Нарев)右岸に位置する城砦で、現在のヴィズナ(Wizna)村に相当する。ここから4kmほどナレウ川上流にビエブジャ川(Biebrza: Бобр)の河口がある。ヴィズナは、ヤトヴァグ人の地とマゾフシェ公領との境界に相当するナレウ川における、ポーランド人側の拠点だったのだろう。

38) ナレウ川(Narew)の右岸から左岸に渡って南下し、マゾフシェ公領に入ったということ。

39) ロマン公が「獅子のごとく異教徒を」(<...> на понганья, яко левъ)討ったことについては、まったく同じ表現が本年代記の冒頭[Стб. 716]に記されている[イパーチ年代記(10):231頁]。直前の「栄光の歌が唱われ」(пѣсьнь славу пояху)の一節も含めて(この語句は口承文芸のフィリーナの中で славу поют の定型句として伝わっている[水上2005])、本年代記が一貫して、おそらくガーリチの宮廷に伝わっていた諸公の功業を讃える頌歌を資料として用いていることが分かる([Котляр2005:С.280]参照)(上注35も参照)。

40) ロマン公についての口伝(叙事詩)がポロヴェツ人たちの間に伝わり、かれらの口承文芸(フォークロア)に取り入れられていたことを示す一節。本年代記のポロヴェツ人口承資料の利用は、冒頭の首長オトロク帰還物語とその息子コンチャクへの讃辞にも見ることができる([イパーチ年代記(10):233-234頁, 注20]参照)。

6760 [1252] 年

【ダニールは、ハンガリー王ベーラ四世からオーストリア大公位争奪戦の援軍の要請を受ける：1248/1249 年】

ハンガリー王 [ベーラ四世] はダニールに使者を遣って、かれに援軍を求めた⁴¹⁾。【814】〔王は〕ドイツ人と戦争をしていたからである⁴²⁾。

【ダニールの援軍はブラチスラヴァへと到来。皇帝側の使節団と面会する：1249 年夏】

〔ダニールは〕かれ〔王〕のところに援軍に向かい、ポージェグ⁴³⁾ (Пожг) にやって来た。

かれ〔ダニール〕のところにドイツ人の使者たちがやってきた。なぜなら、皇帝⁴⁴⁾ はラグザ⁴⁵⁾ (Ракушьска) とシチリア⁴⁶⁾ (Штирьска) の地をひとりで領有して、大公 (герцог) はすでに殺されていたからである⁴⁷⁾。

41) ダニールは、1247年に息子レフ [S2] とベーラ四世の王女コンスタンツァの婚姻同盟を結んで ([イパーチイ年代記 (11) : 注 485] 参照) からは、ハンガリー王とは同盟関係にあった。

42) この「ドイツ人と戦争をしていた」とは、1246年6月にバーベンベルク家出身のオーストリア大公フリードリヒ二世闘争公 (Friedrich II der Streitbare) が、ハンガリー王ベーラ四世にライタ川の戦い (この戦いダニールもハンガリー王の陣営で参戦していた可能性が高い [Майоров 2012a]) で敗れ戦死したために、バーベンベルク家が存続の危機に直面した。そして、1247年初頭にベーラ王は教皇に対してオーストリアおよびシュタイアーマルク公国の継承権を主張し、その後、継承権をめぐる神聖ローマ皇帝の陣営と長期にわたって争った一連の事態を指している。1254年に両公国の大半は一旦はベーラ四世が獲得したが、オーストリア公フリードリヒ二世の義兄にあたる (下注 113 参照) プシェミスル家のモラヴィア辺境伯 (後にボヘミア王) オタカル二世 (皇帝陣営) が、1260年のクレッセンブルンの戦いでベーラ四世を破り、最終的に両公国の大公位を得ている (1273年まで)。

43) 「ポージェグ」(Пожг) は、ハンガリー語の Pozsony (ポジョニ) に由来する表記で、現在のスロヴァキア共和国の首都ブラチスラヴァ (Bratislava) (ドイツ語名「プレスブルグ」(Pressburg)) に相当する。以下の記述からわかるように、ダニールがポージェグ (ブラチスラヴァ) に来たのは戦うためではなく、そこで行われた神聖ローマ皇帝 (次注) 側とベーラ四世との講和の場に立ち会うためだった。

44) この「皇帝」(царь) は、神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世 (Friedrich II) (在位 1220年 ~ 1250年) のこと。[イパーチイ年代記 (11) : 注 157] 参照。

45) 「ラグザ」(земля Ракушьска) の地とは、現在のクロアチアのドゥブロヴニク (Dubrovnik) の古名、ラグザ (Ragusa; Ragusium) にその名が由来し、アドリア海沿岸のダルマチア最南部一帯をさしている。ここでは、皇帝フリードリヒ二世が支配を確立した範囲の南境界地方のこと。

46) 「シチリアの地」(земля Штирьска) は、ドイツ語のシュタイアーマルク地方 (Steiermark) に相当し、現在のオーストリア南部地方を指す。

47) この「大公」(герцокъ; ドイツ語 herzog からの借用語) は、以前の文章でやはり「大公」(гѣрцик) として言及されていた [イパーチイ年代記 (11) : 注 158]、オーストリア大公 (herzog) フリードリヒ二世闘争公のことで、かれは 1246年に戦死している (上注 42 を参照)。

この部分は、すでに皇帝が係争の公国の支配を確立し、あとは継承権を主張するベーラ四世と講和によって解決する段階にあったという文脈に解釈することができる。

使者たちの名前は次の通りだった。皇帝の軍司令官⁴⁸⁾、ザルツブルグすなわち「塩の町」の司教⁴⁹⁾ (пискупъ Жалосьпурьскый, рекомый сольскый), ブルノのハインリッヒ⁵⁰⁾ (Гарих Поруньскый), プトゥイのオットー・ハレテニク⁵¹⁾ (Ота Гаретенникъ Пѣтовьскый)。

【ドイツ人使節たちの前に現れたダニールとその部隊の軍装の見事さについて：1249年夏】

王〔ベーラ四世〕もかれら〔ドイツ人の使者たち〕と一緒にダニール公を迎えに出た。ダニール [П111] はかれ〔ベーラ四世〕のところにやって来ると、自分の家来たちをすべて部隊編成して整列させた。ドイツ人はタートル式の軍装に驚いた。馬は馬面をほどこされ、革を重ねた馬鎧⁵²⁾をまとい、家来たちも鎧⁵³⁾を着ていた。かれ〔ダニール〕の部隊はその武器の輝きによって大いに明るかった。

〔ダニールは〕ルーシの慣習にしたがって、自身が〔ハンガリー〕王の傍らを馬で進んだ⁵⁴⁾。かれ〔ダニール〕が乗った馬は驚きに値するものだった。鞍には金貼りがなされ、矢と刀剣は黄金やその他の装飾がほどこされ、驚くべきものだった。外套 (кожюхъ) はギリシアの高級絹織物⁵⁵⁾ (оловир) で〔仕立てられ〕広い金糸のレースで縁飾りがなされ、長靴は緑の革 (хъзь) を

48) 「皇帝の軍司令官」(воевода царевъ) は一般的な高位職の名称であり特定は難しいが、ウクライナ語訳の注は、1235年に神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世からブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公の地位を与えられた領邦君主オットー一世(1204～1252年)に比定している。

49) 当時のザルツブルグ司教は、フィリップ・フォン・シュボンハイム(Philipp von Sponheim)(在位1247～1256年)だった。

50) 「ブルノのハインリッヒ」(Гарих Поруньскый)についてはその出自等は不明。

51) 「プトゥイのオットー」(Отагаретенникъ Пѣтовьскый)は、当時ザルツブルグ司教座の配下にあった、現在のスロヴェニアのプトゥイ(Ptuj; Пѣтовъ, ドイツ語: Pettau, ラテン語: Poetovio, Poetovium, ハンガリー語: Potoly)出身者で、ロシア語訳は Ота Гаретенник と文綴して、「オットー・ハレテニク」(Отто Гаретенник)という人物に比定している。ただし、その出自等は不明。

52) 「革を重ねた馬鎧」(в коярѣхъ кожанныхъ)のкоярの語は用例がこの個所だけの稀な語だが、モンゴル式の革と鉄の馬鎧を意味するチュルク語からの借用と推定される。[Горелик 1987: С. 197, 200]

53) 「鎧」(ярыки)は、革と鉄の鎧をあらわすチュルク語起源の言葉。

54) この王の「馬の傍らを行く」振る舞いは、1235年にダニールがベーラ四世のハンガリー王戴冠式の時の儀礼における振る舞いと類似であり[イパーチイ年代記(11):注120], ハンガリー王に対する臣従の身振りとして理解すべきである[Майоров 2014: С. 226]参照。「ルーシの習慣」(обычай рускъ)というの、両君主の上下関係が慣例として定まっていたということだろう(下注56も参照)。

55) この「絹織物」(оловир)の語について、マイオーロフは、中世ギリシア語 holoverus に由来し、これはギリシア語 óloj (全体の)とラテン語 verus (真実の)の組み合わせで、「真正の生地」さらには、皇帝が身に付ける「真の緋色生地」の意味を持つという。そこから、最高の絹地についてこの語が用いられた。その生地で作られた、貴重な貝紫で染められた「外套」(кожюхъ; кожух)は、非常に高価であると同時に皇位・王位の伝統的な象徴とみなされていた。そのため簡単に入手できるものではなかった[Майоров 2014: С. 229-230]。

金糸で縫い上げたものだった。ドイツ人たちはこれを見てたいへん驚いた。

【ハンガリー王ベーラ四世は戦場でダニールに荣誉を与える：1249 年】

〔ハンガリー〕王はかれ〔ダニール〕に言った。「わしは銀貨千枚を〔提示されても〕受け取るつもりはない。そなたが、自らの父祖以来のルーシの習慣によって〔援軍に〕来てくれさえすれば」⁵⁶⁾。そして、〔ダニールは〕かれ〔王に〕幕営に入れてくれるよう求めた。なぜなら、**[815]** その日は大変な酷暑だったからである。王はかれ〔ダニール〕の手を取ると、自分の幕舎の中に導き、自らの手で上衣を脱がせると、自分の衣服を着せた。このような荣誉をかれ〔ダニール〕に与えたのである。

かれ〔ダニール〕は自分の家へと戻って来た⁵⁷⁾。

【リトアニア王ミンダウガスは同族諸侯三人をスモレンスク方面のルーシへ遠征に派遣する：1248/1249 年冬】

その年、ミンダウガス (Миндогъ) は自分の甥のタウトヴィラス⁵⁸⁾ (Тевтевил) とゲドヴィダス⁵⁹⁾ (Едивид) を追い出した⁶⁰⁾。〔すなわち〕かれ〔ミンダウガス〕は、自分の母方の伯叔父ヴィ

56) マイオーロフは、この王の言葉を直前のダニールとその部隊の軍備の描写と関係づけて理解して、このような王者のような華美な軍装ではなく、伝統的な（「父祖伝来」）ロシア式の軍装（「ルーシの習慣」）で来るべきだったと苦言を呈したと考えている。続く幕営での王の動作の意味を、軍装を地味なもの（ロシア式軍装）に着替えさせたこととすれば、そのような理解も可能であり、本翻訳もその解釈に従った [Майоров 2014: C. 227]。ここでも上注 54 と同様に「ルーシの習慣」が言及されており、全体としてこの言葉は、両君主の主従関係を無視したダニールに対する、ハンガリー王の皮肉とも解釈できるだろう。

57) ベーラ四世はこのボージェグ（ブラチスラヴァ）での皇帝の使節団との和議で一定の合意を見たため、この時は戦闘までには到らず、ダニールは撤兵を余儀なくされた [Котляр 2005: C. 282]。

58) 「タウトヴィラス」(Тевтевил, Тевтвиул, Товтевил) は、ミンダウガスにとって「自分の甥」(сыновец свой) であるリトアニア公。その父親は、6723(1215)年の記事でミンダウガスの兄弟として言及されているダウスブルンガス (Довьспрунк) と推定されている。かれはのちにポロツクの公座に就いている (1254 年)。

59) 「ゲドヴィダス」(Едивид) については、そのまま読めば「エドヴィド」(リトアニア語読みで「エディヴィダス」) となるが、研究文献では通用のリトアニア人名にあわせて Gedvydas と表記しているため、ここでもその読みである「ゲドヴィダス」を採用した。この人物については、タウトヴィラス (前注) にかかる単数形の「自分の甥」をかれについても適用して解釈し、タウトヴィラスの兄弟 (ミンダウガスの甥) とする説が主流である。

60) この「追い出した」(изгна) は、次の甥たちのスモレンスク方面への遠征の派遣のことを指している。リトアニア統一のための障害となる親族諸公を遠地へ遠征させて、掠奪地に追いやることを「追い出す」と表現したと考えられる。

キンタス⁶¹⁾ (Выконт) とともに、ルーシ人を掠奪するためモレンスクへ向けて、〔タウトヴィラスとゲドヴィダスを〕戦争のために派遣した。そして〔ミンダウガスは三人の同族諸侯に対して〕言った「誰かが何かを奪い取ったら、それはその者のものになる」⁶²⁾。

【二人の同族侯がミンダウガスに追われてダニールのもとに身を寄せる：1249年】

〔そのように言ったのは〕邪意によるもので、〔ミンダウガスは〕、かれら〔同族諸侯〕と敵対していたがゆえに、悪意〔呪術〕をもってリトアニアを占領した〔からである〕。リトアニアの地のすべては〔ミンダウガスに〕領有された。かれらの無数の領地も〔ミンダウガスに〕領有された。かれらの富も〔ミンダウガスに〕奪い取られた。

〔ミンダウガスは〕かれらを討つべく自分の軍兵を派遣し、かれら〔甥たち〕を殺そうとした。かれらはこれを知って、ダニール〔公〕とヴァシリコ公のもとに逃げ、ヴラジミル〔=ヴォルィンスキイ〕にやって来た⁶³⁾。

ミンダウガスは自分の使節団を〔ダニールとヴァシリコに向けて〕派遣して、「かれら二人に憐れみを施すな」と言った。ダニールとヴァシリコはその〔言葉に〕聴き従わなかった。な

61) 「ヴィキンタス」(Выконт) については、6723(1215)年の記事でロマン一族と和を結ぶために派遣された(実際は1219/1220年)ジェマイティア公の一人として言及されている([イパーチイ年代記(10): 276頁]参照)。かれがジェマイティア公であること、タウトヴィラスにとっての「母方の伯叔父」(вуй)であることはこれに続く叙述でも繰り返し替えされている(下注84参照)。なお、「母方の伯叔父」については、イパーチイ写本は съ воємъ своими (自分の軍隊とともに) となっているが、諸現代語訳にならってフレーブニコフ写本の読み съ вуємъ своимъ を採用した。なお、вуй (母方の伯叔父) を親族・姻族を問わない伯叔父一般と広く解釈して、ヴィキンタスは、タイトヴィラスの父方の叔母(ミンダウガスの姉妹にあたる)が嫁いだ先のジェマイティア公と解釈するのが通説となっている。

62) ミンダウガスにとっては、これが3人の親族諸公を追いやるための口実であることは明らかである(上注60参照)。

なお、『ラヴレンチイ年代記』によれば、1248/1249年冬に、当時モスクワ公だったミハイル・ヤロスラヴィチ勇猛公(Михаил Ярославич Храбрый) [K48] が「異教のリトアニア人によって殺された」とあり、続いて同じ冬に「ズブツェフ〔ヴォルガ川上流でモレンスクからは北東へ220kmほど離れた城市 Зубцов〕でスーズダリ公〔スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [K6] のこと〕がリトアニアに勝利した」という記事がある[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 471- 472]。これが、3人のルーシへの掠奪遠征についての記述と考えられるが、かれらは遙かモレンスクを過ぎて東へと遠征したことになる。結局、この掠奪遠征は失敗して帰還したようである。

63) このミンダウガスによる追放劇によって、リトアニア諸公とダニール兄弟との安定した関係の基礎となっていた1219年の条約がミンダウガスによって破棄され、対立的関係に転化した[Пашуто 1950: С.246-47]。

ぜんら、かれら二人の姉妹がダニールに嫁いでいたからであった⁶⁴⁾。

【ダニールはポーランドに、リトアニアのミンダウガス討伐の遠征を提案するが受け入れられず：1249 年】

その後ダニール [I111] は自分の弟〔ヴァシリコ〕と評議して、ポーランド諸公⁶⁵⁾のもとに使者を遣ってこう言った。「[今こそ] キリスト教にとって異教徒を攻める時である。かれら〔異教徒〕自身がお互いに戦争をしているのだから」。ポーランド人は〔攻めることを〕約束をしたが、実行しなかった。

【ダニール兄弟は、ヴィキンタスをヤトヴァグ人、ジェマイティア人、リヴォニア騎士団のもとに派遣して、対ミンダウガス同盟の約束をとりつける：1249 年】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の二人は、ヴィキンタス (Выкынт) をヤトヴァグ人、ジェマイティア人⁶⁶⁾ (жемойт)〔のところへ〕、ドイツ人⁶⁷⁾ (нѣмцы) のところへ、**[816]** すなわちリガ (Рига) へと派遣した。ヴィキンタスは銀と多くの贈物をもってヤトヴァグ人と半数のジェマイティア人を納得させた。ドイツ人はダニール [I111] に対してこう答えた。「われらは、そなたのためにヴィキンタスと和を結ぼう。かれ〔ヴィキンタス〕はわれらの兄弟の多くを殺し

64) この記述を文字通りに解釈してダニールがリトアニア公女（ミンダウガスの姪にあたる）と結婚したと理解する説もあるが（[Домбровский 2015: С. 325] など）、のちに息子のシヴァルン [S5] がミンダウガスの娘と結婚しており、これは教会法上の禁止（6 親等間の結婚）に触れることになり不自然である。ロシア語訳の注は、「かれら二人の姉」（сестра...ю）を、従姉妹（двоюродная сестра）と解釈して、ダニールの公妃アンナ・ムスチスラヴナ（〔イパーチイ年代記 (10) : 269 頁, 注 230] 参照）を指すとしている。その理由として、アンナの母親はポロヴェツ人コチャン (Кочан) の娘であり、コチャンの別の娘が、「かれら二人」の父親ダウスブルンガス（注 58）に嫁いでいる（つまりかれらの母親）ことによるとして、母系の関係から説明している。ただし、コチャンの別の娘の結婚に関する史料の根拠は示されていない。

いずれにせよ、ミンダウガスの甥たちの亡命とダニールのかれらへの庇護には親族（姻族）関係が大きな役割を果たしていたことは確かだろう。

65) 「ポーランド諸公」（лядські князи）について具体的に示されていないが、これまでダニールと同盟を結んで良好な関係にあり、リトアニア人と対立していたシェモヴィト一世（上注 3 参照）を初めとするマゾフシェ地方の諸公を指しているだろう。

66) 「ジェマイティア」（жемойт）は、サモギチア (Samogitia) とも呼ばれる地方で、ミンダウガスが支配するリトアニアの中心アウクシタイティアの西境界に接する地域を指している（〔イパーチイ年代記 (10) : 276 頁, 注 285] 参照）。

67) 「ドイツ人」は、当時リガを拠点としてバルト海域に移住し、植民経営をしていたドイツ騎士団（リヴォニア騎士団）を指している。

ただのだけれど⁶⁸⁾」。ドイツ人の兄弟たちはタウトヴィラス (Тевтивул) を助けることを約束した。

【ダニール兄弟と息子レフは、ミンダウガス支配地のノヴォグルードク方面へ遠征し、諸城市を占領する：1249～1250年】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は、ノヴォグルードク⁶⁹⁾ (Новгород) へ向けて進軍を始めた。ダニール [I111] とかれの弟のヴァシリコ [I112] は、息子⁷⁰⁾ [レフ [S2]] と評議して [次のことを] 決めた。すなわち、弟 [ヴァシリコ] はヴォルコヴィエスク⁷¹⁾ (Волковыескъ) を攻め、息子 [レフ] はスロニム⁷²⁾ (Слонимъ) を攻め、[ダニール] 自身はズデイトフ⁷³⁾ (Здитов) へ行くことにした。そして、多くの城市を奪い取って、故郷へと帰還した。

【ヴィキンタスの要請により、ダニールはタウトヴィラス指揮下の部隊を派遣。タウトヴィラスはミンダウガス軍を討ち、リガへ凱旋して洗礼を受ける：1250年】

その後、ヴィキンタスが [リガからダニールのもとへ] 使者を送ってきて、「ドイツ人はタウトヴィラスを助けるために軍を挙げようとしています」と言った。ダニール [I111] は、タウトヴィラスを [遠征隊として] 派遣した。そして、その援軍としてルーシ人とポロヴェツ人⁷⁴⁾ をかれ [タウトヴィラス] に伴わせた。かれらの間には多くの戦いがあった。

そこから、タウトヴィラスは、ダニールのための捕虜を連れてリガへと出発した。リガ人は

68) 「われらの兄弟」(наша братья)「ドイツ人の兄弟たち」(немци братья)の「兄弟」とは、リヴォニア騎士団の騎士修道会士 (Orden der Brüder) を指している。1236年9月に騎士団領とジェマイティアの境界地帯ザウレ (シャウレン) (Saule; Schaulen) でヴィキンタス率いるジェマイティア軍が騎士団を撃ち破ったザウレの戦いは、騎士団側に多くの犠牲者を出した屈辱的な敗北だった。「兄弟の多くを殺した」とはこのときの敗戦を指すのだろう。

69) 文字通りでは「ノヴゴロド」だが、文脈と地理関係からみて、現在のベラルーシ、グロドノ州の都市ナヴァフルダク (Навагрудак) (翻訳では「ノヴォグルードク」と表記) を指している。

70) この「息子」(сын) は文脈からみてダニールの息子であり、年齢的にみてレフ [S2] を指すと思われる。

71) 「ヴォルコヴィエスク」(Волковыескъ) は、現在のベラルーシ、グロドノ州の州都ヴァウカヴィスク (Ваўкавыск) に相当する。スロニムからは西へ60kmほど離れている。この城市はミンダウガスの息子ヴァイシュヴィルカス (Войшелк) の支配地とされており、リトアニア公にとっては重要な拠点だった [Котляр 2005: С. 283]。下注 185 も参照。

72) 「スロニム」(Слонимъ、イパーチイ写本の表記は Услонимъ) は、現在のベラルーシのスロニム市 (Слонім) に相当している。やはり、ヴァイシュヴィルカスの支配地だった。これについては、下注 184 を参照。

73) 「ズデイトフ」(Здитов) の所在地は、ウクライナ語訳索引によれば、スロニム (前注) から80kmほど南の、ベラルーシ、プレスト州、ドラギチン区のスタラムリニ村 (Старамлыны) 近郊の遺跡に推定されている。

74) コトリャールは戦力の補給のために、ダニールがハンガリー (バンノニア) のポロヴェツ人を呼び寄せた可能性を指摘している [Котляр 2005: С. 284]。

かれを大いなる名誉とともに受け入れ、かれは〔キリスト教徒の〕洗礼を受けた。

【非勢のミンダウガスはリガの騎士団長へ向けて同盟を提案する密使を遣る。騎士団長は同意の条件として改宗を求める：1250 年】

ミンダウガスは、神の騎士たち⁷⁵⁾、司教⁷⁶⁾、すべてのリガの戦士たちがかれ〔タウトヴィラス〕を助けようとしているのを見て、恐ろしくなり、ひそかに、リガの騎士団長アンドレアス⁷⁷⁾に宛てて密使を派遣して、多くの贈物によって説得をはかった。すなわち、かれを承諾させた。なぜなら、多くの黄金と銀、金覆いや彩色をほどこされた銀器、多くの馬を贈物として与えたからである【817】。そして〔ミンダウガスはアンドレアスに〕こう言った。「もしそなたが、タウトヴィラスを殺すか追放してくれたなら、さらにより多くのものをそなたは受け取ることができるだろう」。かれ〔アンドレアス〕は〔答えて〕言った。「そなたは、教皇⁷⁸⁾〔イノケンチウス四世〕に使者を派遣して、洗礼を受け入れ、敵を打ち破らなければ、救われることはないだろう。〔そのようにすれば〕わしはそなたと友好を持つだろう」。

【ミンダウガスは教皇に使節を遣って偽りの洗礼を受けて王として戴冠するが、密かに異教を信奉する：1253 年夏】

おお、悪より悪しきことよ！〔わたしは〕黄金で自らの眼をくらませたが、今再びかれらから災いを受けようとしている。こうして、ミンダウガスは教皇〔イノケンチウス四世〕へ使節を送って洗礼を受け入れた⁷⁹⁾。かれの洗礼は偽りのもので、自分の神々を密かに祀っていた。〔その神々とは〕、第一にノナデイ (Ньнадѣй)、そしてテリャヴェリ (Телявель)、兎の神デイヴィリ

75) 「神の騎士たち」(божии дворянѣ) は、ドイツ騎士団の騎士が自称していた称号 "Ridder Gots", "Gottesridder" の翻訳借用語。13 世紀のノヴゴロドの年代記にもこの意味でこの表現が用いられている。

76) 当時のリガ司教はニコラス・ナウエン (Nicholas of Nauen) (在位 1229 ~ 1253 年) だった。

77) 「リガの騎士団長アンドレアス」(Андрѣй мастер рижьский) は、当時のリヴォニア騎士団 (ドイツ騎士団) 団長 (Landmaster) のアンドレアス・フォン・シティールランド (Andreas von Stierland) (在位: 1248-1253 年) のこと。

78) この「教皇」(папа) は、第 180 代ローマ教皇イノケンティウス 4 世 (Innocentius IV) (在位 1243 ~ 1254 年) を指している。

79) このように、ミンダウガスは騎士団長アンドレアスに贈物を与えることで、国王として受洗してリトアニアをキリスト教化する意向を見せた。ミンダウガスにとっては、騎士団との対立や同族間の抗争の調停をキリスト教勢力に求めたと思われる。大量の贈物の効果もあってか、騎士団長アンドレアスはミンダウガスの提案を教皇に通し、1251 年 6 月には教皇イノケンティウス四世の戴冠の勅書が出され、2 年後の 1253 年 7 月に、ミンダウガスはリガにおいて、アンドレアスの主導により、ヘウムノ (Chelumno, ドイツ語名 Kulm) 司教ハインリヒ = ハイデンリヒ (Heinrich-Heidenryk) (在位 1245-1263 年) の手でキリスト教徒の王として戴冠を受けた ([Пашуто 1950: C.247][Пресняков 1939: C. 50-51] 参照)。

クス (Диверикъз), メイデイン (Мъидфин) などだった⁸⁰⁾。かれ〔ミンダウガス〕が野に出ると、野で兎を追うときも、森や叢林のなかには入ろうとせず、鞭を折ることさえもしなかった。〔こうして〕自分の神々を祀り、死者の死体を焼き、自らの異教〔儀礼〕を大っぴらに行っていた。

【リガ司教等はタウトヴィラスを庇護して、騎士団長を追放する：1253年】

司教⁸¹⁾ (пискупъ) とリガ人の主席⁸²⁾ (пребошь ви-ръжань) は、タウトヴィラスに〔ミンダウガスとアンドレアスの謀議について〕告げた。かれ〔タウトヴィラス〕を憐れんだのである。かれらは知っていた。タウトヴィラスが追放されないでいれば、〔その間は〕リトアニアの地はかれらの手中にあり、〔リトアニア人は〕否応なく洗礼を受けるであろうことを。これらすべてのリトアニア人が洗礼を受けていないのは〔騎士団長〕アンドレアスがそのようにしたからだった。そのため、かれ〔アンドレアス〕は兄弟たち〔騎士団〕から自らの〔団長の〕位を剥奪されて追われた⁸³⁾。

【タウトヴィラスはリガからジェマイティアのヴィキンタスのもとに亡命し、同盟軍を組織してミンダウガス討伐に向かう：1251年】

〔他方、〕タウトヴィラス (Тевтевил) は、ジェマイティアへ、自分の母方の叔父ヴィキンタス⁸⁴⁾ (Выкынт) のもとへと逃げた。〔そしてタウトヴィラスは〕ヤトヴァグ人、ジェマイティア人、ダニール [I111] の援軍を受け入れた。その援軍とは、ダニールが以前にかれ〔タウトヴィラス〕に与えたものだった。かれ〔タウトヴィラス〕はミンダウガスを討つべく進軍した。【818】

80) ここに記されているリトアニアの異教神については不明な点が多いが、「ディヴィリクス」(Диверикъз) は、下注 253 にも言及があり、最高神 (リトアニア語 dievų rikis) を指すという説が有力である。さらには「神の鞭」(リトアニア語 Dievo rykštė) と解釈して、雷神 (ロシア語のペルーン、リトアニア語のベルナス) の別名とする説もある。

81) リガ司教ニコラス・ナウエンのこと (上注 76 を参照)。

82) 「リガ人の主席」(пребошь ви-ръжань) は、リガ司教に次ぐ役職である「主席」(プロボスト, propst, probst; пробст) の地位にある者で、当時はヨハネス (Johann) が就いていた。「リガ人の」(ви-ръжань) の解釈は固有名詞とする説もあるが、写本の表記の乱れと解釈した。

83) ミンダウガスの国王戴冠をめぐる、リガを管轄する大司教アルベルト・ズエルベル (Albert Suerbeer) (在位 1253 ~ 1273 年) はこの事態にまったく関与しておらず、これに関連して「リトアニア司教区」も教皇直属で、リガ大司教区からは独立するとされた。大主教はこれに反発して、リトアニア司教候補のクリスタヌスを自らの手で叙聖するなど対抗し、教皇陣営との間での対立が表面化する。その過程で、騎士団長アンドレアスも、1253 年夏のミンダウガス戴冠ののちまもなく団長の職を解かれて追放されることになった ([Пресняков 1939: С. 50-51] 参照)。

84) タウトヴィラスとヴィキンタスの関係については上注 61 を参照。

【ミンダウガスはヴォルタを拠点に、タウトヴィラスの同盟軍を撃破する：1251 年】

ミンダウガスは〔軍を〕集めていた。かれは、かれら〔タウトヴィラスと同盟軍〕の遠征隊と〔野戦で〕戦う意図はなく、ヴォルタ⁸⁵⁾ (Вору́та) という名の城市に入った。そして、夜に〔ミンダウガスは自分の〕義理の兄弟⁸⁶⁾を〔先遣隊として城内から〕派遣した。〔しかし〕ルーシ人とヤトヴァグ人が〔この先遣隊を〕を追い散らした。

翌朝、ドイツ人⁸⁷⁾は石弓を手に〔ヴォルタの城市を〕出陣した。〔ドイツ人たちは〕、弓矢を手にしたルーシ人とポロヴェツ人、投げ槍を手にしたヤトヴァグ人に襲いかかり、あたかも模擬試合のごとく原野に〔かれらを〕追い回した。そこから〔ミンダウガスは〕転進してジェマイティアへと進軍した。

【ミンダウガスは西進してジェマイティアの城市トヴィレメトを攻める。城下で戦闘のすえ帰還する：1251 年】

そして、ミンダウガスは大勢力を集めてヴィキンタス〔がいる〕トヴィレメト⁸⁸⁾ (Твиреметь) という名の城市へと到来した。タウトヴィラスは城市から出撃した。ルーシ人、ダニール [I111] 配下のポロヴェツ人もかれら〔ヴィキンタスとタウトヴィラス〕とともにおり、ジェマイティア人もかれらとともに多数の歩兵として〔行動していた〕。かれ〔ミンダウガス〕を追いかけて、ひとりのポロヴェツ人がミンダウガスの馬の脚のところに矢を当てた。

ミンダウガスは自分の地に帰還した。多くの戦士たちが互いに戦った。ヴィスマンタ

85) 「ヴォルタ」(Вору́та; Voruta) は、ここにミンダウガスの拠点地として言及されているが、その後のミンダウガスのリトアニア支配の中心地、首都と見なすのが定説になっている。その場所については諸説があり、確かな説はない。有力な比定地としては、現在のリトアニアのアニクシチ県のシェイミニスケライ (Šeimyniškėliai) の遺跡などが提唱されている。なお、ミンダウガスのノヴォグールドク拠点説をとるベラルーシの研究者 M・エルモロヴィチは、ノヴォグールドクから南へ 32km ほど離れた、ベラルーシのバラナヴィチ区ゴロディシチェ (Гарадзішча) に同定している [Ермаловіч 2001: С. 317]。

86) このミンダウガスにとっての「義理の兄弟」(шурин) について、ロシア語訳の注は、当時ナリシャナの地 (Нальшанская земля) の侯だったダウマンタス (Домонт, Довмонт) ではないかと推定している (ダウマンタスの妻はミンダウガスの妻と姉妹の関係であったとしている)。このダウマンタスは、後にリトアニアからプスコフに逃亡し、1266 年にプスコフの勤務公となり、プスコフの防衛に活躍した人物で、のちに正教会によって列聖されている。

87) この「ドイツ人」(нѣмць) は文脈からみて、ミンダウガスと同盟していた騎士団の騎士・兵士たちを指している。

88) 「トヴィレメト」(Твиреметь) は、現在のリトアニアのリタヴァス県 (Rietavas) トヴェライ村 (Tverai) に相当する。ミンダウガスがヴォルタ (シェイミニスケライ (Šeimyniškėliai) に比定した場合) から出陣したとすると、西に約 200km もの進軍をしたことになる。

ス⁸⁹⁾ (Висимот) という人物が、この城下で殺された。

6761 [1253] 年

【ダニール兄弟等は、ピンスク公を巻き込んでノヴォグルードクの地への掠奪遠征を行い成功を収める：1251/1252 年冬】

タウトヴィラス (Тевтивиль) はレブヴァ⁹⁰⁾ (Ребва) を〔使者としてダニールのもとに〕派遣して、「ノヴォグルードク (Новьгород) へ進軍せよ」と言った⁹¹⁾。

ダニール [П111] は、弟のヴァシリコ [П112]、息子のレフ [S2]、ポロヴェツ人たち、すなわち自分の姻戚のテガク⁹²⁾ (Тѣгакъ) とともに、ピンスク⁹³⁾ (Пиньск) にやって来た。ピンスクの諸公は奸計を弄していたが⁹⁴⁾、〔ダニールは〕かれら〔ピンスク諸公〕を否応なく自分たちとともに戦争へと駆り立てた。

89) 「ヴィスマンタス」(Висимот) はヴィキンタス = タウトヴィラス陣営の軍司令官。かれの名は、6723(1215)年の記事に Вишимут の表記で、講和のために遣された侯のひとりとして言及されている ([イパーチイ年代記 (10) : 276 頁] 参照)。それによると、かれはジェマイティアの侯でブレヴィチ族 (Булевичи) の出身者とされている。またそこでは、「ミンダウガスがかれを殺して、かれの妻を略取した」と、ここで書かれているかれの死についても言及されている。

90) 「レブヴァ」(Ребва) は使者の名だが詳細は不明。タウトヴィラスの同族の可能性が高い。

91) タウトヴィラスは、伯叔父のヴィキンタスのもと身を寄せて、トヴィレメト (現在のトヴェライ村 (Tverai) 上注 88) におり、そこからダニールに使者を遣って、ミンダウガスが支配する黒ルーシ地方の拠点ノヴォグルードクの地を掠奪して弱体化することを進言したのだろう。

92) 「テガク」(Тѣгакъ) はダニール配下のポロヴェツ人の首長の名。かれはダニールにとって「自分の姻戚」(сват свои) となっており、側近的な存在だったのだろう。この「姻戚」(сват) の解釈については、ダニールの息子ムスチスラフ [S4] がテガクの娘と結婚していたというのが通説になっていたが ([Baumgarten 1927: tabl. XI n. 12], ウクライナ語訳注など)、ドムブロフスキは、ムスチスラフではなく、ロマン [S3] が 1248 年から 1251 年にかけてテガクの娘と結婚していたと主張している。その場合、この結婚は、1252 年のロマンとオーストリア大公姉妹ゲルトゥールドとの結婚 (下注 113 参照) の前に破綻していた (妻の死亡?) ことになる [Домбровский 2015: С.376, 378]。

93) ピンスクは、ダニール等ヴォルィニの諸公が、ノヴォグルードクへ遠征するための集合と中継の地点であっただけでなく、ダニール等には、ピンスクの地の諸公 (次注) を遠征に動員する意図があった。

94) この「ピンスク諸公」(князи же пиньсцѣи) はミハイル・ロスチスラヴィチ [В321322] とその同族諸公を指している。かれらが「奸計を弄していた」(имѣяху лєсть) とは、ヴォルィニ公領の北辺の支配において、かれらはダニール兄弟に対して臣従関係にありながら、密かに近隣のリトアニア諸侯と通じていたことを指している。これについては、6755(1247)年の記事を参照 ([イパーチイ年代記 (11) : 注 403, 404])。

〔ノヴォグールドクの〕リトアニア人は先遣部隊をズィヤト⁹⁵⁾(озеро Зьято)へと派遣した。〔しかし先遣隊は〕【819】沼沢地を通してシチャリヤ川⁹⁶⁾(Щарья)のところまで〔ダニール軍によって〕追われた。〔ダニール軍の〕すべての軍兵が集合したとき、評議が行われ、「われわれのことについてはすでに知られている⁹⁷⁾」という発言がなされた。かれら〔軍兵たち〕は言い争って、戦いに出て行こうとはしなかった。するとダニール [111]はその智慧によって次のような言葉を発した。「もし〔ノヴォグールドクの地に〕到達せずして戻るようなことがあれば、われらはリトアニアからも、すべての地からも屈辱を受けることになろう。明日、評議を行おうではないか」。

その夜に〔ダニールは〕すべての軍兵に宛てて使者を遣って、言った。「お前たちは進軍するがよい。すべての〔進軍を〕望まない者も戦いに向かうことが賢明なのだ」。他のすべての〔望まない者たち〕自身も、進軍を始めた軍兵を見て、否応なく進軍を開始した。

翌日、かれら〔ダニール軍〕はすべてのノヴォグールドクの地(земля Новгородская)〔の住民〕を捕獲した。そこから、かれらは故郷へと帰還した。

ヤトヴァグ人はダニール [111]への援軍のために出発したが、〔集合の場所に〕到達することができなかった。なぜなら、大雪が降ったからだった。〔ヤトヴァグ人は〕そこから、神の助けによって、多くの捕虜を獲って帰還した⁹⁸⁾。

【ダニール軍は、ミンダウガスが支配していた黒ルーシ地方を占領する：1252 ~ 1253 年】

その後、〔ダニールは〕、弟〔ヴァシリコ〕と息子のロマン [S3]とともに自分の家来たちを

95) 「ズィヤト湖」(озеро Зьято)は、ウクライナ語索引によれば、現在のベラルーシ、プレスト州イヴァツェヴィチェスク区(Ивацевический)のヴィゴノシチャン湖(Выгонощанское)(別名ヴィゴノフコエ湖(Выгоновское озеро)、ベラルーシ語では Выганаўскае, Выганашчанскае)に相当する。ピンスクからだと北へ60kmほど離れている。

96) 「シチャリヤ川」(Щарья)は、ネマン川左岸から発して南へ流れる現在のベラルーシのシチャラ川(Щара; Шчара)に相当する。ズィヤト湖(ヴィゴノシチャン湖)(前注)の北側数kmのところをかすめるように流れており、沼沢地によって隔てられている。ズィヤト湖まで達したノヴォグールドクのリトアニア人先遣隊は、ダニール軍によってシチャラ川まで追われたということ。

97) この発言は、シチャラ川を越えて、さらに北のノヴォグールドク方面へ掠奪遠征に向かうのは、自分たちの動静が知られているので危険があるということ。そこには、ピンスク公のリトアニア側への内通(льсти)があったことが含意されているだろう。

98) 本年代記に頻繁にあらわれる直前の語句の繰り返し。編集上の不注意によるものなのか、意図的な「手法」なのかの判断は難しい。文脈から判断すると、ここはヤトヴァグ人のことを言っているだろう。

派兵して、かれら二人〔ダニールとヴァシリコ〕はグロドノ⁹⁹⁾ (Городень) を占領した。二人は自らベリスク (Бѣльскъ) から帰還した¹⁰⁰⁾。

その後、二人〔ダニールとヴァシリコ〕は多くの自分の歩兵と騎兵をかれらの諸城市¹⁰¹⁾ へと派遣し、かれら〔ダニールとヴァシリコ〕のすべての父祖の地とかれらの支配地¹⁰²⁾ を捕獲した。

【ミンダウガスは息子を派遣してトゥールスクへ掠奪遠征を行う：1252年】

ミンダウガスは自分の息子を派兵して、【820】 トゥールスク (Турьск) の周辺を掠奪した¹⁰³⁾。

【ミンダウガスはダニールに講和と婚姻同盟を提案する：1253年】

その年、ミンダウガスはダニールに〔使者を〕派遣して和を請い、親愛すなわち姻戚となる

99) 「グロドノ」(Городень)は、現在のベラルーシの州都グロドノ(Гродно)、ベラルーシ語でフロドナ(Гродна)を指している。この城市についての『イパーチイ年代記』におけるこれまでの記述は『キエフ年代記』6691(1183)のグロドノ(Городень)の火災についての記事[イパーチイ年代記(8):200頁、注119]が最後であり、それ以降言及はない。この当時は、ムスチスラフ・フセヴォロドヴィチ[F113]がグロドノ支配公だったが、その後この城市の支配はリトアニア人の手に移ったと考えられる。

100) 「ベリスク」(Бѣльскъ)はこの時同盟していたヤトヴァグ人の拠点地があった城市。現在のポーランドの都市ビエルスク・ポドラスキ(Bielsk Podlaski)に相当する。グロドノからは、西南西の方向へ109kmほど離れている。なお、ここから東北東へ82kmほどでベレスチエ(プレスト)へ達することができる。ダニール等がここを経由してベレスチエへ帰還したのは、かれらがベリスクまで北方へ拠点を広げていたということか。

なおコトリアルはこの「ベリスク」をグロドノから近い場所であるはず[Котляр 2005: C. 286]としているが、どこにあったか示していない。帰還先がベレスチエであったと想定すれば、ビエルスク・ポドラスキはグロドノとのほぼ中間地点に位置しており、合理的な比定地である。

101) 「かれらの諸城市」(их град)の「かれら」は文脈から判断してダニールとヴァシリコを指しているだろう。その「諸城市」はかれらの「父祖の地」「支配地」(次注)に含まれる、グロドノ、ノヴォグロドク、トゥールスク、ヴォルコヴィエスク、スローニムなどの城市を指しているだろう。

102) ダニールとヴァシリコにとっての、「父祖の地」(отчина)および「支配地」(страна)とは、ここでは、歴史的にいわゆる黒ルーシ(Черная Русь)と呼ばれる地方、旧グロドノ公領(上注99を参照)のあった一帯を指している。

103) 「ミンダウガスの息子」とはヴァイシュヴィルカス(Войшелк)のこと。かれは、おそらく「ヴォルコヴィエスク」(Волковыескъ)を拠点としており(上注71を参照)、ここから東進して、ダニール陣営に占領されていたトゥールスク付近を掠奪したのだろう。ミンダウガスはすぐに和平をダニールに申し入れていることからみて(次注参照)、この掠奪遠征は所定の効果を得られなかったのだろう。パシュートは、この時点で、ダニールの勢力は黒ルーシ地方を支配していたとさえ考えている[Пашуто 1950: C. 246]。

ことを望んだ¹⁰⁴⁾。

【同盟していたジェマイティア人とヤトヴァグ人がミンダウガスの贈物による融和策によって離反し、タウトヴィラスはダニールのもとに亡命する：1253 年】

その時、タウトヴィラス (Тевгиль) は、ジェマイティア人とヤトヴァグ人のもとから逃れて、ダニールのもとに駆けつけた¹⁰⁵⁾。〔タウトヴィラスはダニールに〕言った。「ミンダウガスはかれら〔ジェマイティア人とヤトヴァグ人〕を多くの銀をもって説得してしまった¹⁰⁶⁾」。ダニール [1111] は、かれら〔ジェマイティア人とヤトヴァグ人〕に対して怒りを抱いた。

6762 [1254] 年

【年代記記者の記録の方法について】

その年々が過ぎ去った。

年代誌の記者はすべてを、すべてあったことを書く必要がある。時には先に書くこともあれば、時には後から戻って〔書く〕こともある。賢明な者は、読めば理解するだろう。年代の数をわれらはここには書き込まなかった。われらは、後から、アンチオキア計算法、ギリシア式のオリムピックの計算¹⁰⁷⁾、ローマの閏年方式などに則って、〔年代を〕書き入れることにしよう。

104) この「姻戚となること」(о сватъствѣ)とは、ダニールの息子シヴァルン [S5] とミンダウガスの娘との結婚(この段階では婚約)を指している [Домбровский 2015: С. 394]。記事では「望んだ」(хотя) (つまり提案した) とあるが、その後、1254/1255 年に、結婚と和議が成立して (下注 182)、ダニール兄弟とミンダウガスとのこれまでの紛争はひとまずの終息を得た。

105) それまで伯叔父のヴィキンタスのもと (ジェマイティア地方のトヴェライ、上注 88 参照) に身を寄せていたタウトヴィラスは、おそらくヴィキンタスがこの頃に没したこともあって (1251 年以降史料にはヴィキンタスについての言及がない) 庇護者を失い、さらに同盟していたジェマイティア人、ヤトヴァグ人 (その諸侯) がミンダウガス側についたために、権力基盤を完全に失って、同盟者ダニールのもとに庇護を求めて亡命したのである。

106) ミンダウガスはこの時期 (1252 ~ 1253 年) に、リトアニアの内部の支配を固めるために、周辺諸国に対して、領土の譲歩、贈与、キリスト教の受容など積極的な融和政策を展開していた (上注 79 参照)。ジェマイティア人とヤトヴァグ人 (諸侯) に対する贈物もその政策の一環である。

107) 「ギリシア式のオリムピックの計算」(алумпяндамъ гръцкыми же численицами) とは、エウセビオスの『年代記』(Хрoникoи) (次注) の中で取り入れられている、古代オリムピックの年代と勝者を記した年表のような記録の方法のことを言っている。

それは、パンフィロスのエウセビオス¹⁰⁸⁾ (Евъстѣвий Памфиль) や他の年代誌の記者が、アダムからキリストまでの〔年代を〕書き込んだときのように。われらは、すべての年代を書き入れることにしよう、後から計算をしながら¹⁰⁹⁾。

【オーストラリア大公フリードリヒ二世の死とそれに続く権力闘争：1246年4月15日】

フリードリヒ (Фридрих) と呼ばれた大公 (герцук) が殺されてから¹¹⁰⁾ (かれは戦って、ハンガリー王に勝ったのだが、戦闘で自分の貴族たちの手で殺された)、殺された者の名誉や大公領、〔すなわち〕ラグザ (Ракушьска) の地とシチリア (Штирська) の地¹¹¹⁾ をめぐって、力ある人間たちの間で騒動が起こった。ハンガリー王 (король же угорьск рикс) 〔ベーラ四世〕とチェコ王¹¹²⁾ (король чѣшск) がこれ〔二つの地〕のために戦ったのである。

【ダニールの息子ロマンはオーストリア大公の姉妹ゲルトウルードと政略結婚する：1252年6月】

ハンガリー王は立ち上がると **[821]** 支援を求めた。ドイツの地を手に入れようと望んでいた。かれ〔ハンガリー王〕はダニール [111] に使者を遣って、こう言った。「〔そなたの〕息子ロマン [S3] をわしのもとに派遣せよ。わしはかれに大公 (герцик) の姉妹を嫁がせ、ドイツの地を与えよう¹¹³⁾」。そして、〔ハンガリー王は〕ロマン [S3] とともにドイツ人のところに行き、

108) 「パンフィロスのエウセビオス」(Евъстѣвий Памфильов; Εὐσεβίος, Eusebios) (263年頃～339年)は、カエサルリアの主教で「パンフィロスの息子」を通称とした。代表作は年代記風の『教会史』(Εκκλησιαστικὴ ἱστορία)だが、『全歴史』(Παντοδαπὴ ἱστορία: Χρονογραφία と Χρονικοὶ Κανόνες からなる)と称される著作があり、ビザンティンの年代誌的著作の中では方法的に手本とすべき歴史書と見なされて、ルーシにもスラブ語訳を通じてその伝統が紹介されてきた。

109) この部分に、年代記記者(编者)自身による編集の方法についての考察が挿入されている。ここにあるように、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の编者は、最初の編集段階では、自分の年代誌(χρονογραφ, γρονογραφ)に年代を書き込むつもりはなかったのだろう。ここからも、イパーチイ写本にある年代は、後代の再編集によって生じたことがわかる(〔イパーチイ年代記(10):227頁〕を参照)。

110) オーストリア大公フリードリヒ二世闘争公が戦死した(「殺された」)ことについては、上注47を参照。この部分の記事は上注47の部分の記述の継続のような書き方がされている。

111) 大公領だった「ラグザの地」(Ракушьска земля)「シチリアの地」(Штирська земля)については上注45,46を参照。ここでも、前の部分の記述がほぼ繰り返されている。

112) 「チェコ王」とはプシェミスル家のモラヴィア辺境伯のオタカル(二世)のこと。この抗争を経てかれはボヘミア王になる(上注42を参照)。

113) 1252年6月にウイーン近郊のハインブルグ(Hainburg an der Donau)で、ロマン[S3]と、バーベンベルグ家の継承権利を持つ、亡きオーストリア大公ハインリヒ二世の姉妹ゲルトウルードとの結婚が成立した。もう一人の姉妹マルガリータは、モラヴィア辺境伯オタカル(二世)と結婚しており、オーストリア大公領継承をめぐる争いにおける、明らかな政略結婚だった。しかし、紛争のなかでオタカル二世が優位に立ったため、ハンガリー王ベーラ四世はバーベンベルグ家との関係を支えきれず、結局、この結婚は破綻せざるを得なくなり、ロマン[S3]は1253年に、妻を棄ててルーシへ帰国することになる[Домбровский 2015: С. 376-377] (下注191も参照)。

大公の姉妹をロマン [S3] に嫁がせた。そして、誓約を行った。このことについては多くのことがあるので、われらはすべてを書かない¹¹⁴⁾。

【ダニールはハンガリー王ベーラ四世の要請をうけてモラヴィア地方オパヴァへのチェコ人討伐遠征に出発する：1252/53 年】

その後、〔ハンガリー王は〕ダニール [I111] に使者を遣って、こう言った。「〔そなたは〕わしにとって同族¹¹⁵⁾ であり姻戚¹¹⁶⁾ である。チェコ人討伐の際にはわしを助けよ。〔こうしてハンガリー王は〕かれ〔ダニール〕を説得した。〔ダニールは〕自らの行路をとって¹¹⁷⁾ オパヴァ¹¹⁸⁾ (Опава) へと討伐に向かった。〔ハンガリー王〕自身はモラヴィアの地を捕獲して行った。〔ハンガリー王は〕多くの城市を破壊し、すべてを焼き、この地で大いなる殺戮を行った¹¹⁹⁾。

【ダニールはオパヴァ遠征の途上、クラクフでボレスワフ五世と会見する：1253 年 6 月】

ダニールはボレスワフ (Болезлавъ) と会見した¹²⁰⁾。どのようにしてオパヴァの地を通過したらよいか思慮していたのである。ボレスワフは〔行軍を〕望んでいなかったが、かれの妻が進言によってダニール [I111] を助けた。なぜなら、かの女はハンガリー王の娘で、キング

114) この年代記記者の言葉は、後の記事でハンガリー王ベーラ四世の誓約 (обѣт) の顛末について書かれること (下注 216 参照) のいわば断りの文言になっている。

115) 「同族」と訳した *ужика* はギリシア語の *συγγενής* の訳語としてスラブ語文献に入った言葉で、広く一族の者という意味を持っている [Колесов 1986: С. 49-50]。ここではベーラ四世とダニールとの姻戚関係 (次注) を強調するための同義語反復表現として使われているのだろう。

116) ハンガリー王ベーラ四世にとってダニールが「姻戚である」(*ми и свать еси*) とは、ダニールの息子レフ [S2] がハンガリー王ベーラ四世の娘と結婚していたことを指している。ダニールは 1240 年に、息子 (おそらくはレフ [S2]) とベーラ四世の娘の結婚を提案しているが、これは失敗に終わった [イパーチイ年代記 (11) : 注 272,273]。しかし、国際情勢の変化によって、ダニールがバトゥ参内から帰国した 1246 年に、ベーラ王から政略結婚を受ける意志が示され、翌年にズヴォーレンでの講和によって、レフとベーラ四世の娘王女コンスタンツァの婚約が決まった [イパーチイ年代記 (11) : 注 485]。この結婚は 1247 年には成立していたと考えられる [Домбровский 2015: С. 371-372]。

117) 「自らの行路をとって」(*поиде...путемъ своимъ*) 行軍したのは「ハンガリー王」であるという読みもあるが ([Котляр 2005: С. 289][Мартынюк 2016: С. 122])、文脈や内容 (オパヴァへ向かった) から見て、これはダニールのことを指していると読むべきだろう。

118) 「オパヴァ」(*Опава, Opava*) は、現在のチェコ北東部モラヴィア地方スレスコ州の都市。北方にポーランドと接する場所にあり、当時はモラヴィア辺境伯オタカル二世の重要な軍事拠点の一つだった。

119) ハンガリー王の軍はポロヴェツ部隊とともに首都ペシトからボジョニ (現ブラチスラヴァ) を経てモラヴァ川を遡行する方向で、モラヴィアの拠点都市オモロウツ方面へ進軍し破壊活動を行ったと考えられる [Мартынюк 2016: С. 122-123]。

120) 「ボレスワフ」(*Болезлав*) は、クラクフのポーランド公ボレスワフ五世純潔公 (Bolesław V Wstydlivy) (在位：1243 年 ~ 1279 年) のこと ([イパーチイ年代記 (11) : 注 416] 参照)。以下の記述に見るように、この会見は遠征途上に立ち寄ったクラクフで行われた。

(Кинька) という名だったからである¹²¹⁾。

ダニール公 [I111] が「進軍」を望んだのは、「ハンガリー」王のためでもあり、栄光を望んだからでもあった。ルーシの地において、チェコの地を掠奪したのはそれ以前には誰もいなかったのだから。勇猛公スヴァトスラフ [03] も、ウラジーミル聖公 [06] も「そうしたことは」なかった¹²²⁾。神がかれ「ダニール」の望みを適えさせたのである。

「ダニールは」急ぎ、戦争へと急行した。自分の息子レフ [S2] を伴い、弟のヴァシリコ [I112] からは千人長ユーリイ¹²³⁾ (Юрьи) の援軍を得て、ボレスワフと会見するとクラクフを出発した。

**【ダニールとレフの遠征軍はクラクフからモラヴィアへ向かうがオポーレ公の妨害に遭う：
1253年6月】**

かれら「ダニール軍」はオドラ川¹²⁴⁾ (рѣка Одра) のコズリイ¹²⁵⁾ (Козлии) の城市に到着した。かれ「ダニール」のところに、**[822]** ミェシュコ・ラスコノギ (の息子の) カジミェシュの息

121) ハンガリー王ベーラ四世の娘のキング (クニクンデ) は、1238年にボレスワフ五世に嫁いでいた。[イパーチイ年代記(11):注416]を参照。かの女はコンスタンツァ(上注116)の実の姉であり、ダニールにとっても姻戚、遠征に同行した息子のレフ[S2]にとっては義理の姉に当たっていた。

122) 「勇猛公スヴァトスラフ」(Святослав Хоробрь)と「ウラジーミル聖公」(Володимерь Святы)は、『原初年代記』に言及されている初期のルーシ諸公。「スヴァトスラフ・イーゴレヴィチ」[03]は『原初年代記』6472(964)年の項で「沢山の勇敢な軍兵を集め、自身も勇敢だった」(нача воя съвокупляти многы и храбры. Бѣ бо и самъ хоробрь)と「勇猛」(храбр, хоробрь)であったことが強調されており、この部分があだ名の出典だろう。「ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ」[06]はスヴァトスラフの息子でルーシ国家をキリスト教化した名君とされている。ダニールの事蹟を、ウラジーミル公[06]の対外遠征と対比して称賛する手法は、6737(1229)年のダニールのポーランド遠征の記事にもある[イパーチイ年代記(10):315頁,注485]。また、初期ルーシ公をあだ名とともに言及するのは、6738(1230)年記事の「呪われたスヴァトポルク」(оканьны Святополкъ)[07]の個所でも見ることができる[イパーチイ年代記(11):注8]。ここには、記録する事蹟の評価のために、初期ルーシ諸公の事蹟を参照するという、本年代記記者(編者)独自の歴史観を見て取ることができる。

123) 「千人長ユーリイ」(тысяцкий Юрьи)は、6734(1226年)の記事で、ベレムィシエリの代官を務めていたムスチスラフ[J51]配下の人物(Юрьи тысящ)として登場したユーリイ・ドマメリチ(Юрьгий Домамѣрич)とされているが[イパーチイ年代記(10):299頁,注397]、すでに25年以上を経ており、ヴァシリコ[I112]の配下であることから、別の人物と考えるべきだろう。

124) 「オドラ川」(рѣка Одра)は、現在のチェコ、ポーランドからドイツへと流れるオーデル川(ポーランド語、チェコ語はOdra)を指している。

125) 「コズリイ」(Козлии)は、現在のポーランド、上シレジアの都市ケルジェジン=コジレ(Kędzierzyn-Koźle)を指しており、オーデル川河岸に位置し、当時の公国の中心オポーレ(Opole)からは南東に約50km離れていたが、オポーレ=ラチブシュ公領の南境界の拠点地だった。

子であるヴワディスワフ¹²⁶⁾ (Володислав) が〔援軍に〕 やって来た。かれらはブシナ川¹²⁷⁾ (рѣка Псна) に到達した。そして、ダニール [I111] とレフ [S2] は、どこへ討伐〔の部隊〕を差し向けるべきかについてヴワディスワフと評議した。かれ〔ヴワディスワフ〕は真実を話さず、偽りの案内人を〔ダニール等に〕与えた。

ダニール [I111] は、レフ (S2)、タウトヴィラス、ゲドヴィダス¹²⁸⁾、宮廷官〔アンドレイ〕、全ての軍兵を派兵した。そして自分自身は、古参の貴族たち、千人長ユーリイとともに小勢でその場に残った。

レフ (S2) は進軍して掠奪を行った。かれは、案内人たちが偽りをなしていることを見て、かれらの言うことは聞かず、森林の丘に向かって進み、多くの捕虜を捕獲した。

【ダニール軍斥候部隊のオパヴァ城下での攻防戦。ダニールは非勢となったポーランド人を叱咤する：1253年6月】

ダニールはボレスワフ〔五世〕とともにオパヴァへと進軍し、斥候隊として自分のポーランド人を派遣した。

アンドレアス¹²⁹⁾ は、オパヴァ〔の城市〕からチェコ人を率いて出撃してきた。かれら〔ダニール軍〕はこれを迎撃し、戦いの末に、アンドレアスが勝利した。ポーランド人の数が少なかったからである。〔ポーランド人の〕ある者は討たれ、ある者は捕獲された。大いなる恐怖がポーランド人たちを襲った。

ダニール [I111] は〔オパヴァの城下に〕到来して、かれら〔ポーランド人〕にこう言った。「なぜお前たちは震え上がっているのだ。戦争には斃れて死ぬことがまぬかれないことを知らぬわ

126) 「ヴワディスワフ」 (Володислав) は、ヴワディスワフ・オポルスキ (Władysław opolski) を指しており、当時かれはシレジア地方のオポーレ＝ラチブシュ公 (在位：1246年～1282年) だった。かれはオポーレ (Opole) (前注) から援軍のために駆けつけたのである。

原文では「ミェシュコ・ラスコノギ (の息子の) カジミェシュの息子」 (сын Казимирь Лѣсконогого Межъкы) と父と祖父について説明が付いているが、これはこの小公国の君主を同名の君主たちと区別するため、また祖父のミェシュコ一世 (Mieszko I) が建てたオポーレ＝ラチブシュ公の後継者であることを示すためと思われる。なお、「ラスコノギ」 (лѣсконогий) はポーランド語の laskonogi に由来し、「長くて細い足」を意味する君主に対するあだ名だろう。ちなみに、このミェシュコ公は後代に「跛足公」 (Plątonogi) と呼ばれており足があだ名にかかっていることがわかる。

127) 「ブシナ川」 (рѣка Псна) は、オーデル川左岸支流でポーランド語で Psina または Cyna と表記されている (ドイツ語 Zinna、チェコ語 Cína 又は Pština)。歴史的にはポーランドとモラヴィア地方の間の境界と見なされていた。

128) ダニールのもとに亡命していたリトアニア侯タウトヴィラスとゲドヴィダスは、この遠征ではダニール軍の部隊として配下の軍兵とともに組み込まれたのである。

129) この「アンドレアス」 (Андрѣй) は、オパヴァの防衛にあたったチェコ側の軍司令官の名前。ベネショフ (Benešov) の出身者とされている (後注 132 参照)。

けではあるまい。お前たちが襲撃している相手が、戦士の男たちであって、女ではないことを知らぬわけではあるまい。男が戦場で死ぬことに、なんの驚くべきことがあろうか。家で栄光とは無縁で死ぬ者もいるのに対して、ここに居る者は栄光とともに死ぬのではないか。そなたたちの心を固めよ、自らの武器を〔敵の〕戦士たちの上に振り上げよ。〔ダニールは〕かれら〔ポーランド人〕をこの言葉によって〔心を〕固めさせ、他にも多くのことをかれらに話した。**【823】** そうして、〔ダニール軍は〕オパヴァへと〔攻撃に〕向かった。

【ダニールは本隊の部隊がないことを嘆く】

〔ダニールは〕、周辺の村落の〔住民たちが〕、城市〔オパヴァ〕へと逃げ込んで行くのを見た。その数は非常に多数だった。かれ〔ダニール〕には、〔城市攻撃のために〕派遣する者が誰もいなかった。〔ダニールは〕〔オポーレ公の〕ヴワディスワフ¹³⁰⁾に向かって言った。「そなたはわしに嘘をついた。それで自分を滅ぼした。もし、レフ[S2]とわしの家来が全員ここにいたのなら、われらはこの地に大いなる打撃を与えることができ、この城市〔オパヴァ〕は占領できたものを」。

〔ダニールは〕自分の息子のレフ[S2]と軍兵を〔他へ〕派遣してしまったことを残念がった。かれは、ポーランド人を城市〔オパヴァ〕へ向かって攻撃させようとしたが、かれら〔ポーランド人〕はそれを望まなかった。〔ダニールは〕それを見て、悲しんでいた。自分の息子〔レフ〕と軍兵たち〔がどこに居るか〕知らなかったのである。ポーランド人は城市を攻撃することを望まず、城市から離れて布陣することを望んでいた。

〔ダニール軍の〕すべての戦闘に参加した軍兵は、城市を攻撃するために集合した。ダニール[IIII]は言った。「そなたたちは立ち去りたいと望む者もいるだろうが、わし自身は小勢の従士たちとともに残って、わしの軍兵たち〔の到着〕を待つことを〔そなたたちに〕望む」。ボレスワフとポーランド人はこれを聴くと、オパヴァ川の、城市から下流のところに陣を構えた。かれ〔ダニール〕からは、離れようとはしなかった。

【レフが率いるダニール軍本隊がオパヴァ城下に到着する】

その日の晩にレフ[S2]が軍兵を率いて到来した。多くの捕虜を連れていた。その日の晩、〔ダニール軍の主だった者たちは〕評議をした。そして、翌朝、〔オパヴァ川を〕渡河して¹³¹⁾ 城市を包囲し、すべての城外の〔施設すなわち〕家屋、菜園、穀物置き場を焼き払うことを決めた。

130) 上注 126 を参照。

131) 北のコズリイ（コズレ）から南下した遠征軍が、オパヴァ川右岸（南岸）に位置するオパヴァを攻めるためにはオパヴァ川を渡河しなければならなかった

【ダニールは眼病に罹り、オパヴァの城市攻略は失敗する】

朝になって、〔かれらダニール軍は〕 これを実行した。【824】 ポレスワフ〔五世〕は川〔を越えて〕 対岸に行こうとせず、丘の上に布陣して部隊編成をした。ヴワディスワフは進軍した。かれは最初の〔オパヴァ城の〕 城門に到達すると、これ〔周囲の施設〕を焼いた。そして、二番目の城門にやって来た。チェコ人が〔城内から〕 出撃してきた。かれら〔チェコ人〕の幾人かは撃ち殺し、他は追い払った。ベネシ¹³²⁾ (Бенешъ) は軍旗とともに城門の前に陣取っていた。二番目の城門のあたりで城市の周辺を焼いた。三番目の城門に到達すると、ダニール [I111] は下馬して、城市の周辺を焼くように命じた。家来たちは、突然、城市に向かって突撃を開始した。ドイツ人はルーシ人の突撃が激しいのを見て、〔城内から〕 逃走を始め、かれらの幾人かは城門で撃ち殺された。逃走した者たちは城門を閉めて行かなかった。

ダニール [I111] の両眼が不意に病気になった。かれは城門で起こっていることが見えなかった。〔ダニールは〕 自分の家来たちが走っているのを見て、自分の剣を抜刀すると、かれら〔家来たち〕を追いかけた。そのことゆえに、城市を落とすことができなかった。

後になって、〔ダニールは事態を〕 見て、城市を落とせなかったことを嘆いた。〔眼の〕 病気を思い、苦しみながら〔ダニールは〕 自分の息子〔レフ [S2]〕に言った。「城市の周辺のすべて〔の施設〕を焼き払え。わしは自分のコリイマグ、すなわち陣営¹³³⁾ へ行く」。戦争のあいだずっと両眼を患っていたからだだった。多くの者が〔ダニールを〕 戻らせようとしたが、かれはそのようには〔戻ることを〕 しなかった。

【ダニール軍はオパヴァより北のナシリエを占領する】

翌日、〔ダニール軍の主だった者たちは〕 会合すると、オパヴァ川の川上に向かって進軍した。一帯の〔住民を〕 捕獲し、焼き、ナシリエ¹³⁴⁾ (Насилье) と呼ばれる城市の近くに布陣した。【825】 ルーシ人やポーランド人がこの城内に捕らえられていると、〔ダニールは〕 聞いていた。翌日、〔ダニールは〕 部隊編成すると、〔ナシリエの城市〕 へ向かって進軍を始めた。〔城市の住民は〕 大軍の部隊が進撃してくるのを見て、耐えきれずに、降伏した。〔ダニールは〕 城市を占領すると、

132) 「ベネシ」(Бенешъ) は、人名ではなく、ブラハ南東約 37km にある古い荘園地ベネシヨフ (Benešov) を指し、ここではその出身者(領主=騎士)のことを言っている。すぐ先に言及されているアンドレアス(上注 129)と同じ人物だと推定される。

133) この「コリイマグ」(колымаг) はチュルク語で軍用の天幕のこと。直後に陣営(стан)というスラブ語で言い直している。まったく同じ表現が、[イパーチイ年代記(10): 255 頁, 注 143]にもある。

134) 「ナシリエ」(Насилье) の城市は、現在のポーランド、オポーレ県 (Opole) のナシエドレ村 (Nasiedle) に相当する。オパヴァ川の上流そのものではないが、上流方面に位置し、オパヴァの城市からは北へ 12km ほどしか離れていない。

拘束捕虜〔のルーシ人とポーランド人〕を解放した。そして、城壁の上に自らの軍旗を掲げ、勝利を宣言した。そして、かれら〔住民〕自身は赦免した。〔ダニールは〕城市を立ち去ると、ドイツ人の村落に陣を張った。

【ダニールはグルピチチ方面へ向かい、評議の結果帰還を決める】

ダニール [I111] は、ベネシ¹³⁵⁾ (Бенешь) がグルピチチ¹³⁶⁾ (Глубичич) へ向けて軍を進めたことを聞いた。〔ダニールは〕翌日に部隊を編成すると、ボレスワフとともに進軍を始め、捕虜を獲り、焼きながらグルピチチへ向かった。ヴワディスワフは〔軍兵を〕派遣して、周辺地とよばれる周囲の村落をすべて焼き尽くして、悪をなした。そのことによって、〔グルピチチの〕城市の占領はしなかった。

ダニール [I111] とボレスワフは城市〔グルピチチ〕に到来した。すべての軍兵は城市を薪束¹³⁷⁾〔の投擲〕によって占領しようと目論んだ。不意に城内へ向けて風が吹いた。城はトウヒ材で囲われており、壕は浅くしか見えなかった。軍兵たちは、馬をあちらこちらに進めて、城内へ投じるための薪や藁を探したが、見つからなかった。ヴワディスワフが周囲や近隣の村落をすべて焼いてしまったからである。それゆえに城市を焼くものがなかった。

その日の夕方〔ダニール軍の陣営では〕評議がなされた。「われらはどこへ進軍すべきか。オソボロガ¹³⁸⁾ (Особолога) 方面へか、あるいはゲルボルト¹³⁹⁾ (Гѣрьборт) を討つべきか。あるいは帰郷すべきなのか」。ゲルボルトはダニール [I111] に剣を送って、自らの恭順の〔意を示した〕¹⁴⁰⁾。ダニール [I111] とボレスワフは合意して〔言った〕「われらはすべての地を **[826]** すでに捕獲した」。

135) 上注 132 参照。

136) 「グルピチチ」(Глубичич) は、当時の城砦(город)で、現在のポーランド、オポーレ県(Opole)のグウブチツェ市(Głubczyce)に相当する。先のナシエドレ村からは、北方向に 17km ほど離れている。

137) 「薪束(примет)による占領とは、薪束(木切れや枝を束ねたもの)に火を付けて城壁や城内へ向けて投石機で投擲したり、薪束を投じて城砦の壕を埋めて、城内への侵入を容易にする戦術のこと。

138) 「オソボロガ」(Особолога) は、現在のチェコのモラヴィア地方オソブラハ村(Osoblaha)に相当し、前出の「グルピチチ」(グウブチツェ市)から北西へ 10km ほどの距離にある。

139) 「ゲルボルト」(Гѣрьборт) はチェコ軍の軍司令官で、オソボロガ(オソブラハ村)(前注)から南へ 4km ほどオソブラハ川を上ったところにあるフルシテイン城(Fulštejn)(現在は廃墟)の防衛を担っていた人物。かれは、当時、外交においてオタカル二世の右腕的な存在だったオモロウツ司教ブルーノ・フォン・シャウエンブルグ(Bruno von Schauenburg)(在位 1245-1281 年)の息子だったという説もあるが[БЛДР-5: С.507], チェコ史料では司教ブルーノの側近(стольник)で臣下とされている[Комендова 2014: С. 159, Прим. 14]。少なくともチェコ側を代表する有力な人物であったことは確かである。

140) 「この剣を送った」(присла...мечь)所作は、通常のテキストの読みからは降伏の儀礼と解釈できるが、チェコの歴史家からは、この所作は戦闘継続の意志の表明であり、西欧的な騎士儀礼を知らないダニール側が誤解して年代記に記したという説が出されている[Комендова 2014: С. 159]。

【ダニールはポーランドを通過して帰還の途につく。帰途クラクフで教皇使節団と遭遇する：1253年8月】

翌日に〔ダニール軍は〕帰郷をはじめた。オドラ川を渡り¹⁴¹⁾、ヴワディスワフの〔支配〕地を通過した。

その時、クラクフには教皇の使節団がいた。かれらは教皇からの祝福、王冠、王位 (санъ королевства)〔の認許〕を持参しており、ダニール公 [I111] に面会することを望んでいた。かれ〔ダニール〕はかれら〔使節団〕に言った。「わしは異国の地でそなたたちに会うわけにはいかない。後日にせよ」。

【ダニールはクラクフからサンドミェシュ地方を通過してホルムに到着する：1253年9月】

そこから、〔ダニールは〕ストミール〔サンドミェシュ〕の地¹⁴²⁾ (земля Судомирская) を通過し、名誉と栄光をもってホルムの城市に到着した。そして、聖母の家へ行き、跪いて拝礼をして、起こったことについて神を称賛した¹⁴³⁾。〔これまで〕ルーシの公は誰もチェコの地で〔掠奪戦を〕戦ったことはなかったのだから¹⁴⁴⁾。そして、自分の弟〔ヴァシリコ [I112]〕と会った。〔ダニールは〕大いなる喜びにあった。そして、ホルムの城内の聖〔金口〕ヨハネの家¹⁴⁵⁾ に身を置いて、歓喜の中で神と至浄なるその母と聖金口ヨハネを称賛した。

6763 [1255] 年

【教皇イノケンチウス四世は特使を派遣してダニールに王位の授与を提案する：1253年9月】

教皇が名誉ある使節を派遣し、王の地位を表す王冠と王笏と王のしるし¹⁴⁶⁾ (коруна) を持参した。〔教皇は〕言った。「息子よ、われらから王としての冠を受けよ」。

141) つまり、オドラ川沿岸のコズリイ (上注 125) に戻ったのである。ここから東はヴワディスワフの支配地だった。

142) ストミール〔サンドミェシュ〕は、当時はクラクフのポーランド公ボレスワフ五世純潔公 (上注 120) 勢力下の都市だった。

143) この日は、1253年9月8日の聖母の誕生祭 (Рождество Богородицы) の祭日のことと推定することができる。

144) このダニールの遠征の評価については上注 122 を参照。

145) ダニールがホルムに建立した、聖金口イオアンに献堂された聖堂のこと (下注 279)。

146) この「王のしるし」(коруна) とは、西欧の王位の象徴の一つで、十字架のついた球である権標 (держава: globus cruciger) を指していると考えられる [Kronika halicko-wołyńska 2017: s.192, przyp. 1071]。

それ以前に、〔教皇は〕かれ〔ダニール〕にヴェロナとカミエンの司教たち¹⁴⁷⁾ (пискуп Береньский и Каменецкий) を派遣して、かれ〔ダニール〕に「王としての冠を受けよ」と言っていた。その時、かれ〔ダニール〕は受けずに、こう言った。「タタールの軍隊はやむこと無く悪しき仕打ちをし続けています。あなたの援助を得ずして、【827】 どうしてわたしが王冠を受けられるのでしょうか」。

〔今回は〕オピゾ¹⁴⁸⁾ (Опиза) がやってきて、王冠を持参して、「そなたは教皇から援助を得るだろう」と約束した。しかし、かれ〔ダニール〕はその〔王冠を受ける〕ことを望まなかった。かれの母親が説得した。ボレスワフ、シェモヴィト¹⁴⁹⁾ (Семовит), ポーランドの貴族たちは、かれに王冠を受けさせるために、「われらも異教徒に対抗するための援助をしよう」と言った。

【ダニールは教皇イノケンチウス四世から王位の王冠を受ける：1253年12月¹⁵⁰⁾】

かれ〔ダニール〕は王冠を受けた。それは、神から、聖使徒の教会から、聖ペテロの座から、自身の父たるイノケンチウス教皇から、自身のすべての主教たちから受けたものだった¹⁵¹⁾。イノケンチウスは、ギリシアの正教の信仰を誹る者を呪詛した。そして、かれ〔教皇〕は正しい信仰について、教会合同についての公会議を〔開くことを〕望んだ。ダニール [II11] が神から

147) 「ヴェロナとカミエンの司教たち」(пискуп Береньский и Каменецкий) は原文では単数形になっているが、二人と解釈して、前者はイタリアのヴェロナ (Verona) 司教のヤクブ・ブラガンザ (Jakub Braganza) を比定し、後者はポーランド、ポメラニア地方のカミエン (Kamień Pomorski: ドイツ語 Cammin in Pommern) 司教ヘルマン・フォン・グライヒェン (Hermann von Gleichen) に比定する説が有力である [Kronika halicko-wołyńska 2017: s.192, przyp. 1072]。

148) 「オピゾ」(Опиза) は、当時十字軍ラテン国家アンティオキア公国の大司教の地位にあったオピゾ・フィスキ (Opizzo Fieschi) (1291 頃没) を指している。かれは、教皇イノケンチウス四世の特使として、ポーランド経由でルーシへと派遣されていた。

149) この、ダニールの姻戚でもあるマゾフシェ公シェモヴィト一世については、上注3を参照。

150) 戴冠式の時期についてはフルシェフスキの説に拠った [Грушевський-Хронологія: С. 358]。ドンブロフスキは1253年12月末とより限定している [Kronika halicko-wołyńska: s. 193, przyp. 1079]。過去の研究では時期の推定にユレがあり、1254年に入ってからという説もある。コトリヤールは1253年10月～11月 (ウクライナ語版の年代) をもっとも可能性のある時期としている。

151) 戴冠式の出席者についてはドンブロフスキが次のような推定を行っている。教皇側から教皇特使 (legatus) のオピゾ (Opizzo) とクラクフ司教ヤン・ブランドタ (Jan Prandota) を初めとするポーランド人司教たち (ヤン・ドウゴシユ史料による)、ポーランド側からはマゾフシェ公シェモヴィト一世とおそらくクラクフからポーランド大公ボレスワフ五世、ルーシからダニールの母、弟ヴァシリコ、息子レフ、さらにホルム司教イヴァンを可能性のある出席者として挙げている [Dąbrowski 2012: s. 359]。

王冠を受けたのはドロギチンの城市においてだった¹⁵²⁾。

【ダニールとマゾフシェ公シェモヴィト合同のヤトヴァグ人討伐遠征。ヴァシリコは腫れ物のため参加せず：1253/54 年冬】

かれ〔ダニール〕は、息子のレフ [S2]、ポーランド公 (князь лядьский) シェモヴィトとともに戦争のために進軍したとき、かれの弟〔ヴァシリコ [I112]〕は引き返した。片足に腫れ物ができたのである。かれ〔ヴァシリコ〕は自分の全ての軍兵を、兄に従軍させて派遣した。

【ヤトヴァグ人討伐遠征において、レフは敵将を討って雄壮さを示す：1253/54 年冬】

ダニール王¹⁵³⁾ [I111] はヤトヴァグの地へやって来て、掠奪を行った。レフ [S2] は、ステキント¹⁵⁴⁾ (Стѣкинтъ) が森の中で鹿砦で固めており、ヤトヴァグ人もかれとともにいることを知ると、かれに向かって軍を進めた。〔ステキントの〕家来たちを捕獲し、鹿砦のところまで到達した。ヤトヴァグ人はかれ〔レフ〕を討つべく鹿砦から飛び出した。かれと一緒にいた騎馬兵は散り散りに駆け去った。レフはひとり下馬すると、かれら〔ヤトヴァグ人〕と激しく戦った。

【828】 レフがひとりでかれら〔ヤトヴァグ人〕と戦っているのを見て、少数の者がかれを助けるべく引き返した。レフは自分の投げ槍をかれ〔ステキント〕の盾に突き刺した。〔ステキント〕は身を守るものがなくなった。レフはステキントを剣で打ち殺し、かれ〔ステキント〕の兄弟を剣で刺し貫いた。ふたりは斃れて死んだ。かれ〔レフ〕は徒歩でかれら〔ヤトヴァグ人〕を追撃した。馬でかれらを追う者もおり、かれらを打ち、刺し貫いた。

ダニール王 [I111] は、ステキントの館に本陣を置いていた。レフ [S2] がかれのところへステキントとその兄弟の武器を持参した。そして、自らの勝利を宣言した。かれ〔レフ〕の父である王は、自分の息子の雄々しく勇敢であることに大いに喜んだ。

コマト¹⁵⁵⁾ (Комат) がヤトヴァグ人のもとから〔使者として〕やって来た。かれらは隷属する

152) ダニールがドロギチンで戴冠したのは、次の記事にある 1253/54 年冬のヤトヴァグ人討伐遠征の準備のため、その集合地点としてこの城市に滞在していた可能性が高い。これに加えて、ドンブロフスキは、ドロギチンが、ルーシ=マゾフシェ連合、さらに勢力拡大を狙っていた初代リトアニア司教ヴィトス (Wit) にとって、立地上もっとも適合していたことを理由としている [Dąbrowski 2012: s. 356-358]。

153) 1253 年の王位就任を受けて、本年代記ではこれ以降、「ダニール王」(король же Даниил; Даниил же король) の呼称が普通に用いられるようになる。

154) 「ステキント」(Стѣкинтъ) は、ヤトヴァグ人の部族長 (князь) 名だろう。兄弟とともに一帯を支配していたと思われる。

155) 「コマト」(Комат) は、ステキントのヤトヴァグ人部族の高官、あるいはステキントの兄弟の名前だろう。なお、言語学的には *kom-at- の形態素は史料にあらわれるヤトヴァグ人の地名・人名に広く認めることができ、先に言及されたヤトヴァグ人スコモンド (Скомонд; Скуманд) が誤記された形ではないかという説もある。[Магузова 2002: С. 383]

ことを約束した。羨望に満ち策略に長けたポーランド人は、異教徒たちを受け入れ始めた。ダニール王 [I111] はこれを見て、ヤトヴァグの地を掠奪することを命じた。ステキントの館は完全に破壊され、現在も廃墟のままである¹⁵⁶⁾。

ダニール王 [I111] は湖を巡って、その岸に美しい丘があり、その上にかつてライ¹⁵⁷⁾ (Рай) と呼ばれた城砦があるのを見た。〔ダニールは〕そこから自らの家へと帰郷した。

【タタール人がバコタに到来し、代官ミレイはタタール人に寝返る：1253年頃¹⁵⁸⁾】

その同年、〔あるいは前の、あるいは後の年¹⁵⁹⁾〕にタタール人がバコタ¹⁶⁰⁾ (Бакога) に到来

156) この「現在まで廃墟」(о донинѣ пусто стоять)の「現在」について、パシュートは、1247-1263年ホルムの主教イヴァンによって編集された編集単位の年代記資料の存在を推定しており、その場合には、この部分が編集が終了した1260年代の中頃を指すことになる。[Пашуто 1950: C. 92]。

157) 「ライ」(Рай)の「湖」と「美しい丘」の地名は、この遠征の行路と到達地を知るための唯一の手がかりだが、従来から通説によって、現在のポーランド、ポドラシェ県(Województwo podlaskie)のライグルド湖(Jezioro Rajgrodzkie)とその東岸の町ライグルト(Rajgród)に比定することができる。エウク(Елк)川(上注27)左岸支流のイエグジニア(Jegrznia)川の源流(湖尻)にあたる部分に位置しており、1248/49年冬の遠征先とほぼ同じ、ヤトヴァグ人の支配地である(上注7以下を参照)。

なお、コトリヤールはラッパボルトの考証に拠って、これをウクライナのヴォルィンスカ州スタロヴィジェスキ区(Старовыжевский)ヤロヴィシチェ村(Яровище)に比定し、付録の地図にも場所を記している。その理由として、「〔ヤトヴァグ侯ステキントの〕館が、常にヤトヴァグ侯の侵略で荒廃させられていた地域、つまりドロギチン、メリニク、カメネツあたりのヴォルィニ北方境界よりも遙か離れたところにあることはあり得ない」[Котляр 2005: C. 297]としている。しかし、その場合、ヤロヴィシチェ村はベレスチエから見ても70kmも南にあり、ほぼヴォルィニ公の支配下にあった地域に含まれてしまう。また、なによりも、前述のように今回の1253/54年冬の遠征は、1248/49年冬に行われたヤトヴァグ人掠奪遠征と同じ目的、同じ行路(ドロギチンに集合〔上注152参照〕)、同じ構成(マゾフシェ公シモヴィトの参加)、同じ戦闘方法によって行われており、そこから遠征先もほぼ同じだったとみるべきであろう。

158) ドンブロフスキはタタール人のバコタ到来から、奪還までの一連の事件を1253初頭～春の出来事と推定している[Dąbrowski 2012: C. 332]。

159) これまでの記事の時系列を遡った事件であることから、年代記記者が加えた文言。このタタール人のバコタ到来について、コトリヤールはフルシェフスキによって1252年末のことと推定している([Котляр 2005: C. 297])。確かに、先の記事のヤトヴァグ人討伐が1253/54年冬だったのに比べれば、それ以前の出来事ということになる。

160) 「バコタ」(Бакога)は、ガーリチからドニエストル川を約175km下った左岸に位置する城市で、現在のフメリニツキ州カメネツ=ポドリスキ地区のバコタ村(Бакога)に相当する(〔イパーチイ年代記(11):注296〕参照)。交易、産業(塩業)の中心地で、ガーリチ公ダニールのポニジエ地方支配の拠点城市だった。

した。ミレイ (Мълѣй) はかれらに寝返った¹⁶¹⁾。

ダニール [I111] はリトアニア人討伐のためノヴォグロドク (Новгородокъ) へ [829] 戦争のために出陣していた¹⁶²⁾。雪融けの時期だった。〔それゆえダニールは〕自分の息子レフ [S2] をバコタへ討伐のため派遣した¹⁶³⁾。

レフ [S2] は自分より先に宮廷官¹⁶⁴⁾ を派遣した。〔宮廷官はバコタ城を〕襲撃して、監督官¹⁶⁵⁾ (баскак) のミレイを捕まえた¹⁶⁶⁾。レフはミレイを自分の父親のもと〔ホルム〕に連行した。こうして、バコタは再び王であるかれの父親〔ダニール〕のものとなった。

161) この「ミレイ」(Мълѣй, Милей)については、ダニールの代官としてバコタへ派遣されていたガーリチ貴族だろう。1241年にロスチスラフ [G411] がバコタを攻めたとき、ダニール及びヴァシリコから直接派遣されていた印章役キリル (後のキエフ府主教) という高位の人物が防衛にあたったが〔イパーチイ年代記 (11) : 注 314 ~ 323〕、ミレイもまた、このような人物の後継者として高位の職にあったのではないか。なお、コトリヤールはバコタ在地の軍司令官として、ミレイがボロホフ公だった可能性も容認している [Котляр 2005: С. 297]。

ミレイが「かれらに寝返った」(приложися к ним) というのは、降伏してタタール人に城市を明け渡したということ。その代償として、かれは、タタール人の側から、監督官 (баскак) に任命されたのだろう (下注 165 参照)。次の記事のアンドレイの場合と同様に、バトゥから監督官についての認許状を受けていた可能性もある (下注 172 参照)。

162) この「ノヴォグロドクへの戦争」は、記事の対応から見ると、1251/52年冬にダニールがタウトヴィラスの要請に応じて組織したノヴォグロドク遠征 (上注 91 ~ 98) を指すと考えるべきだろう。しかし、主な研究 (フルシェフスキイ、コトリヤール、ドンブロフスキ) はこれを、1252年末としており、その場合、1252/53年冬に再度ノヴォグロドク遠征を行ったことになる。

163) 沼沢地のノヴォグロドク方面にいたダニールは、雪融けの沼地を速やかに通過することが無理であったため、距離的に近いガーリチに駐在していた (下注 175 参照) 息子のレフ [S2] を部隊とともに派遣したのである。

164) 公の側近の職である「宮廷官」(дворьский) については、これまでダニールに仕えたアンドレイ (上注 21) の名が挙がっており、かれの可能性もある。ただ、今回の場合はレフの命令を受けていることから、レフに仕えていた別の人物かもしれない。

165) 「監督官」(баскак) は、日本語ではそのまま「バスカク」と記されることが多いが、タタール人が征服地支配のために定めた徴税、調査、募兵、徴発などに従事する高位の職名を指すチュルク語起源の用語であり、モンゴルのルーシ支配の制度における重要で鍵になる用語として研究がなされてきた ([栗生沢 2007: 56-77 頁][ハルバリン 2008: 69-78 頁] 参照)

この個所は、ルーシ史料で баскак が言及される最も古い用例だが [Маслова 2013: С.32]、タタール人のルーシ支配確立の最初期の時点で、バスカクがどのような役割を担っていたかの詳細については記事からは分からない。この部分の記事の二つの事例を見るかぎり、タタール側は占領地 (ガーリチ公領) の主要な城市の統治者 (公、代官、守備隊長) を武力で威嚇して降伏させ、のちに文書等によって降伏した支配者を「バクカク」として任命していたようである。

166) 「監督官のミレイを捕まえた」(яша Милѣя баскака) はイパーチイ写本の読みに基づいているが、フレーブニコフ系写本は яша Милѣя и баскака となっている。後者の場合は「ミレイと監督官を捕まえた」つまり、ミレイと監督官 (バスカク) は別の人物だったとも読むことができ、タタール人監督官はその場で殺され、ミレイは連行されたという解釈も可能となる [Dąbrowski 2016: s. 300]。

その後、〔ダニールは〕息子〔レフ〕と評議して、かれ〔ミレイ〕を釈放した。その保証人はレフだった。〔ミレイが〕かれ〔ダニール〕に忠誠を守ることを〔ダニールに保証したのである〕。

それから、再びタタール人が到来し、〔ミレイは〕裏切りをなし、再びタタール人にバコタを引き渡した。

【タタール人総督クルムシがクレミャネツに到来し、代官アンドレは裏切ろうとして住民に殺される：1253年頃¹⁶⁷⁾】

その後、クルムシ¹⁶⁸⁾ (Куремса) がクレミャネツ¹⁶⁹⁾ (Кремянец) 方面へ到来して、クレミャネツの周辺を掠奪した¹⁷⁰⁾。アンドレイ¹⁷¹⁾ (Андрій) は二股の変節者で、あるときは「自分は王の配下だ」と名乗り、あるときはタタール人の配下と〔言って〕、心の中は正義に反していた。神が〔アンドレイを〕かれら〔タタール人〕の手に引き渡したのである。かれ〔アンドレイ〕は「わしの手にはバトゥの文書がある」¹⁷²⁾ と言い、かれら〔タタール人〕はかれ〔アンドレイ〕に対して非常に怒って、かれは殺された。かれの心臓が裂かれたのである。

〔タタール人は〕クレミャネツ〔周辺〕ではなにも得ることができず、自分たちの地方へと

167) クルムシ到来の時期について、フルシェフスキイは1254年としており [Грушевський- Хронологія: С.359]、ヴォイトヴィチは1253/54年冬と推定している [Войтович 2011a: С. 274]。

168) 「クルムシ」(Куремса) (ラテン語史料ではコレンザ (Corenza)) については、1246年のダニールのバトゥ参内の記事ですでに言及されている [イパーチイ年代記 (11) : 注 458]。かれはタタール人のガリチ・ヴォルィニ地方支配を担う首領で、ドニエプル下流地方一帯に根拠地を置いていた。

169) 「クレミャネツ」(Кремянец) は、現在のウクライナ・テルノーピリ州クレメネツ市 (Кременець) に相当し、ベリヤ川 (Велья) とイクヴァ (Иква) 川の上流地帯に位置している。この地方では、強固な城砦だった ([イパーチイ年代記 (10) : 300 頁, 注 403] を参照)。

170) このクルムシの到来について、コトリヤールによれば、サライのバトゥ本営では、クルムシに対して大規模なガリチ=ヴォルィニ地方への遠征が計画されており、その一環であったとしている。その計画は、①ガリチ地方の中で守りの弱いポニジエ地方の制圧、②ヴォルィニ地方南部・ボロホフの地へ進攻することで、ルーシの軍を西側に釘付けにし、自分たちのキエフ地方の支配を容易にする。③キエフ地方を占領し、その後、ダニールに敵対するノヴゴロド=セヴェルスキイ公イジャスラフ [C43211] の力を借りて、ガリチ=ヴォルィニ公領に大規模な進攻を行い、ダニール等諸公を服従させる。以上の3点にまとめられるという [Котляр 2005: С. 298]。

171) この「アンドレイ」(Андрій) について、ロシア語訳、ウクライナ語注は、(ダニール側が派遣した) クレミャネツの代官としており、コトリヤールも城市の守備隊長の貴族 (おそらくガリチから派遣された) と考えている。この部分は先のミレイ (上注 161) と同様の文脈で記されており、ダニールの代官の裏切りのエピソードとして読める。アンドレイもまた、城市の代官だったが、バトゥの信任状を受けて監督官 (баскак) になったルーシ人とする見方もある [Григорьев 2004: С. 24]。

172) アンドレイが持っているという「バトゥの文書」(Батыева грамота) は、おそらく監督官 (баскак) (上注 165) の認許状のようなものだったのだろう ([Jusupović 2016: s. 109-110, 209] 参照)。

引き返して行った。

【イジャスラフはタタール人にガーリチ遠征の援軍を求めるが断られ、単独で遠征する：1254 年後半】

イジャスラフ¹⁷³⁾ (Изяслав) [C43211] が、かれら [タタール人] にガーリチを討伐するための援軍を請うた。かれら [タタール人] はかれ [イジャスラフ] に言った。「お前はどうかやってガーリチへ進軍するというのだ。ダニール公は無慈悲な男だ。もしあいつがお前の命を奪い取ろうとしたら、お前を救う者など誰もいなくなるのだ」。かれ [イジャスラフ] はかれら [タタール人] の言うことを聞かず、周りの手勢を集めて、ガーリチへと進軍した。

【ダニールとロマンはイジャスラフに対抗するためにガーリチへ向かう：1254 年後半】

ダニールはこのことを聞くと悲しんだ。【830】なぜなら、このような [経緯があった] ことを知らなかったからである¹⁷⁴⁾。[ダニールは] 自分の息子ロマン [S3] と自分の全ての貴族たちを、かれ [イジャスラフ] を討つべく派遣した。[ダニールは] レフ [S2] をそれ以前に [ハンガリー] 王のもとに派遣していたからである¹⁷⁵⁾。他方、[ダニール] 自身も自分の軍兵を率いて進軍を行った。

かれ [ダニール] がグルーベシエフ¹⁷⁶⁾ (Грубешев) に近づこうとしていたとき、6頭のイノシ

173) この「イジャスラフ」は、ガーリチの支配権をタタール人の援助によって獲得しようとしていることから見て、ガーリチの公座に野心があり 1236-37 年にミハイル [G41] と同盟してガーリチを攻撃したイジャスラフ・ウラジーミロヴィチ [C43211] と考えることができる。ただしその場合、相当な年齢であったはずである。この人物の事蹟については [Котляр 2005: С. 200-301] が詳しく分析をしている。

なお、フルシェフスキイは、このイジャスラフを、キエフ公だったムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] の息子イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [J123] で当時モレンスク公だった人物としている。しかし、上注 [イパーチイ年代記 (10) : 298 頁, 注 393] に示した理由でやはり認めがたい。

174) ダニールは、イジャスラフのガーリチ進攻の報は受けたが、タタール人の援軍拒否については知らなかったため、イジャスラフがタタール人とともに来襲してくると思い込んで、強力な軍勢と戦わざるを得ないことを覚悟して悲しんだのである。

175) 文脈から判断して、この時期レフ [S2] がガーリチの長官としてこの城市に駐在していたようである。ただ、この時期にレフ [S2] は、ハンガリー王ベーラ四世のもとに派遣されていて (おそらく、王のオーストリア大公位の継承を巡る戦いの援軍として) 不在だったために、ガーリチはイジャスラフによって一時的に占領されたと考えられる ([Котляр 2005: С. 302] 参照)。ダニールはイジャスラフの遠征およびガーリチ占領の報を受けると、ロマンをガーリチ奪還のために派遣し、自分もガーリチへと向かったのである。

176) 「グルーベシエフ」(Грубешев) は、現在のポーランド南東国境、ルブリン県のフルビエシエフ市 (Hrubieszów) に相当する。西ブグ川河岸に位置し、ホルム (現在のヘウム) からだと南東方向に 48km ほど行ったところにあり、ホルムからガーリチへの遠征路全体のまだ 5 分の 1 ほどしか進んでいないことになる。

シを殺した。自身は熊槍で3頭を殺し、かれの下級従士が3頭を〔殺した〕。その肉は行軍中の軍兵たちに与えた。

〔ダニール〕自身は聖ニコライに祈りを献げ¹⁷⁷⁾、自分の軍兵にはこう言った。「もし、実際にタートル人どもが現れても、そなたたちの心に恐怖が忍び入らぬように」。するとかれら〔軍兵たち〕は言った。「神があなたの助け手でありますように。われらは、その〔あなたの〕命令を行います」。

【ロマンはガーリチ城内でイジャスラフの手勢を討ち、イジャスラフを捕虜としてダニールのもとに連行する：1254年末】

ロマン[S3]は兵士たちを連れて、昼夜を分かたず進軍した。〔ガーリチに到着すると〕突然、かれ〔ロマン〕はかれ〔イジャスラフ〕を襲撃した。かれ〔イジャスラフ〕は逃げる場所がなくなって、教会堂の屋根によじ登った。そこは、かつて無法のハンガリー人たちがよじ登って逃げたところだった¹⁷⁸⁾。ロマン公[S3]はかれ〔イジャスラフ〕のそばで立って〔見張っていた〕。かれらは渴きのために憔悴して、四日目に〔イジャスラフは〕降りて来た。〔ロマン〕公はかれ〔イジャスラフ〕を自分の父親のもとに連行した。

【ハンガリーにいたレフは、イジャスラフの使者を追うが取り逃がす：1254年末】

レフ[S2]は、かれ〔ガーリチにいたイジャスラフ〕のもとからフョードル(Федоръ)が塩の地¹⁷⁹⁾(солемя)へ派遣されたことを聞くと、自分の家来を伴っただけでかれ〔フョードル〕を追いかけた。〔フョードル〕自身は逃げおおせたが、その家来たちは捕まった¹⁸⁰⁾。

177) 戦勝祈願のためのダニールの聖ニコライに祈ったことについては、〔イパーチイ年代記(10):304頁、注424；(11):注133〕を参照。

178) ここで言及されている「無法のハンガリー人」(безаконьи угръ)が屋根に登ったというのは、1221年3月にムスチスラフ[J51]が再度ガーリチへ入城をして統治を始めたときのガーリチ城内でのハンガリー人の抵抗のエピソードにあり、〔イパーチイ年代記(10):281頁、注308〕参照)定型的な戦闘描写の一つと考えられる。

179) この「塩の場へ」(ко солемя)について、ロシア語訳は地名と解釈して「ザルツブルグ」のことと注しているが、いかにも唐突でそこに行く理由も分からない。英訳とコトリヤールは「塩鉱山」と解釈して、前出の塩鉱山「コロミヤ」(Коломия)〔イパーチイ年代記(11):注303〕を指すとしており、これならガーリチから近く(南へ70km)、またハンガリーへ逃れる経路にもなり、合理的な読みである〔Котляр 2005: C. 302〕。なお、クリピャケヴィチは現在のリヴィウ州スタラ・シーリ村(Стара Сіль)に比定しており〔Крип'якевич 1984: C. 32-33〕、その場合はガーリチから133kmほど西北西へ方向に離れている。

180) フレーブニコフ系写本ではこの個所に「〔フョードルは〕ハンガリーへと向かっていた」(поехал бѣ во угры)という書き込みがある。

【リトアニア諸侯との講和。ミンダウガスの娘とダニールの息子シヴァルンの結婚；1254 年】

その後、ヴァイシュヴィルカス (Войшелкъ) がダニール [I111] と和を結び¹⁸¹⁾、ミンダウガスの娘、すなわち自分の姉妹をシヴァルン (Шварн)[S5] に嫁がせた¹⁸²⁾。

【ミンダウガスの息子ヴァイシュヴィルカスは修道士となり、黒ルーシ地方諸都市をロマンに引き渡す：1254 年末】

かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕はホルムのダニール [I111] のもとにやって来た。自分の公領 **[83I]** を棄てて、修道士の位階を受けたのである¹⁸³⁾。そして〔ヴァイシュヴィルカスは〕、ロマン [S3] すなわち王〔ダニール〕の息子に対して、ミンダウガス〔の所領〕からはノヴォグールドク (Новгородъкъ) を与え、自分〔の所領〕からはスロニム¹⁸⁴⁾ (Вослонимь) とヴォルコヴィエスク¹⁸⁵⁾ (Волковыеск) と全ての〔付属〕城市を与えた¹⁸⁶⁾。

【修道士のヴァイシュヴィルカスはアトス行きを試みるが失敗して戻る：1268 年頃¹⁸⁷⁾】

そして、〔ヴァイシュヴィルカス〕自身は聖山〔アトス〕へ行くことを請うた。そして、〔ダニール〕王はかれのためにハンガリー王の〔領内の〕行路を探した。しかし、〔かれは〕聖山〔ア

181) 1248/49 年冬に、ミンダウガスがタウトヴィラス等同族諸侯と抗争を始めて以降 (上注 60 ~ 63 参照)、1253 年にはタウトヴィラス等諸侯の亡命を受け入れるなど (上注 105 参照)、ダニールとミンダウガスは敵対的な関係にあったが、1254 年にはミンダウガスが提案した講和をダニールは受け入れ、息子シヴァルンの婚約 (下注 182) によって同盟の保証をはかっている。本年代記では、講和の実現において、ミンダウガスの息子ヴァイシュヴィルカスの主導的な力が大きかったことが強調されている。

なお、この講和によってダニールのもとに亡命していたタウトヴィラスはミンダウガスの優越を認め、ダニールのもとを離れて遠地のポロツクに去っている (下注 416 参照)。

182) この結婚については、上注 104 を参照。なお、シヴァルン [S5] の生年は 1236 ~ 1240 年頃と想定されるので [Домбровский 2015: С. 394-395]、この時点で 14 ~ 18 歳ほどである。

183) このヴァイシュヴィルカスの剃髪得度については、1268 年の記事で、ヴァイシュヴィルカスがウグロフスクのダニール修道院に行き、修道衣を身につけると、修道院に住み始めたことと記されており、領地の引き渡しのはるか後のことである。それゆえ、ヴァイシュヴィルカスは幾つかの城市の支配権をロマン [S3] に引き渡したものの、1268 年頃までは、黒ルーシ地方で一定の支配力を保っていたことは確かである (下注 307 参照)。

184) 「スロニム」については上注 72 を参照。

185) 「ヴォルコヴィエスク」については上注 71 を参照。

186) この三つの城市は、リトアニア勢力が支配していた黒ルーシ地方の主要都市であり、この講和がリトアニア勢から見て大きな譲歩であったことが分かる。

187) フルシェフスキイはヴァイシュヴィルカスのアトス行き意向表明を 1256 ~ 1257 年の期間としている [Грушевський-Хронологія: С. 385]。

トス] まで到達することができず、ブルガリアに戻って来た¹⁸⁸⁾。

6764 [1256] 年

【ダニール一族と同盟諸公による大規模なヤトヴァグ人討伐遠征が準備される：1255/56年冬¹⁸⁹⁾】

ダニール [I111] は、弟 [ヴァシリコ [I112]], 息子のレフ [S2] と年少¹⁹⁰⁾ だったシヴァルン [S5] とともにヤトヴァグ人討伐へ出発した。

ノヴォグールドクにもロマン [S3] を呼び寄せるための使者を派遣した。ロマン [S3] はかれ [ダニール] のもとに、全てのノヴォグールドク人 (новгородци) と共に、また自分の岳父グレー

188) ヴァイシュヴィルカスがアトス山に到達できなかった理由について、6770(1262)年の記事では、そのときその地(アトス山の地方)では「大いなる騒乱があった」(мятежь бысть великъ)としている(下注404参照)。

189) このヤトヴァグ人討伐遠征の時期について、フルシェフスキイ、コトリアル [Котляр 2005: С. 303] は1254/55年冬と推定しており、ウクライナ語訳およびキピンは1255/56年冬と年代比定を行っている [Кибинь 2014: С. 49]。どちらかに定める決定的な論拠はないが、記事の時系列から見て、後者を採りたい。

190) シヴァルン [S3] の生年(上注182参照)をかりに1240年とすると、15～16歳ということになる。

ブ¹⁹¹ (Глѣб) と共に、スヴィスロチ¹⁹² (Вислочьскый) の〔公〕イジャスラフ¹⁹³ (Изяслав) と共にやって来た。

別の方面からは¹⁹⁴ シェモヴィト¹⁹⁵ (Симовит) がマゾフシエ人と共にやって来た。ボレスワフ¹⁹⁶ からの援軍がサンドミェシユ人、クラクフ人と共に〔やって来た〕。大軍勢になり、遠征隊でヤトヴァグの沼が埋まってしまうほどだった。

【ダニールは遠征部隊の指揮をまかせられ、部隊を編成して行軍する】

すべてのルーシとポーランドの諸公が協議を行った。戦士である家臣たちが〔ダニールに向かって〕言った。「あなたは王です。すべての部隊の首領です。われらのうちの誰かを先頭で派遣しようとしても、それは聞き入れられないでしょう。あなたは兵法を心得ています。あなたには戦争の経験があります。誰もがあなた〔の前で〕恥入り、あなたを恐れています。ご自

191) 「自分の岳父グレーブと共に」 (с отцем своимъ Глѣбомъ) について、ロシア語訳はイパーチイ写本を с отцемъ と読んでいるが、フレープニコフ写本では съ цтемъ となっており、цьтъ を тьсть (岳父) の縮約形と理解して解釈するのが妥当だろう。その場合、ロマンはグレーブ (Глѣб) という黒ルーシ地方の在地の領主 (支配公) の娘と結婚していたことになる。ロマンは 1252 年 6 月にバーベンベルグ家のゲルトゥールドと政略結婚をしていたが、後ろ盾となっていたハンガリー王ベーラ四世の軍事的劣勢によって、1253 年 (6 月以降) には結婚を解消してルーシに戻ってしまった (上注 113 参照)。その後、所領として与えられた黒ルーシ (上注 186 参照) の拠点城市ヴォルコヴィエスクの領主 (侯 князь) だったグレーブ (下注 306 参照) の娘と 1254-55 年に結婚して (ロマンにとっては三度目の結婚) この城市の支配公になっていた (1255-1260 年) というのが通説になっている [Котляр 2005: С. 303]。ただし、ドンプロフスキは、グレーブはのちのタタール人將軍ブルダイ (Бурундай) のリトアニア遠征のときにダニールの手でヴォルコヴィエスクの公に据えられたと解釈しており、この時点でグレーブがどこの領主だったかは不明としている [Домбровский 2015: С. 379]。なお、ナザレンコはこのグレーブをリューリク裔の人物で、グロドノ公の一族 (フセヴォロド・ダヴィドヴィチ [F11]) の末裔ではないかと推定している [Назаренко 2000: С. 187-188]。

192) 「スヴィスロチ」 (Вислочьскый) は、現在のベラルーシのフロドナ州スヴィスラチ区の都市スヴィスラチ (Свіслач) に相当し、グロドノから南へ 82km、ヴォルコヴィエスクから西へ約 15km に立地して、かつてはヴァイシユヴィルカス支配下の付属城市だったものが、近隣のヴォルコヴィエスクとともに譲られて (上注 186 参照) ロマン [S3] の支配領になっていたと考えられる。

193) この「イジャスラフ」 (Изяслав) は、スヴィスロチでロマンの代官をつとめていた在地リトアニア人の首領 (侯) だろう。グレーブ (上注 191) と同様にスラブ式の名を持っているのは、キリスト教を受容したことと関係しているか。

194) 1248/49 年冬のヤトヴァグ人討伐遠征と同様に、シェモヴィト一世は西からヤトヴァグの地へ向けて遠征して、現地集合することになっていたのだろう (上注 10 参照)。

195) マゾフシエ公シェモヴィト一世のこと。かれは、1248/49 年冬と 1253/54 年冬のヤトヴァグ人討伐遠征にも参加していた。

196) クラクフのポーランド大公ボレスワフ五世純潔公のこと。ヤトヴァグ人討伐遠征の目的は、ダニールとシェモヴィト一世にとっては、かれらを服従させて貢税をとることにあつたが、ボレスワフ五世にとっては、国土への襲来の危険性を排除するという副次的な利益だっただろう [Влодарский 1961: С. 126]。

身が先頭で進軍されるように」。

ダニール [I111] は部隊を整え、だれが〔どの〕部隊を統率するかを決め、自らは先頭を切って進軍した。射手を前方に置いて、他【832】の〔兵を〕道の両側を進ませた。宮廷官に命じて、自分の後から行軍させた。〔ダニール〕自身は小勢の側近下級従士たちを連れて馬で進んだ。

〔ダニールが〕行軍していると、かれのところに息子のレフ [S2] が一人でやって来て、かれにこう言った。「あなたには、〔諸公のうち〕誰も付き添っていません。わたしもあなたに付き添っていませんが〔それでよいですか〕」。〔ダニール〕王はかれ〔レフ〕に言った。「それでよい」。〔ダニールは〕自分の行路を進んだ。

【ダニールの遠征部隊はヤトヴァグ人のボルディキシチャ村に迫る】

アンカド¹⁹⁷⁾ (Анкад) という名のかれ〔ダニール〕の案内人がいた。〔ダニールは〕かれに、かれの村は焼かないことを約束した。

かれ〔ダニール〕のところに息子のロマン [S3] が一人でやって来た。ボルディキシチャ (Болдикища) という名の村に到達したとき、〔ダニールは〕レフ [S2] と弟〔ヴァシリコ [I112]〕を〔村へと〕派兵した。レフはこっそりと村の周囲を巡ると、〔住民の〕全員を斬り殺し、一人だけを連行して来た。〔ダニール〕王はその者を尋問した。その者は「プリヴィシチャ (Привища) という名の村にヤトヴァグ人たちが集まっている」と言った。

王はこれを聞くと、アンドレイという下級従士を〔使者として〕遣って、宮廷官に対してこう言わせた。「もしわれらを追って〔行軍している〕者たちを見かけたら、われらを追いかけ急行して来させよ。部隊に自由行動をとらせ、〔われらに〕追いつける者はそうさせよ」。

〔しかし〕ヴァシリコ公 [I112] は、他の諸部隊に対して「だく足でゆっくりと進め」と言い、自分の部隊に対しても同じ事を〔言った〕。かれ〔ヴァシリコ〕は若かったので、同じ〔命令の〕言葉を繰り返して言い、宮廷官に対して、家来たちが自由行動を取らせることを禁じて、部隊が〔急いで進軍することを〕押しとどめた¹⁹⁸⁾。

【プリヴィシチャでヤトヴァグ人と戦い、ダニール軍が勝利する】

一人のヤトヴァグ人がボルディキシチャ村 (Ольдикищъ) から逃げて来た。かれら〔ヤトヴァグ人たちが〕武装をしている〔ということだった〕。かれらは武装していた。〔ヤトヴァグ人の〕射手たちはプリヴィシチャ (Привища) と呼ばれる村の外れで〔ダニール軍と〕遭遇し、かれ

197) 「アンカド」 (Анкад) はダニール陣営の協力者となったヤトヴァグ人の村長 (おそらくボルディキシチャの) の名前だろう。

198) ここでは、ダニールの弟ヴァシリコ [I112] の軍事的能力の拙劣さについて述べられており興味深い。

らを追った。ダニール [I111] と **[833]** レフ [S2] はかれらに向かって突進し、大声で「走れ、走れ、ヤトヴァグ人に向かって」と叫んだ。ヤトヴァグ人は〔ダニール軍が〕たちまちやって来たのを見て、耐えきれなくなり、敗走に転じた。〔しかし〕かれらは村の中に到ると、再び戻って来た。ダニール [I111] とレフ [S2] は、しかし、かれらを攻撃した。〔ヤトヴァグ人は〕投げ槍を打ち棄てると、再び敗走に転じた。射手は撃っていたが、かれらには武装兵がついていなかった。〔ヤトヴァグ人は〕門のところを駆けつけると混乱した。ある者は門の側を駆け回り、他の者は引き返そうとしていた。多くの者がお互いの上に倒れていた。なぜなら氷が滑らかだったのである。

ダニール [I111] とレフ [S2] は、門に向かって馬で急襲を仕掛け。かれら〔ヤトヴァグ人〕は〔門に向かって〕駆けたが、引き返すことはなかった。

この日、王〔ダニール〕の上に、かれの軍兵の上に大いなる慈しみがあつた。このような〔小勢の〕従兵だけで傲慢なヤトヴァグ人、ズリナ人¹⁹⁹⁾ (злинці), クリスメナ人²⁰⁰⁾ (крисменці), ポケナ人²⁰¹⁾ (поке́нці) に勝利したからである。それは聖書に書かれている「戦闘の〔帰趨は〕軍勢の〔多寡〕にあるのではない、勝敗は神の〔御心の〕中にある」²⁰²⁾ の通りである。

〔ダニール〕王はかれらを追ってさらに先へと進軍しようとした。しかし、レフ [S2] はこれを制して、「わたしを遣ってかれらを追わせて下さい」と言った。父親〔ダニール〕はかれ〔レフ〕を派遣しなかった。

ある戦士が自分の右腕を伸ばして、腰の熊槍を引き抜くと、遠くに投擲して、**[834]** ヤトヴァグ人の侯を撃って落馬させた。かれ〔侯〕は地上に倒れると、血を流して、その魂は地獄に墮ちた。ダニール [I111] とレフ [S2] は、ある者は縛りつけ、ある者は茂みから引き出して²⁰³⁾ 斬り殺した。

宮廷官が部隊を率いて到着した。ダニール王はかれに「お前は悪いことを行つた」と言った。宮廷官は答えて〔言った〕。「わたしが〔悪いのでは〕ありません。わたしの意志ではありません

199) ヤトヴァグ人の城砦ズリナの住民という意味で、上注 11 を参照。

200) 「クリスメナ人」(крисменці) はクリスメナの地のヤトヴァグ人(部族)で、クリスメナは、ドゥスブルグのペトルス(Petrus de Dusburg)の『プロイセン年代記』(Chronicon terrae Prussiae)に Crasima として記されている地名に相当する。現在のポーランド、ヴァルミア・マズーリ県のスコメントノ湖 (Jeziro Skomętno) 東岸一帯の古名とされている。[Петр из Дусбурга 1997: С. 313]

201) 「ポケナ人」(поке́нці) もヤトヴァグ人部族を指しており、前注の史料で Rokima 及び Kumenow と記されている地名に相当する。前注のクリスメナ人の居住区よりも西に隣接して居住していた。[Петр из Дусбурга 1997: С. 311]

202) 原文は Нѣсть в силѣ брань, но в Бозѣ стоить побѣда で、文字通りの句は聖書にはないが、『箴言』 21:31 の「〔人〕は戦いの日のために馬を備える、しかし勝利は主による」(конь уготовляется на день брани: от господа же победа) の文言を意味的にパラフレーズしたものが [Літопис руський, 1989: С. 415, Прим. 4]。格言として整った形になっていることから、宮廷や軍で諺として流通していたのだろう。

203) ヤトヴァグ人の戦術にとって「茂み」が重要であることについては、上注 28, 29 を参照。

ん。われらに悪しきことをなしたのは使者〔下級従士アンドレイ〕です。われらに正しい言葉を伝えなかったのです²⁰⁴⁾」。

その後、王〔ダニール〕とレフ [S2] は、拘束した者たちを捕虜とすると²⁰⁵⁾、ヴァシリコ [I112] およびシエモヴィトのもとに帰還した。かれらは迎えられ、異教徒が減びたことについて大いなる喜びがあった。かれら〔ヤトヴァグ人〕の館が焼かれ、かれらの村〔人〕は捕獲された。〔ダニール勢は〕その夜のあいだにプリヴィシチ村に陣を構え、かれらの領地を掠奪し、かれらの館を焼いた。

翌朝に行軍をして、その地を捕獲して焼いた。タイセイ族 (Таисевиче), プリヤリ族 (Буряля), ライモチ族 (Раимоче), コマト²⁰⁶⁾ 族 (Комата), ドール族 (Дора)〔の城市〕を焼き、城市を捕獲し、ステキント (Стекинт) の館をさらに焼き打ちにした²⁰⁷⁾。〔ダニール軍は〕コルク族 (Корковичи) の村に陣を置いた。非常に不思議なことに、これだけ多くの軍兵が、馬と自分たちをあわせて、2戸の住居〔にあった糧食で〕で十分に食を満たすことができたのである。自分たちと馬でも食べきれなかった残りものは、焼き捨てた [835]

【ダニールはヤトヴァグ人と和議を行い、貢税を課す】

翌朝、ヤトヴァグ人のもとからユンディル²⁰⁸⁾ (Юндиль) が〔馬で〕やって来た。かれは言った。「ダニールよ、そなたはこのような良き従士たちと、大いなるそなたの部隊を持っている」。

翌朝、〔ダニール軍は〕かれら〔ヤトヴァグ人〕の地を捕獲し、焼き払った。かれら〔ヤトヴァグ人〕の軍兵が忌まわしきことをなすことはなかった。かれらは勇敢なときもあったのだが、神がかれらの心に恐れをもたらしたのである。

その日の夜、〔ダニール軍は〕沼地の中州に陣を置いた。翌朝ヤトヴァグ人たちが〔馬で〕やっ

204) この会話は興味深い。上の戦闘の記述 (上注 198) では、ヴァシリコ [I112] が宮廷官を制してダニール軍に合流させなかったのに、ここでは合流が遅れたことをダニールに叱責された宮廷官は、言い訳で責任をヴァシリコに負わず、使者の下級従士アンドレイの責任だとしている。この宮廷官はヴァシリコの配下だったので、主人を守ったということだろうか。

205) 原文は *изонма колодники* で、ロシア語訳は、「ヤトヴァグ人に捕まっていた捕虜を解放する」と訳しているが、*изымати* の動詞はもっぱら捕虜を獲る場合に使われており、また文脈から見ても「捕虜の解放」は不自然である。

206) 「コマト」(Комат) は族長の名として上注 155 に言及されている。ここはその族長が率いていた拠点城市の名前だろう。

207) ヤトヴァグ人部族長ステキントについては上注 154 を参照。またその館 (дом) が焼かれたことについては上注 156 を参照。

208) 「ユンディル」(Юндиль) はヤトヴァグ人の族長またはその使者の名。かれは降伏して和議を行うためにダニールのもとに来たのだろう。

て来て、人質を差し出し²⁰⁹⁾、和議を提案して、〔ダニールが捕らえた〕拘束捕虜を殺さないようお願いした。その後、〔ダニール軍は〕神の慈悲によって、自分たちの敵を攻略して、名誉と栄光をもって自分たちの地に戻った。

かれ〔ダニール〕は、再びかれら〔ヤトヴァグ人〕と戦うために出陣することを企図し、軍兵を集めていたのだが、ヤトヴァグ人はこのことを知ると、自分たちの使節と子供たち²¹⁰⁾を送って来て、貢税を差し出し、かれに隷属すること、自分たちの地の城砦の〔防柵を〕伐り崩すことを約束したのだった。

6765 [1257] 年

【ダニールはヤトヴァグ人のところに徴税のための使者を派遣する。貢税は神によるものであること：1256 年】

ダニールは、かれら〔ヤトヴァグ人〕から貢税を徴集するために、ポロジシロ (Положишило) と称するコンスタンチン²¹¹⁾ (Коснятин) を派遣した。コンスタンチンは〔馬で〕行き、かれらから、黒いテンとオコジョ²¹²⁾〔の毛皮〕、銀などの貢税を取った。〔コンスタンチンは〕、軍司令官のシグネフ²¹³⁾ (Сигнѣв) に対して、ヤトヴァグ人の貢税から贈物を分け与えた。これは、ヤトヴァグ人が大いなる公ロマン [I11] の息子ダニール王に対して貢税を納めたことを、ポーランドの全地に知らせるためであった。大いなる公ロマン [I11] 以来、**[836]** ダニール [I111] を除いて、ルーシ諸公でかれら〔ヤトヴァグ人〕を征服したものは誰もいなかった〔の

209) 「人質を差し出し」 (дающе таль) はイパーチイ写本の読みで、フレーブニコフ系写本では дающе дань (貢税を差し出し) となっている。コトリヤールはイパーチイ写本の読みを誤りとしているが [Котляр 2015: С. 304]、どちらを本来の読みとするか定める確かな根拠はない。直後に人質についての言及があり (下注 210 参照)、またルーシ公と異族の間の和議の際に人質 (таль) をとることは行われていたことから ([イパーチイ年代記 (10): 316 頁, 注 482] 参照)、ここではイパーチイ写本の読みを採用したい。

210) この「子供たちは」直前にある、和議の際に相手に差し出した人質 (таль) のこと。

211) この「コンスタンチン」はダニールの側近貴族。1230 年のガーリチ貴族による反ダニール陰謀の記事で、千人長デミヤンがダニールに向けて派遣した使者に「コンスタンチン」という人物が記されており [イパーチイ年代記 (11): 174 頁, 注 14]、同一人物の可能性もあるが、やや年代が離れ過ぎている。なお、後の 1259 年のブラルダイ到来の記事ではホルム防衛の司令官として言及されている (後注 343 参照)。

212) 「オコジョ」の原語は бѣль (フレーブニコフ系写本では бѣло)。

213) 「シグネフ」(Сигнѣв) は、ポレスワフ公の治世 (1233 年 ~ 1247 年) にポーランド (マゾフシェ) から派遣されてダニールに仕えていた軍司令官 (воевода)。1248/49 年冬のヤトヴァグ人討伐遠征にも軍司令官として従軍している。上注 8 を参照。

だから²¹⁴⁾。神によってかれ〔ダニール〕に貢税がもたらされたのである。〔ダニールは〕ポーランドの地に対して、自分が雄壯を示し得たのは神によるということを証した。それは、その〔ポーランドの〕子孫たちの記憶に残すためであった。それは、叡智の年代誌記者が「善行は永遠に聖なるものとされる²¹⁵⁾」と書いている通りである。〔これまでこの年代記で〕、われらが多くの戦争について語ってきたこともその通りである。

【ハンガリー王ベーラ四世はオーストリア領割譲のロマンへの誓約を履行せず：1252年】

さて、われらはロマン [S3] について書いてきたが、以前に書いたことを、今またここに続けて書くことにしよう²¹⁶⁾。

その後になって、すでに前にわれらが言ったように、〔ハンガリー〕王は〔ロマン [S3] に対して〕重大な誓約を行ったが²¹⁷⁾、ロマン [S3] に対してそれを遂行することはなかった。かれ〔ハンガリー王〕はイネペルツェ²¹⁸⁾ (Инепърць) の城市にかれ〔ロマン [S3]〕を残したまま、立ち去ってしまい、約束しながらかれ〔ロマン〕を助けることはなかった。〔ハンガリー王は〕かれ〔ロマン〕の諸城市を手に入れることを望んで、奸策を弄したのである。〔王は〕ロマン [S3] とかれの公妃²¹⁹⁾〔ゲルトウルド〕に対して、かれ〔ハンガリー王〕が獲得したドイツの地はすべてロマン [S3] に引き渡すことを、大いなる誓いによって神に誓った²²⁰⁾。公妃〔ゲルトウルド〕はかれ〔ハンガリー王〕の習性を知っていたので、〔誓約を〕を十字架〔接吻〕によって固めさせた。ところがいつになってもかれ〔ロマン〕への援助はなかったのである。

214) ダニールの父ロマン公 [I11] が 1196/97 年冬にヤトヴァグ人討伐遠征を行ったことについては、『キエフ年代記』6704(1196)年の記事で「ロマンは、かれらの領地を焼き払い、報復をして、帰郷した」と簡単に触れられている〔イパーチイ年代記(9):注54〕。

215) ウクライナ語訳注によれば、ビザンティンの翻訳年代誌『マララス年代誌』(Хроника Иоанна Малала) からとった一節。

216) 以下の記事の内容は年代記記者が断りを入れている上注 114 箇所からの続きになっている。

217) この「重大な誓約」(обѣт велик)とは、上注 114 でベーラ四世が行った「誓約」(обѣт)を指しており、内容としては上注 113 にある、ゲルトウルドとの政略結婚の代償として、「ドイツの地」(земля нѣмѣцкая)をロマンに与えることが中心である。

218) 「イネペルツェ」(Инепърць)については、先行研究(ロシア語、ウクライナ語訳、[Котляр 2005: C.305]ではウイーンから南南東へ約 15km のヒムベルグ=バイ=ウイーン(Himberg bei Wien)に比定する説が有力だが、新しい研究では、ウイーンを中心地から北へ 12km ほどの郊外にあるクロスターノイブルグ(Klosterneuburg)の修道院を指す可能性が高い。この場所は、13世紀の史料では Niwenburg, Neuenburg と並んで Naburga claustralis などの綴りがあり、この Naburuga > Neburka > Неперца の音推移によってこの綴りが推定できる [Матрынюк 2017: C. 140]。

219) 「公妃」(княгини)はロマンの妻ゲルトウルドを指している。

220) これは原文では「大いなる誓い」(клятва... великая)だが、上注 114 及び上注 217 の「重大な誓約」(обѣт великий)と同じことを指すだろう。

【ロマンはオーストリアでオタカル二世に包囲され、懐柔の提案を受ける：1253 年】

大公²²¹⁾ (герць) [オタカル二世] はかれ [ロマン] を討つべく [城市イネベルツェに] しばしば到来していた。ある時、かれ [大公] は大軍をもって到来し、かれらは戦い、城市 [イネベルツェ] から 1 ポプリシチェ²²²⁾ 離れた城の前に布陣した。[大公は] 城を攻略することができず、懐柔してかれ [ロマン] にこう言った。「ハンガリー王と手を切れ。そなたはわしの同族であり姻戚²²³⁾ ではないか。ドイツの地をそなたと分け合おう。ハンガリーのレックス (рикс), **[837]** すなわち王は多くのことを [そなたに] 約束したが、それを果たしていない。わしの言うことは真実だ。証人として父たる教皇と 12 人の司教をそなたに立てよう。そなたにドイツの地の半分を与えよう」。

かれ [ロマン] は [答えて] 言った。「わたしは真実をもって、わが父であるハンガリー王に約束をした。わたしはそなたの言うことを聞くことはできない。なぜなら、誓約を果たさないことは辱めを受けることであり罪なのだから」。

【ハンガリー王ベーラ四世は援軍を送らず、ロマンは籠城に苦しみ、脱出を決意する：1253 年】

[ロマンは] ハンガリー王のもとに使者を遣って、大公 [オタカル] がかれ [ロマン] に約束した言葉をすべて知らせ、かれ [ハンガリー王] に援軍を求めた。かれ [ハンガリー王] は、かれ [ロマン] に援軍を派遣しなかった。[それどころか王は]、[オーストリアの] 諸城市を自分の特別の所領として求め、かれ [ロマン] にはハンガリーの地の別の諸城市を与える約束をした。公妃 [ゲルトウルド] はかれ [ハンガリー王] の奸策を見抜いて、次のように [ハンガリー王] 言った。「あなたは、わたしの息子を奪って [自分の] 娘のもとに置き²²⁴⁾、人質に取っている。そして、今ではわれらの諸城市まで望んでいる。そのために、わたしたちは [苦しみに] 耐え、飢えで死にかけているのです」。

実際、一人の下女が出かけて、密かにウィーン (Вяднѣ) で食料を買って、[イネベルツェ城

221) この「大公」(герць) は、ボヘミア王オタカル二世を指している。当時かれは、バーベンブルグ家のマルガリータと結婚しており (上注 112, 113 参照)、オーストリア大公を称していた。

222) 「ポプリシチェ」(поприще) はギリシア語のスタディオ (σταδίων) に対応する距離の単位で、当時はおよそ 1850m に相当した [Романова 2017: С. 203-204]。

223) 「同族であり姻戚」(ужика... и своякъ) の「同族」については上注 115 を参照。「姻戚」であるとは、ロマンの妻ゲルトウルドが、オタカル二世の妻マルガリータの姉妹であることを指している。

224) ウクライナ語訳注によると、ゲルトウルドには前の結婚 (再婚) の相手、辺境伯ヘルマン四世との間にフリードリヒという息子がいた。ベーラ四世はまだ 6 歳のこの息子を自分の娘との政略結婚の相手として預かっていた (「人質にとっていた」) と考えられる。この娘は当時 12 歳のマルグリットと想定され、かの女は当時ドナウ川中州に創建された修道院にいたと考えられることから、ゲルトウルドの息子もそこにいたことになる [Літопис руський, 1989: С. 416, Прим. 7]。

内に] 運び込んでいるありさまで、それだけひどい飢えて、もはや馬を食料にしようとしていた程だった。

公妃〔ゲルトウルド〕は言った。「〔ロマン〕公よ、父〔ダニール〕のところに行きなさい」。かれ〔ロマンの城イネベルツェ〕は包囲されていたので、かれは〔城から〕出ることができなかった。プロスヴェル(Просвѣл)と称するヴェレンゲル²²⁵⁾(Веренгѣр)は、かれ〔ロマン〕の善き〔資質〕を見て力を貸した。二人は戦争でともに戦った仲間だった。〔ヴェレンゲル〕はロマンを気の毒に思い、軍勢を率いて到来すると、ロマンを〔イネベルツェ〕城から脱出させた。これはすでにわれらが語った、ヴァイシュヴィルカス(Вышелкъ)が【838】ロマンにノヴォグルードクを与えた〔以前の〕ことだった²²⁶⁾。

【ダニールは南ブグ川上流域のタタール支配地へ遠征する：1254/55年冬】

クレミヤネツ(Кремянецкая)におけるクルムシ(Кремьса)との戦争²²⁷⁾ののち、ダニール〔P111〕はタタール人に対する戦争を起こした。〔ダニール〕は弟〔ヴァシリコ〔P112〕〕と息子〔レフ〕と評議をして、ディオニシイ・パヴロヴィチ²²⁸⁾(Деонисий Павлович)〔が指揮する部隊を〕派兵して、メジボジエ²²⁹⁾(Межбожие)を攻略した。その後、ダニール〔P111〕とヴァシリコ〔P112〕の家来たちはボロホフ²³⁰⁾(Болохов)を掠奪し、レフ〔S2〕の〔家来たちは〕ブグ川流域地

225) 「プロスヴェルと称するヴェレンゲル」(Вѣрентгѣрь, прирокомъ Просвѣл)とは、オーストリア史料にも言及されているオーストリア貴族のヴェルンハルト・プロイセル(Wernhard Preußel)を指している〔Pашуто 1950: C. 256〕。かれはロマンの妻ゲルトウルドの支持者の一人だった。

226) これについては、上注 184～186を参照。ロマン〔S3〕は1253年末～1254年初めにウィーン郊外を脱出して父ダニールのいるホルムに行き、1254年末にはヴァイシュヴィルカスから得た所領ノヴォグルードクへ移っている〔Грушевський-Хронологія: C. 360, 384〕。

227) この戦争については上注 168以下を参照。

228) 「ディオニシイ・パヴロヴィチ」(Деонисий Павлович)は、文脈と名・父称の表記からみて、ダニール配下のガーリチの貴族・軍司令官だろう。部隊はガーリチから派遣された。

229) 「メジボジエ」(Межбожие)は、南ブグ川上流左岸ブジョク川(Бужок)河口に位置し、ポニジエ地方(ボロホフの地)の主要な城市〔イパーチイ年代記(11):198頁、注115〕参照。現在のフメリニツクイ市に近いメジビジ(Меджибіж)村に相当する。ガーリチから西に遠征部隊を進めれば200kmほどの距離である。

ボロホフの地はタタール人の攻略当初から服従して協力していたことから〔イパーチイ年代記(11):注334〕、当時もタタール人の支配の拠点地のひとつになっていたと考えられる。

230) 「ボロホフ」(Болохов)は「ボロホフの地」(Болоховская земля)を指すかもしれないが、「メジボジエ」との対比として、城市を指す可能性が高い。その場合には、スルチ川上流の城市で、ボロホフの地の拠点城市を指している〔イパーチイ年代記(11):注57〕を参照。

方²³¹⁾ (Побожье) を [掠奪し], タタール人の配下の者たちを [掠奪した]。

【ダニールはシヴァルンを派遣してボロホフの地のタタール人支配地を攻略する：1255 年春】

春になると, [ダニールは] 自分の息子のシヴァルン²³²⁾ [S5] をゴロドク²³³⁾ (Городок), セモツィ²³⁴⁾ (Сѣмоць) およびすべての城市の討伐に派遣した。[シヴァルンは] ゴロドク, セモツィ およびタタール人の味方をしているすべての城市, そしてゴロデスク²³⁵⁾ (Городескъ) とテテレフ川²³⁶⁾ (Тетерев) 河岸沿いの諸城市²³⁷⁾ をジェディチェヴィエフ²³⁸⁾ (Жедьчевьев) まで攻略した。

ヴォズヴァグリ人²³⁹⁾ (возвягляне) はシヴァルン [S5] を欺き, [シヴァルンが派遣した] 家令を捕まえて, 家令の仕事させなかった²⁴⁰⁾。そこで, シヴァルン [S5] は [自ら] 到来すると, すべての城市を攻略した。

231) 「ブグ川流域地方 (ポボジエ)」 (Побожье) は, По-Бужье の表記と同じで, 南ブグ川上流域を指している。1241 年にダニールが占領したボロホフ諸公支配下の諸城市にある「ボジェスキ」 (Божьскый), 「デャディコフ」 (Дядьков) など含まれるかもしれない ([イパーチイ年代記 (11):注 329 ~ 332])。 「レフの家来たち」 (людье... Львови) の部隊はリヴォフ (下注 268) から進発したのだろう。

232) シルヴァルン [S5] は 1254/55 年にリトアニア侯ミンダウガスの娘と結婚しており (上注 182), 当時は父親のダニールと一緒に行動をとっていたか。

233) この「ゴロドク」 (Городок) は, スルチ川中流左岸支流のツェレム川 (Церем) 右岸に位置する城砦で, 現在のジトームイル州, ノヴォグラド=ヴォルィンスキイ区のごロディシチェ村 (Городище) に相当する。

234) 「セモツィ」 (Сѣмоць) は, スルチ川中流左岸支流スミルカ川 (Смілка) 右岸に位置する城砦で, 現在のジトームイル州, スエムツィ村 (Суємці) に相当する。

235) 「ゴロデスク」 (Городескъ) はテテレフ川 (次注) 中流左岸に位置する城砦で, 現在のジトームイル州コロスティシウスキ区のごロドスケ村 (Городське) に相当する。キエフ公領に属し, およそ 100km 東に進めばキエフに到達する近さである。

236) 「テテレフ川」 (Тетерев) はキエフ公領を南西から北東に向かって流れる川でドニエプル川右岸に合流する。

237) ゴロデスクからテテレフ川を上流に遡った地域の城砦で, 支流のグイヴァ川 (Гуйва) やグニロピャチ川 (Гнилопять) の流域の城砦 (例えばコテルニツァ (Котельница) など) も含むだろう。全体としてはボロホフの地の東にあたる。

238) 「ジェディチェヴィエフ」 (Жедьчевьев) は, Жедечев (Жедечев) とも言い, ウクライナ語訳索引によると, 現在のジトームイル州のライゴロドク村 (Райгородок) 近くの遺構に相当するという。テテレフ川上流支流グニロピャチ川 (Гнилопять) の河岸近のキエフ公領内に位置し, キエフまでは東北東方向に 167km ほどしかない。

239) 「ヴォズヴァグリ人」 (возвягляне) は, 城市ヴォズヴァグリ (Возвягль) の住民で, この城市は, スルチ川中流域のスミルカ川 (Смілка) 河口近くの城砦で, 現在のノヴォグラド=ヴォルィンスキイ市 (Н овоград-Волинський) の市域に遺構がある。

240) 「家令」の原語は тивун で, 公の役人で経済活動全般の管理者を指している。シヴァルンは自分の家令を徴税のために派遣していたが, ヴォズヴァグリ人の住民は家令を捕まえて, 「家令の仕事させなかった」 (не вдаша тивунити), つまりダニールにではなく, タタール人に貢税を納めていたということ。

かれ〔シヴァルンの到来〕の後で、ペロベレジエ人²⁴¹⁾ (бѣлобережцѣ), チャルニヤチン人²⁴²⁾ (чарнятинци), すべてのボロホフ人²⁴³⁾ (болоховци) がダニール [I111] のところにやって来た²⁴⁴⁾。

【ミンダウガスはダニールがロマンと合流してキエフ地方へ攻め入ることを勧める 1255 年夏～秋】

ミンダウガスもダニール [I111] のもとに〔使者を〕派遣して〔こう言った〕。「わしはそなたのもとにロマン [S3] とノヴォグルードク人²⁴⁵⁾ (Новгородцѣ) を〔援軍として〕派遣する。そなたは、ヴォズヴァグリ²⁴⁶⁾ (Возвягль) へ遠征に向かい、そこからキエフ方面へ行くことができるだろう²⁴⁷⁾」。そして、ヴォズヴァグリで合流する期日を定めた。

6766 [1258] 年

【ダニールとヴァシリコはキエフ領との境界のヴォズヴァグリを掠奪して引き上げる:1255年秋】

ダニール [I111] と弟〔ヴァシリコ〕は大軍を率いて、ヴォズヴァグリへの〔遠征に〕出発し

241) 「ペロベレジエ人」(бѣлобережцѣ) は、城市ペロベレジエ (Бѣлобережье) の住民で、南ブグ川の最上流支流ブジョク川 (Бужок) 河岸に位置する城砦で、現在のフメリニツキ州クラシリウスキ区のベレフリ村 (Берегли) 近郊の遺構に当たると推定される。ボロホフの地の南に属している。

242) 「チェルニヤチン人」(чарнятинци) は、城市チェルニヤチン (Чернятин) の住民のことで、この城市は、スルチ川上流支流イコポタ川 (Ікопота) 河岸の城砦でボロホフの地に属していた。現在のウクライナ、フメリニツキ州のヴェリクイ・チェルニヤチン村 (Великий Чернятин) に相当する。

243) 「ボロホフ人」(болоховци) は、城市ボロホフ (上注 230) の住民のこと。

244) これらの城市の住民はボロホフの地の南部 (スルチ川最上流域、南ブグ川最上流域) に居住している (なお、コトリヤールはこれらすべてを城市名ではなく地域名と理解している [Котляр 2005: С. 307-308])。かれら (の代表者) がホルムのダニールのもとにやって来たとは、シヴァルン [S5] による懲罰遠征によって、これらの城市がタタルへの服従をやめて、従来通りダニールへの貢税支払いを誓ったということ。

245) 当時、ロマン [S3] が、リトアニア人の城市ノヴォグルードクをヴァイシュヴィルカスから受け取り、公支配をしていたことについては、上注 186, 226 を参照。

246) 「ヴォズヴァグリ」(Возвягль) については上注 239 を参照。

247) この記事では、遠征のイニシアチヴはリトアニア侯ミンダウガスが取っているように読めるが、パシュート、コトリヤール等は、実際はダニールの意図によるものであり、タタル人が支配を固めて貢税を徴収しているスルチ川中流域の諸城市を討伐して、自分に従わせるのが遠征の目的だとしている ([Котляр 2005: С. 308][Пашуто 1950: С. 308] 参照)。「キエフ方面へ行く」(къ Києву) とは、キエフ公領内にまで進攻して、タタルの支配下でキエフ公領を領有しているにヴラジミル＝スーズダリ公 (当時のキエフ公はアレクサンドル・ヤロスラヴィチ [K41] ネフスキイ) の手からキエフを奪い取る意図も可能性としてはあったのではないか。

た。そして、ロマン [S3] とリトアニア人からの報告を待って、コレック川²⁴⁸⁾ (Корейки) 河岸に陣を張った。一日中かれらからの報告を待って〔報告がなかったので〕、それからヴォズヴァググリへ向かった。

〔ダニールは〕先行して息子のシヴァルン [S5] を派遣していた²⁴⁹⁾。それは、かれが〔ヴォズヴァググリの〕 城市を巡って、誰もかれらの〔城から〕 逃げ出させないためだった。かれ〔シヴァルン〕 が率いた軍兵は 500 人だった **[839]**。城市の住民は公〔シヴァルン〕 が率いる兵士たちが少ないのを見て、城壁の上に立って、〔敵軍を〕 嘲笑していた。

翌日、ダニール [I111] が大部隊を率いて、自分の弟〔ヴァシリコ〕 と息子のレフ²⁵⁰⁾ [S2] とともにやって来た。住民はこれを見て、かれらは恐怖にとらわれ、耐えることができずに、降伏した。〔ダニールは〕 この城市を焼き、住民を〔城内から〕 連行すると、これを山分けした。あるものは弟〔ヴァシリコ〕 に引き渡され、あるものはレフ [S2] に、他のものはシヴァルン [S5] に〔引き渡された〕。こうして〔ダニールは〕 は〔ヴォズヴァググリの〕 城市を占領すると、帰郷の途についた²⁵¹⁾。

【後から来たロマンは掠奪するものがなく引き上げる】

〔その後遅れて〕ロマン [S3] とリトアニア人²⁵²⁾ は城市〔ヴォズヴァググリ〕 に到来した。リトアニア人は城市に攻めかかったが、〔城内には〕 焼け跡と広場を走り回る犬どもの他には何も見出さなかった。〔リトアニア人は〕 がっかりして唾を吐き、自分たちの言葉で「ヤング」と言った。〔これは〕 自分たちの神であるアンダイ (Андай), ディヴィリクス (Дивирикс) とすべての自分たちの神々²⁵³⁾, すなわち悪鬼の名を唱えて呼びかけたのである。

その後、ロマン [S3] は小勢の家来を伴って父親〔ダニール〕 の後を追ひ、他の者たちは帰郷させた。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は〔勝利を〕 言祝い、レフ [S2] は帰郷の途に

248) 「コレック川で」 (на Корейки) は、フレーブニコフ系写本では на Корещу となっており、スルチ川左岸支流の現在のコレック川 (река Коречик) を指している。かりにその河口からだとヴォズヴァググリ (現在のノヴグラド=ヴォルィンスキイ市) まで南東方向へ 37km ほど進まなければならない。

249) これは、上注 232 以下のゴロドク, セモツィおよびテテレフ川上流域へのシヴァルン部隊の派遣のことを指している。

250) レフ [S2] はすでにリヴォフ (下注 268 参照) に拠点を置いており、リヴォフから遠征に参加し、遠征後はリヴォフに帰郷したと考えられる。

251) ダニール等がヴォズヴァググリ攻略の後にキエフ公領へ進攻しなかったのは、ロマンとリトアニア人の部隊と合流できず、戦力が足りなかったからだろう ([Котляр 2005: С. 309] 参照)。

252) ロマン [S3] に率いられて遠征したノヴォグルードク人 (住民からなる民兵) のこと (上注 245 参照)。

253) リトアニア人の在来の神々については、上注 80 で言及されており、「ディヴィリクス」(Дивирикс) は「兎の神」とされているが、最高神とも考えられる。「アンダイ」(Андай) は先述の個所に言及されている「ノナデイ」(Нънадѣй) と同じ神を指しているか。

ついた。

【リトアニア人は帰路にルチェスク周辺を掠奪し、これに対してダニールは討伐部隊を派遣して勝利する：1255年冬】

リトアニア人は方針を変えて、掠奪を行い、怒りを隠さなかった。かれらは進軍してルチェスク²⁵⁴⁾(Лучьск)の周辺を掠奪した。[このことについて]ダニール [I111]にもヴァシリコ [I112]にも知らせることはなかった。

ダニール [I111]に仕える者、ヴァシリコ [I112]の家来、すなわち、ユーリイ²⁵⁵⁾(Юрьи)、宮廷官のオレクサ²⁵⁶⁾(Олекса)と他の者たちは、かれら〔リトアニア人〕を討つべく進軍した。かれらに向かって進軍すると、かれらは川の流れのところまで追い詰め、〔ダニール派遣軍の〕騎兵が戦った。〔リトアニア人は〕耐えきれずに、**[840]**敗走に転じた。かれら〔ダニール派遣軍〕はかれら〔リトアニア人〕を斬り、突き刺し、湖へと追い込んだ。10人もの〔リトアニア人が〕馬でなら逃げおおせると考えて、一頭の馬にしがみついていたが、〔氷が割れて〕たちまち水没した。神が派遣した天使の手で溺れさせられたのである。〔ダニール派遣軍は〕湖の中に死体、盾、冑を投入した。現地人はそれらを引き出して、大きな利益を得た。リトアニア人に対する斬り合いは大規模なものだった。

〔ダニール派遣軍は〕敵を倒し、聖なる女宰聖母を讃美し、戦利品の分け前²⁵⁷⁾をダニール [I111]とヴァシリコ [I112]に送った。ダニール [I111]とヴァシリコ [I112]の二人は異教徒討伐における神の助けを喜んだ。その〔異教徒とは〕、ミンダウガスの家来たち、かれらの軍司令官

254) 「ルチェスク」(Лучьск)はストイリ川(下注264)中流右岸に位置する拠点城市。この城市は、1220年代はダニールの従兄弟ヤロスラフ [I122]の所領だったが、1227年にヤロスラフはダニールの手で捕まり、ヴァシリコ [I112]の所領となった。その後、1240年にダニールはこの城市をロスチスラフ [G411]に与えているが、1241年にキエフがタタール人に攻略されると、ロスチスラフはポーランド、ハンガリーに去ってしまい、その後の支配公については不明。おそらく、ダニール＝ヴァシリコの代官が管理をしていたのだろう。

255) 「ユーリイ」(Юрьи)は、ヴァシリコ配下の千人長ユーリイのこと。1253年のダニールのオパヴァ遠征のときにもヴァシリコにより派遣されて従軍している(上注123を参照)。

256) 「オレクサ」(Олекса)は、アレクセイ・オレシコ(Олексия Орѣшьк)の名で、1227年のルチェスクでのヤロスラフ [I122]捕縛事件の記事で、ダニール側の軍司令官として記されている〔イパーチイ年代記(10):305頁,注426〕。記名やあだ名(「木の実」を意味する)から見て、若く地位は高くなかったのだろう。かりにこれが同一人物だとすれば、約30年後のこの時点で、宮廷官に出世し、高齢になって弟のヴァシリコに仕えて従軍していたということになる [Jusupović 2016: s. 230-231]。

257) 「戦利品の分け前」は原文では сайрат というチュルク語起源の語が用いられている。1244年頃のリトアニアとの戦闘の描写でも同じ言葉が使われており〔イパーチイ年代記(11):248頁,注399〕、リトアニアとの戦いの場面に特化した用語と考えられる。

フヴァル²⁵⁸⁾ (Хваль) (かれはチェルニゴフの地で大殺戮を行った²⁵⁹⁾), ルシコフ一族のシルヴィド²⁶⁰⁾ (Сирьвидь Рюшковичь) である。シルヴィドは逃走し、フヴァルと他の多くの者たちは殺された。

6767 [1259] 年

【タタール人総督クルムシのヴォルィニ地方への来襲。先遣隊とのヴラジミル城下の戦い：1255 年末²⁶¹⁾】

クルムシ (Куремьса) は、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] 討伐の遠征を行った。それについては報告はなかった²⁶²⁾。

ヴァシリコ [I112] は [ヴラジミルへ] やって来ると、ヴラジミルで [兵を] 集めた。ダニール [I111] はホルム (Холм) で [兵を集めた]。二人はレフ [S2] のもと²⁶³⁾ に使者を遣って、自分たちのところに来るように言った。

クルムシは、まだステイリ川²⁶⁴⁾ (Стыр) を渡らないうちに²⁶⁵⁾、ヴラジミルに向けて家来を派兵した。城市 [ヴラジミル] に向けて [タタール人の先遣隊の] 軍兵が襲いかかって来た時、市

258) 「フヴァル」 (Хваль) については他の史料に言及がないがミンダウガス配下の貴族。

259) 具体的な事実関係は不明だが、全体として、1240 年代後半 ~ 50 年代にかけて、リトアニア人が、タタール人の来襲によって荒廃したルーシの地へ、それも「チェルニゴフの地」すなわちドニエプル川を越えての侵攻を繰り返していたことは確かであり、カルピニのヨハネにも同様の証言がある (上注 7 を参照)。

260) 「ルシコフ一族のシルヴィド」 (Сирьвидь Рюшковичь) はリトアニア侯のひとり。ルシコフ一族 (Рушковици) は、6723(1215) 年のリトアニア諸侯使節団来訪の記事で、有力な一族から 7 人の侯の名が記されており、6754(1246) 年の記事では、アイシヴノ (Аишьвно Рушькович) という名の侯が単独でヴォルィニ地方に進攻して、撃退されている。シルヴィドもこの一族出身の侯で、フヴァルと違って、独立した部隊を率いていたと思われる。

261) クルムシのヴォルィニ地方来襲の時期については諸説が分かれている。年代記の時系列から見れば、リトアニア人討伐の年の冬、つまり 1255 年末となり、フルシェフスキもその説を採っている [Грушевський-Хронологія: С. 361]。なお、ウクライナ語訳は 1257 年 11 月と時期を限定しているが理由は不明。

262) クルムシの来襲はダニールとヴァシリコにとって予想外の出来事であり、対抗するための準備が整っていなかったということ。

263) あとで記されるように、レフ [S2] はガーリチ地方の城市リヴォフ (Львов) において公支配を行っていた (下注 268 を参照)。

264) 「ストイリ川」 (Стыр) はヴォルィニ地方を北に向かって縦断しプリピャチ川 (Припять) に流れ込む河川。

265) あとの事態の進展から見ると、クルムシ軍の本隊はストイリ川の左岸 (東から西へストイリ川を渡る手前) の城市ルチェスクに布陣して、ヴラジミルを初めとするヴォルィニ地方の攻略を準備していたと思われる。

民の歩兵軍が〔城市を〕出て、かれら〔タタル人〕に立ち向かい、かれらと激しく戦った。〔タタルの先遣隊は〕城下から離れて、急いでクルムシのもとに駆けつけると、「城市民はわれら〔の軍〕と激しく【841】戦っています」と告げた。

【ホルムが大火災に見舞われ、城市は混乱する：1256年頃²⁶⁶⁾】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は、軍を集めてタタル人と戦うことを望んだ。

ところが、〔われらの〕罪ゆえに、忌まわしい女の手でホルムが焼けるという事態になった。われらは〔ホルムの〕城市の創建と教会の装いについては後で書くことにしよう²⁶⁷⁾。この〔城市が〕ひどく滅びてしまうのは、万人にとって悔やまれることだった。炎の勢いは激しく、地面から赤く燃えているのが見えるほどであり、リヴォフ²⁶⁸⁾ (Львов) からも見えるほどで、強力な炎に焼かれてベルズの野²⁶⁹⁾ (поле белзьскыи) が見渡せるほどだった。人々を見て、タタル人の手で城市〔ホルム〕が焼かれたと〔思った〕。かれらは森林地帯へ逃げ込み、〔もとの場所に〕戻って集まることはできなかった。

ダニール [I111] は弟〔ヴァシリコ〕と会合して、かれを〔こう言って〕慰めた。「この災いは神によるものであって、異教徒によるものではない。神に望みをかけ、かれら〔異教徒〕に悲しみを加えるべきである。そして、そのようになった。

【ダニールとヴァシリコはヴラジミル防衛に駆けつける：1256年頃】

その後、二人〔ダニールとヴァシリコ〕はヴラジミルへ行き、小勢の従士たちを集めると、タタルの来襲について、どうかかれらから救い給えと祈った。しかし、従士たちを集めることが出来ず、二人はあちこちに使者を派遣した。ヴァシリコ [I112] の家来たちが〔城市から〕出陣し、タタル人を見つけると、かれらと戦った。そして拘束捕虜を捕獲した。

266) このホルムの大火は、クルムシ軍に対する防衛戦の最中であることから1256年頃のことだろう。

267) これについては下注277を参照。なお、ホルムの創建について後で記すという同様の言い回しは6731(1223)年の記事でも記されている（〔イパーチイ年代記(10)：284頁、注329〕参照）。

268) 「リヴォフ」(Львов) (現在の西ウクライナの州都リヴィウ(Львів))については年代記ではこの個所が初出。レフ[S2]の名にちなんだ城市で、父ダニールもしくはレフ自身の創建になる。建都の年代については諸説あるが、レフが成年した時期(1240年代中頃)以降であり、1247年にレフがハンガリー王の娘コンスタンツァと結婚した（〔イパーチイ年代記(11)：注485〕参照）ことが、建都の切っ掛けになった可能性は高い（〔Котляр 2005: C. 310〕参照）。リヴォフは、古都ガーリチとダニールの拠点地ホルムとの中間に位置し、戦略上の好位置にあった。

269) リヴォフから城市ベルズ(Белз)までは北に向かって60kmほどの距離があり、さらに北に92km離れたところにホルム(現在のヘウム)が位置している。リヴォフから北の一角は平地が広がっており、それを「ベルズの野」(поле белзьскыи)と呼んでいるのだろう。

【タタール人によるルチェスク城攻撃と防衛戦：1256/57 年冬】

その後、クルムシはルチェスク²⁷⁰⁾ (Лучк) に布陣した。神は大いなる奇跡をなした。ルチェスク〔城〕は防塞もなく、守りの体制もなかった。【842】そこ〔ルチェスク城内〕へ多くの人々が駆け込んだ。冬だった。〔スティリ川の〕水量は多かった。かれ〔クルムシ〕はルチェスクへ近づいたが、〔川を渡渉で〕渡ることはできなかったので、橋を占拠しようとした。〔ルチェスクの〕住民は橋を伐って〔壊した〕。かれ〔クルムシ〕は投石機を据えて、〔住民を〕追い払おうとした。

神と聖〔金口〕イオアンと聖ニコライは奇跡をなした。一陣の風が吹いて、投石機が倒れ、風の勢いで石がかれら〔タタール人〕の上に落ちた。再び、〔城市めがけて〕激しく投石し始めたが、神の力によって投石機が壊れた。〔タタール人は〕なんの成功も得られず、自分たちの地方²⁷¹⁾ へ、すなわち原野へ²⁷²⁾ と戻って行った。

【ダニールの拠点城市ホルムの創建について：1237 年頃²⁷³⁾】

先に、われらはクルムシの戦争、城市ホルムの火災について書いた²⁷⁴⁾ が、ホルムの城市は神の意志によって創建されたのである。

ダニール [П111] がヴラジミルを公支配していたとき、かれはウグロフスク (Угорескъ) の城

270) 「ルチェスク」(Лучк)については上注 254 を参照。

271) 「地方へ」はイパーチイ写本では в станы (陣営へ) となっているが不自然なことから、フレーブニコフ系写本の въ страны (地方へ) の読みを採用した。

272) 「すなわち原野へ」(рекше в поле) の原野 (поле) は年代記における用法から見て、ドニエプル川下流域のかつてポロヴェツ人の居住地だった地方を指しているだろう。

273) 城市ホルム創建の時期ははっきりした記録はないが、およそ 1237 年頃と考えられる。コトリアルはホルムについての年代記記録の比較から、「小さな城砦」の創建は 1236 年後半～1238 年前半の期間と推定している [Котляр 2005: С. 378]。

274) ホルムの大火については上注 266 を参照。

市を創建し²⁷⁵⁾、そこに主教の座を置いた²⁷⁶⁾。ある時、かれ〔ダニール〕は原野に馬で繰り出し、狩りを行った。そして、丘の上に美しく魅力的な場所を発見した。そこは原野によって囲まれていた。〔ダニールは〕地元の者たちに「この地は何と呼ばれているのか」と訊いた。かれらは「ホルム²⁷⁷⁾ (Холм) という名です」と答えた。〔ダニールは〕この地を気に入り、ここに小さな城砦を建てることを考えた。そして、神と聖金口イオアン²⁷⁸⁾に対して、【843】かれ〔イオアン〕の名に献じた教会の建立を約束した。こうして、小さな城砦が建てられた。

〔その後、ダニールは〕神が〔タタール人の襲来において〕自分を助け、〔聖金口〕イオアンが援助してくれたことを見て、別の城市を創建した。これこそ、バトゥがルーシの地のすべてを占領したときにも、タタール人が攻略できなかった城砦だった。そのとき、聖三位一体教会は焼け落ちたが、再び建立された。

【城市ホルムに人が集まり繁栄したことについて】

ダニール公は、神がこの地に援助の手を差し伸べているのを見て、ドイツ人、ルーシ人、異邦人、ポーランド人をここに招聘するようになった。日毎に様々な職人や弟子が来訪し、馬具職人、弓職人、矢筒職人、鉄・銅・銀の鍛冶職人がタタール人のもとから逃げてやって来た。生活の活気が溢れ、城砦の周辺の村の平地は住居で一杯になった。

275) 「ウグロフスク」(Угорескъ)はフレーブニコフ系写本の表記が Угровескъ で、これに拠った読みが通名になっている。ヴォルィニ地方、西ブク川中流域支流ウゲル川(Угер)の河口に位置し、現在のポーランドのウフルスク村(Uhrusk)近く(ウクライナのヴォルィンスカ州のノヴォウグルスケ村(Новоугрузьке)から西へ2.5kmの西ブク川右岸の遺構[Майоров 2011: С. 458])に相当し、ホルムからなら北北東へ約20kmと非常に近く、このホルム発見のエピソードのときも、ダニールはこのウグロフスクから出かけたのだろう。当初ダニールは、この城市に政治・教会の拠点を置こうと考えたようである。

1210年頃にヴラジミル公になったアレクサンドル公[I121]がこの城市を自分の領地に行っている(イパーチ年代記(10):246頁,注77)ことから、城市そのものはロマン公[I11]の時代から存在していたと考えられる。ここでダニールがこの「城市を創建した」(созда градъ)となっているのは、本格的な城壁を建設した、もしくは、主教座のための聖堂の建設を指しているのだろう。

276) ウグロフスクに主教座が置かれていたことは、6733(1223)年の記事で、ホルム主教イオアンの前任の主教の「ウグロフスクのヨアサフという人物が勝手に府主教の座に就いてしまい」[イパーチ年代記(10):285頁,注330]と記されていることから確認できる。

277) 「ホルム」(Холм)は普通名詞としては「丘」を意味することから、地形由来の名称であることがわかる。

278) ダニールが聖金口イオアン(святой Иоанн Злагоуст)に篤い信仰を向けていたことは、本年代記でこの聖人について言及が多いこと、ダニールの甥ウラジーミル・ヴァシリコヴィチ[I121]の洗礼名がイヴァン〔イオアン〕(Иван)であることから了解される。先行研究では、金口イオアンがダニールの守護聖人であった可能性も指摘されているが、確証されていない[Литвина, Успенский 2006: С. 533-534]。

【ホルムの聖金口イオアン教会の建立と聖堂の美しさについて】

聖〔金口〕イオアン教会が建てられ²⁷⁹⁾、美しく華麗なものだった。その建物は次のようだった。四つのドームがあり、それぞれの角にアーチがあり、それは巧みな〔職人〕による人間の頭部の彫像によって支えられていた。三枚の屋根はローマ・ガラスで飾られ、至聖所の入り口には石から切り出された二本の柱が立ち、その上部には天蓋と丸屋根があり、それは群青色の地に金色の星々で飾られていた。内陣の床は【844】磨き上げた銅や錫で葺かれ、まるで鏡のように輝いていた。二つの扉は、削り出したガーリチの白石とホルムの緑石を張って飾っていた。飾り模様はアヴデイ (Авдьи) という巧みな職人手になるもので、様々な球体や黄金で作られていた。前方の〔西壁の門〕には救世主が描かれ、北側〔の壁〕には聖〔金口〕イオアンが描かれ、これを見る者はみな驚嘆した。〔ダニールは〕キエフから持ってきたイコン、宝石や黄金のビーズで〔装飾されたイコン〕で〔聖堂を〕飾った。それは、〔ダニールの〕姉のフェドドラ²⁸⁰⁾ (Федора) がテオドロス修道院²⁸¹⁾ から持参してかれ〔ダニール〕に与えた「救世主」および「至聖なる聖母」〔のイコン〕だった。また、イコンをオヴルチ²⁸²⁾ (Уручий) から持ってきたり、かれ〔ダニール〕の父のものだった「主の迎接」の〔イコンを持ってきた〕。それらは驚嘆に値したが、〔それらのイコンは〕聖〔金口〕イオアン教会の中で焼けてしまい、奇跡のイコンの中では、唯一「〔大天使〕ミハイル」〔のイコン〕だけが残った。

鐘はキエフから持ってきたものもあれば、そこで铸造したものもあったが、すべて炎が灼きつくしてしまった。

279) この聖金口ヨハネに献じられた教会は、都市の中央に築かれた現在の高い丘 (Wysoka Górką) に、公の館 (下注 283 参照) と並んで建てられていたと推定される。なおこの教会については上注 145 でも言及されている。

280) 「フェドドラ」(Федора)、ギリシア式でテオドラ (Феодора; Θεοδώρα) は、ロマン公 [I11] と最初の妃 プレディスラヴァ (Предислава、キエフ公リューリク [J22] の娘) との間の娘で、生年は 1082 年頃。ダニールにとっては腹違いの姉にあたる。1187-88 年に当時のガーリチ公のウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A12111] の息子 (おそらくヴァシリイ) と政略結婚させられたが、情況の急変によりたちまち破綻して実家に戻され [イパーチイ年代記 (8) : 236 頁, 注 324]、この部分の記述によるとキエフに身を置いていた (次注) と思われる [Домбровский 2015: С. 302-304]。

281) この「テオドロス修道院」(монастырь Федора) は、1129 年にムスチスラフ [D11] がキエフのウラジーミル街に定礎した修道院で、12 世紀を通してかれの一族の菩提寺の役割を果たしていた。その後、キエフにおけるロスチスラフ [D116:J] の一族が菩提寺として管理していたようである [イパーチイ年代記 (8) : 227 頁, 注 261, 263]。フェドドラがこの修道院とかかわりを持っていた理由は不明だが、離婚後 (前注) に母親の出身家門であるキエフのリューリク [I2] の一族のもとに預けられて、そこで一生を過ごしたのではないか。

282) 「オヴルチ」(Уручий, Овручи) はリューリク [J2] 一族の拠点的な領地であり、プレディスラヴァの甥にあたるロスチスラフ [J221] が父ウラジーミル [J22] の死後 (1239 年 3 月)、公座を置いていた可能性がある。

【城市ホルムの天守塔、庭園、コジマ=デミアン教会などの建設について】

城砦の真ん中には高い塔があり²⁸³⁾、そこから城市の周辺を撃った²⁸⁴⁾。その基礎は石組でできており、高さは15ロコチあった²⁸⁵⁾。〔塔は〕削った木材で建てられ、チーズを塗ったような白塗ですべての側面が輝いていた。

ストゥデネツと呼ばれる井戸が、その〔塔の〕近くにあり深さは35サージェン²⁸⁶⁾だった。

〔聖金口イオアン教会の〕聖堂はいとも美しかったが、銅は〔ホルムの大火の〕炎によって【845】松脂のように融けてしまった。

〔ダニールは〕美しい庭園を造り、二人の清廉者²⁸⁷⁾〔聖コジマとデミアン〕に献じた教会を建てた。それは、石から削り出し表面を仕上げた4本の柱を持ち、天蓋を支えている。

同じ〔石から〕至聖なるドミートリイの至聖所²⁸⁸⁾〔の柱も造られ〕、それは聖堂脇の扉の前に立っている。遠くからもたらされた美しい〔柱〕である。

城砦から1ポプリシチェ²⁸⁹⁾離れたところに石の柱が立っている。その上には石造りの鷲が彫られ、その石〔の柱〕の高さは10ロコチであり、頭部と基部を加えれば12ロコチである。

283) この「城砦の真ん中の高い塔」(вежа же средѣ города висока)は、ポロヴェツ人やタートル人の移動式の幕舎と同じвежаの語が用いられている。これは、当時のヨーロッパの城郭建築で一般的だった、石造り城砦の中央に建てられ、公の館を兼ねた多層の「天守塔」(英語 Keep, 仏語 Donjon)と同様のものではなかったか。ただし、マイオーロフは、これを宗教的な用途が主体の一種の修道院ではないかと推定している [Майоров 2011: C. 460]。

284) 「撃った」(бити)はポゴージン写本はбытиとなっている。天守塔(前注)の上に弓や弩(いしゆみ)を据えて、城砦を包囲する軍隊と戦うためと考えられ、以下の1259年にブラルダイがホルムに到来したときにそのような防衛を行っている(下注339参照)。ロシア語訳はなぜか「周辺を見るために」と訳している。

285) 「ロコチ」(локоть)は長さの単位で、肘から中指の先までの長さに相当する(いわゆる肘尺)。1ロコチは45～47cmだから、天守塔の石組みの基礎(石垣)が15ロコチということは、7mほどの高さだったことになる。その上に木組みの建築物が建てられていた。

286) 「サージェン」(сажень)は長さの単位で、中世ロシアでは横に広げた両手の指先の間の長さで150cmほどに相当する。その場合、35サージェンは53mにもなってしまう現実的ではない。ここのサージェンは、最初期の片手を前方に伸ばした長さに相当すると考えるべきで、その場合35サージェンは26mほどにあたる。

287) 「清廉者」(безмѣздника)は、ギリシア語のἀνάγκυροιの翻訳借用語で、文字通りは「銀を持たない者」を意味する。この語は通常ルーシでは、聖コジマ(Козьма, Κοσμάς)と聖デミアン(Дамиан, Δαμιανός)の二体聖人をさしており、キリスト教受容の初期から崇拜されてきた。

288) 「聖ドミートリイの至聖所」(вольтарь пресвятаго Дмитрея)は、コジマ=デミアン教会に付属して設けられた、テッサロニキの聖人聖ドミトリオスに献じられた副祭壇(придел)を指している。

289) 1ポプリシチェ(поприще)はおよそ1.85kmに相当する(上注222参照)。

【聖金口イオアン教会の再建について】

〔ダニールは〕 こうして城砦が破壊されたのを見た。教会に入って、破壊の様子を目の当たりにして、とても残念に思った。そして、神に祈ると、再び〔聖堂を〕再建し、主教イオアン²⁹⁰⁾(Иван)の手で教会堂の献堂式を行った。そして、再び神に祈ると、より堅固でより高い〔聖堂を〕創建した。塔は同じものを建てることはできなかった。〔ダニールは〕神を恐れぬタタール人に対抗するために他の城砦を建てたのであり、それゆえそれ〔塔〕は建てなかったのである。

6768 [1260] 年²⁹¹⁾

【ダニールはホルムに聖母教会を創建する】

〔ダニールは〕ホルム(Холм)の城市に、至聖にして永久に汚れなきマリアの名の大いなる教会を創建した²⁹²⁾。それは、その偉容においても、美しさにおいても古くからある〔諸聖堂に〕比べて劣らぬものだった。そして、それ〔教会を〕いとも奇しきイコンをもって飾った。〔ダニールは〕ハンガリーの地から紅色大理石【846】の鉢を持参した。それは、奇しき業によって縁の周囲に蛇の彫刻がほどこされたもので、王門と呼ばれる中堂の門に置かれ、それは聖なる神現祭のときの水を浄めるための水盤として使われた。その〔鉢〕には福なる主教〔金口〕イオアン〔の像が〕美しい木から削り出され、金箔で覆われていた。〔聖堂は〕外側も内側も驚嘆に値するものだった。

290) 「主教イオアン」(Иван)については、6733(1223)年の記事に、ダニールの手によって、ホルムの主教に叙任されたこと、その経緯が記されている(叙任はおおよそ1260年のこと)[イパーチイ年代記(10): 285頁, 注330]。

291) イパーチイ写本だけにあるこの年記は、ダニールによるホルムの建築記事の真ん中に割って入っており不自然である。年記を挿入したイパーチイ写本〔の原本〕の編集者の誤解に由来するものだろう。

292) このホルム(ヘウム)の聖母教会は城市中央に築かれた高い丘(Wysoka Górkа)に聖金口ヨハネ教会とほぼ並んで建てられていたと推定される。これを「聖母就寝教会」(церковь Успения Богородицы)に献じられたとする研究もあるが根拠は不明。なお、ダニールは1264年に没したのち、この教会に埋葬されている(下注422を参照)。

【タタール人軍司令官ブラルダイの到来：1256/57年】

時が過ぎ²⁹³⁾、神を恐れぬ悪しきブラルダイ²⁹⁴⁾ (Буранда) は多くのタタール部人隊とともに大軍をもってやって来た。そして、クルムシが占めていた地位に就いた²⁹⁵⁾。ダニール [I111] はクルムシと戦争を行ってきたが、クルムシを恐れていなかった。なぜなら、ブラルダイが大軍と共に到来する以前に、クルムシは一度たりともかれ〔ダニール〕を害することはできなかったのだから²⁹⁶⁾。

〔ブラルダイは〕ダニールに使節団を遣ってこう言った。「わしはリトアニアを討伐に行くところだ。そなたが、〔わしの〕味方である²⁹⁷⁾のなら、わしと共に〔討伐遠征に〕出兵せよ」。

【ダニールはリトアニア討伐遠征参加を余儀なくされ、ヴァシリコを派遣する】

ダニール [I111] は弟〔ヴァシリコ [I112]〕と息子〔レフ [S2]〕と共に〔協議の席に〕座して、悲しみながら先のことについて話した²⁹⁸⁾。〔みなは知っていた〕。ダニール [I111] が出兵しても、

293) このタタール人ブラルダイの到来の時期について、フルシェフスキは前の記事からの時系列からみて1256/57年と推定している [Грушевский-Хронология: С. 361]。ただし、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事では、1258年の項に「この年にタタール人はリトアニア全土を征服した」としている [ПСРЛ Т.7, 2001: С. 162]。これは、どちらも定め難い。

294) 「ブラルダイ」(Буранда) (邦語文献では「ボロルタイ」「ブルンダイ」の表記も) は年代記で Бурундай, Бурундай などと表記されるモンゴル軍の軍司令官、バトゥ配下の万人長。本年代記では、1238年にブラルダイの襲撃によってヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕公ユーレイ・フセヴォロドヴィチ [K3] が殺された記事で、最初に言及されている ([イパーチイ年代記 (11): 225頁, 注 252] を参照)。ルーシ史料ではおよそ20年ぶりの登場だが同一人物と見てよいだろう。1251年にモンケが第4代皇帝に就くとき、バトゥの指示によってモンケの援軍に派遣されていることから、西征の後には、サライのバトゥのもとで仕えていたと考えられる。1256年初めにバトゥが没し、後継者とされた息子のサルタクも1257年に死亡して、サライでは不安定な政情が続いた ([Карпов 2011: С. 287-288])。おそらく、このような混乱の中で、1256/57年にタタール軍のガーリチ・ヴォルニニ地方のモンゴル総督が、クルムシからブラルダイに交代して、ブラルダイは活発な遠征を展開し始めたのだろう (次注, [Грушевский-Хронология: С. 361] 参照)。

295) ここの ста на мѣстѣх Куремьсьнѣх を、ロシア語訳 (ウクライナ語訳も同様) は遠征と関係づけて「〔クルムシがかつて布陣した同じ〕場所に陣を張った」と訳しているが、ここは、英訳のように、クルムシが占めていたガーリチ=ヴォルニニ地方の総督の地位を引き継いだと理解するべきだろう (前注も参照)。

296) 原文では分かりにくいですが、年代記記者は、それゆえに、ダニールは後任のブラルダイも恐れてはいなかったが、和議を結んでいたためやむを得ず遠征に参加した (次注)、と言いたいのではないか。

297) 「そなたが味方である」(еси мирен) は、あまり使われない表現で、ダニールがタタール人と和 (мир) を結んで、相手に服従している状態にあることを指している。そのため、ダニール=ヴラジミルコ陣営は、タタール人に服従していないリトアニア人に対する、ブラルダイの遠征への参加を余儀なくされたのである。

298) この協議は当時のダニールの本拠地であったホルムもしくはヴラジミルで行われた。

善いことはなにもないだろうということ。全員は協議を行って、ヴァシリコ [I112] が兄〔ダニール〕の代わりに進軍をした。〔ダニールは〕ベレスチエ²⁹⁹⁾ (Берестье) まで弟を送り、〔そこからは〕自分の家来たちを〔ヴァシリコに従軍させた〕。〔ダニールは〕神にして聖なる救い主、解放者³⁰⁰⁾〔のイコン〕に祈りを捧げた。【847】そのイコンはメリニク³⁰¹⁾ (Мѣльник) の城市の聖なる聖母教会にあったもので、現在も大いなる榮譽を献げられている。ダニール王 [I111] はかれ〔ヴァシリコ〕に対して、この〔救世主のイコンを〕飾りで装飾することを約束した。

【ヴァシリコはブラルダイと合流して、ともにリトアニアの地を掠奪する】

ヴァシリコ [I112] はひとり³⁰²⁾でブラルダイの後を追ってリトアニアの地を進軍した。〔かれは〕どこかの場所でリトアニア人を発見して、これを打ち破り、捕虜の分け前 (сайгар) としてブラルダイのもとへと連行した。ブラルダイはヴァシリコ [I112] を称賛して〔言った〕。「そなたの兄が来ないにしても〔そなたは大したものだ〕」。そして、〔ブラルダイは〕かれ〔ヴァシリコ〕とともに〔リトアニアの地を〕襲撃して、掠奪を行った。

かれ〔ヴァシリコ〕は自分の甥のロマン [S3] を探しながら³⁰³⁾、リトアニアの地とナリシアの地 (земля... Нальшаньска) を³⁰⁴⁾ 掠奪した。〔ヴァシリコは自分の〕公妃と自分の息子のウラジー

299) 「ベレスチエ」 (Берестье) は、西ブグ川右岸近くに位置しており、ヴァシリコの年少のころからの領地で、これまでもリトアニア人、ヤトヴァグ人討伐遠征のときには、出発の拠点となってきた。

300) 「聖なる救い主、解放者」 (святой Спас избавник) は、キリストを描いたイコンを指している。「救い主」 (спаситель, спас) と「解放者」 (избавитель, избавник) はキリストについての祈祷文では頻繁に対義語として用いられ、ヴァシリコにとって守護イコンの役割を果たしていたか。ここでは、コンスタンティノポリスを解放したという伝説があり 12 世紀にはルーシに広がった「聖顔布」 (Спас нерукотворный) の図像のイコンではなかったかと推定できる。

301) 「メリニク」 (Мѣльник) は西ブグ川中流域右岸に位置し、現在のポーランド、ピャウストク県のミエルニク村 (Mielnik) に相当する。ベレスチエ (現在のプレスト) から近く、ブグ川を下って北西へ 55km ほど離れている。ベレスチエの付属城市としてヴァシリコの所領になっていたのだろう。以下の記述で分かるように、ダニールはこのリトアニア人討伐のあいだ、ここに拠点を置いていた。

302) 「ひとり」 (одному) とは、上述の協議の結果を受けて、ダニールと一緒にではなく単独でということ。

303) ここは記述に時系列の混乱がある。当時ロマン [S3] はヴァイシュヴィルカスから受け取ったノヴォグロドクの城市を支配していたが (上注 185, 224 参照)、下注 308 にあるように、ヴァシリコの来襲を知ったヴァイシュヴィルカスによって捕らえられてしまった。そのためヴァシリコはロマンを取り戻すために探していたのである。

304) 「リトアニアの地とナリシアの地」 (земля Литовьская и Нальшаньска) とは、いわゆる黒ルーシ地方ではなく、それより北のアウクシュタイティア地方を指している。中でも「ナリシア」 (Нальшаны; Nalšia, Nalšena, Nalsen, Nalse) は、ほぼ、ネマン川中流域左岸、特にその左岸支流メルクス川 (Merkys, Мяркіс) 流域一帯を指し、現在のリトアニア東部と、ベラルーシとの国境地帯に相当する。当時、ナリシアは、リトアニアと同盟した独立勢力だったために、ここでは別記されているのだろう。

ミル³⁰⁵⁾ [I1121] を兄のもとに置いていた。

【ダニールは独自にヴォルコヴィエスクと周辺城市を攻撃する：1257年頃】

その後、ダニール王 [I111] は、ヴォルコヴィエスク (Волковыеск) を襲撃して、占領し、グレーブ侯³⁰⁶⁾ (Глѣб князь) を捕虜にすると、かれら〔ヴォルコヴィエスクで捕獲した捕虜たち〕を〔ホルムへと〕送還した。〔ダニールは〕かれ〔グレーブ〕に対しては名誉ある扱いをした。なぜなら、なによりも〔ダニールが〕ヴォルコヴィエスクへ襲撃を仕掛けたのは、自分の敵であるヴァイシュヴィルカス (Вышелк) とタウトヴィラス (Тевтивил, Тевтил) を捕獲するためだったからである³⁰⁷⁾。〔ダニールは〕かれら〔二人〕を〔ヴォルコヴィエスク〕城内で見つけることはできず、かれら〔二人を〕を〔城外の〕家畜小屋などを捜すために、自分の家来たちを派遣したが、二人を見つけ出すことはできなかった。なぜなら、二人は大いなる策略をなしたのだから。すなわち、ヴァイシュヴィルカスはかれ〔ダニール〕の息子ロマン [S3] を捕まえたのである³⁰⁸⁾。

305) ヴァシリコ [I112] の息子である「ウラジーミル」(Володимер)[I1121] についてはこの個所が初出。生年は明確ではないが、間接的な証言を総合すると1247年末～49年秋と推定され [Домбровский 2015: С. 406]、この時点ではまだ10歳に満たなかったため、ヴァシリコはこのときの遠征には加えずメリニクにいた兄ダニールに妃とともにかれの保護を託したのである。これ以降、本年代記ではかれについて頻繁に言及されている。

306) 「グレーブ侯」(Глѣб князь) の文言は、イパーチイ写本では2回繰り返されているが、これは写字生の不注意によるミスだろう。グレーブは、ロマン [S3] の岳父で (かれに関する諸説は上注191参照)、城市ヴォルコヴィエスクの侯だった。ダニールとヴァシリコにとっては姻戚に当たる人物である。

307) ダニールは、リトアニア支配下の黒ルーシ地方で依然として勢力を保っていたヴァイシュヴィルカス (ミンダウガスの息子) とその従兄弟のタウトヴィラス (かれは一時ダニールを庇護を受けていた。上注105参照) を自らの手で捕え、タタール勢に対して屈服の意を表明させることを企図したのではないか。そうすることで、ダニールのタタールに対する立場は確実に強化されることになる。なお、コトリヤールは、グレーブがミンダウガスへの恐れからガーリチ=ヴォルィンスキイ公の黒ルーシ地方の権益を守らないと見たダニールが、自ら支配に乗り出したと見ている [Котляр 2005: С. 313]。

308) リトアニア侯ヴァイシュヴィルカスは、ダニールと和議を結んで、1254年頃に自らの領地をロマン [S3] に引き渡したが (上注186)、今回ヴァシリコがタタール人と組んで来襲して来ることを知って、ダニール陣営 (ヴァシリコ) に対抗する戦略上の捕虜として、ロマンを捕まえたのである。これによって、1257/58年にヴァイシュヴィルカスはノヴォグロドクの支配公に復帰したことになる。

このことはダニール側から見れば和議の違反、つまり「大いなる策略」(велика лесть) ということにもなる。その後、ロマンはポーランド史料によれば1259年にサンドミェシュ包囲戦に参加し (下注356参照)、ポーランドの内訌でマゾフシェ公を支援していることから ([Щавелева 1978: С.312-313]参照)、捕虜の身からは解放されたのだろう。しかし、1262年のテルナフ (タルヌフ) 諸公会議 (下注390) の記事に出席者として名がないことから、1260年頃には没したと考えられる [Котляр 2005: С. 313]。

そこで、〔ダニール [I111]〕は再びミハイル³⁰⁹⁾ (Михаил) 〔の部隊〕を派遣して、ゼルヴァ川³¹⁰⁾ (Зелева) 流域を掠奪し、かれらを探しだそうとしたが、見つけ出すことはできなかった。

【ダニールはグロドノ攻撃を企図し、息子レフをメリニクまで呼び寄せて、遠征の準備をする】

その後、〔ダニールは〕グロドノ (Городен) を襲撃することを思いついた。二人〔ヴァイシュヴィルカスとタウトヴィラス〕がそこに居ると考えたのである³¹¹⁾。〔ダニールは〕息子のレフ [S2] と自分の家来たちを呼び寄せるための使者を遣った³¹²⁾。〔ダニールとレフの遠征部隊は〕城市メリニク (Мльник) に到着した。かれ〔ダニール〕はグロドノ (Городен) に進軍することを望み、かれら〔遠征部隊〕はみな急いでいた。

【ダニールの遠征軍はヴィズナへ偵察隊を派遣する】

ダニール王 [I111] のもとにポーランド人からの報告³¹³⁾ が届いた。タタール人はヤトヴァグ人 [848] のところにいるとのことだった。レフ [S2] は「あなたの軍兵も、その馬も飢えています³¹⁴⁾」と言った。かれ〔ダニール〕は答えてかれ〔レフ〕に言った。「われらは偵察隊をヴィ

309) この「ミハイル」 (Михаил) は、ロシア語訳の注によれば、ピンスク公ミハイル・ロスチスラヴィチ [B321322] を指し、かれは、1244/45 年のリトアニア侯レングヴェニスとダニール=ヴァシリコとの戦いの場面で言及されている ([イパーチイ年代記 (11) : 注 403])。かれは政治的にダニールに従属しており、このときも依然としてピンスクの公座に就いていたと考えられる。「再び (…) 派遣」 (пакы посла) とは、ダニールが自らのヴォルコヴィエスクへの遠征のときに、ピンスクからの参加をミハイルに命じたことを指しているだろう。なお、コトリャールはこの「ミハイル」をダニール配下の単なる軍司令官としている [Котляр 2005: С. 314]。

310) 「ゼルヴァ川」 (Зелева; Зельва, Зелевь) はネマン川の左岸支流でヴォルコヴィエスクに近い。現在のゼリヴァンカ川 (Зельвянка) に相当する。

311) 「グロドノ」 (Городен) は、ヴァイシュヴィルカスの旧支配地である黒ルーシ地方の北西にある主要な城市であり、二人が捕虜としたロマン [S3] を連れてそこに逃げ込んでいる可能性は高かったのだろう。

312) ダニール (当時おそらくホルムにいた) は、リヴォフにいる息子レフ [S2] のもとに使者を派遣して、すぐさまグロドノ遠征のための部隊を組織させ、ホルム周辺の城砦にいた家来たち (люди) にも同様の遠征を呼びかけた。レフと家来たちは、グロドノへの遠征の途上、遠征の拠点となる城市メリニクで合流したと考えられる。

313) この「ポーランド人」 (ляхи) は、当時ダニールと同盟関係にあった、マゾフシェ公シェモヴィト一世 (上注 3) を指している。ヤトヴァグの地はマゾフシェ公が勢力拡張を狙っている土地であり、シェモヴィトにとって、タタール人の侵攻、掠奪は無関心ではいらなかったはずである。

314) このレフの発言は、明らかにダニールのグロドノへの遠征の企てを諫止している。

ズナ³¹⁵⁾ (Визна) へ向けて派遣しよう」。ダニール王 [I111] は、〔偵察隊の〕軍兵たちとその馬に十分な食料を与えた。

**【ヤトヴァグの地にいたブラルダイは、ダニールがメリニクにいることを知って、そこへ向かう：
1258 年中頃】**

それ以前に、弟〔ヴァシリコ [I112] の消息〕を知るために、二人の使者が〔ダニールによって〕ヤトヴァグ人のもとに派遣されていた。タタール人がヤトヴァグ人のもとに到来したとき、この使者たちは捕らえられて、「ダニール [I111] はどこにいるのか」と尋問された。二人は「ミリニク (Милник)〔メリニク〕にいます」と答えた。かれら〔タタール人〕は言った。「すなわち、われらの味方 (ミルニク) である³¹⁶⁾ かれ〔ダニール〕の弟〔ヴァシリコ〕は、われらとともに〔リトアニアの〕掠奪を行っている〔のだから〕。そこ〔メリニク〕へ行こうではないか³¹⁷⁾」。

〔ダニールとレフが派遣した〕偵察隊はかれら〔タタール人の遠征部隊〕とすれ違って遭遇せず³¹⁸⁾、かれら〔タタール人〕はドロギチン³¹⁹⁾ (Дорогычин) へ向けて進軍していた。

ダニール [I111] のもとに〔そのことについて〕報告が届き、〔ダニールは〕レフ [S2] とシヴァールン [S5] を去らせた、ウラジーミル [I1121] も〔去らせた〕³²⁰⁾。〔ダニールは〕かれら〔三人に〕言った。「お前たちがわしのもとにいれば、お前たちはかれらの陣営に加わり〔タタール人と一緒に、

315) 「ヴィズナ」(Визна) は、ナレウ川 (Narew) 右岸にあり、ヤトヴァグ人の地とマゾフシェ公領との境界に相当するポーランド人側の拠点城砦だった (上注 37 を参照)。ダニールはレフの諫言 (前注) を受けて、タタール人の動向も考え合わせて、少数の偵察部隊のグロドノ方面への派遣を決めたのである。ヴィズナはメリニクからグロドノへの想定される行路のほぼ中間地点に相当する。

316) 「われらの味方」(мирникъ нашъ) は、上注 297 のブラルダイの言葉を踏まえて、ダニールの所在地「ミリニク」(Милник)〔メリニク〕にかけた地口・語呂合わせである。

317) ブラルダイ率いるタタール人のリトアニア討伐軍がメリニクのダニールのもとに「行こう」(туда идемъ) というのは、ヴァシリコだけでなく、ダニールも参加させて、リトアニア討伐をさらに大きく展開させようとのブラルダイの戦略に基づくものだろう。

318) この文言について、「態度を決めずに姿を現そうとしないダニールについて、タタール人〔ブラルダイ〕はその捕獲を狙ったように見える」とコトリヤールは解釈している [Котляр 2005: С. 314]。しかし、事態の流れから見れば、前注のようにリトアニア征服戦略にダニールを取り込むための行動であり、「捕獲」まで想定するのは読み込み過ぎではないか。

319) 「ドロギチン」(Дорогычин) は現在のポーランドのドロヒチン (Drohiczyn) に相当する西ブグ川河岸の城砦で、ダニールが滞在していたメリニクからだと、西ブグ川を下って 27km ほどと非常に近い。つまり、タタール軍はメリニクへ向けて軍を進めたのである。

320) ダニールは、グロドノ遠征のためにリヴォフから呼び寄せた二人の息子レフ [S2] とシヴァールン [S5]、ヴァシリコが保護を委ねていったその息子のウラジーミル [I1121] をメリニクから「去らせ」(послаша <...> вонъ) て、それぞれ帰郷させている。シヴァールン [S5] については呼び寄せの記述はないが、年少であったため、出発地のホルムから父のダニールに同行していたのだろう。

リトアニア人に対する] 襲撃をせざるを得ないだろう。もし、わしが…³²¹⁾」。

その後、1 年が経過した³²²⁾。

6769 [1261] 年

【しばらくの平静とヴァシリコの娘オリガの結婚：1259 年 10 月頃】

全地は平静だった。

この日々に城市ヴラジミルのヴァシリコ公 [I112] のもとで結婚式が行われた。〔ヴァシリコは〕自分の娘オリガ (Олга) をチェルニゴフのアンドレイ・フセヴォロドヴィチ公 [C412211] に嫁がせようとしていた³²³⁾。そのとき、ヴァシリコ [I112] の兄ダニール [I111] が、自分の二人の息子レフ [S2] とシヴァルン [S5] とともに〔出席して〕いた。他の諸公も多く、貴族たちも多く〔いた〕。城市ヴラジミルでは **[849]** 盛大に〔祝いの〕宴が催された。

【ブラルダイの再度の到来、ヴァシリコ等はシュームスクで出迎える：1259 年 10 月～ 11 月】

そのとき、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] のもとに〔ブラルダイの使者による〕報せが

321) すべての写本について、テキストは途切れており、内容的に完結していない。この時期のタタル人とダニールの関係を証言するはずの重要な記述が中断していることから見て、当然、編集過程での意図的な破棄が疑われる ([Ужанков 2009: С. 303-305] 参照)。

なお、本年代記編集の観点から見ると、この個所で、研究史では「ガーリチのダニール年代誌」(Летописец Даниила Галицкого) と通常呼ばれている、本『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の前半部分の編集単位が終わっている。

322) イパーチイ写本では「1 年が経過した」(минувшему лѣту) だが、フレーブニコフ系写本では「2 年が経過した」(минувшима двѣма лѣтома) と、はっきりとした異読がある。先のブラルダイの来襲から始まる一連の遠征が主に 1257 年を中心に行われたことから数えると「2 年が経過した」がより信憑性が高いか ([Грушевський-Хронологія: С.362] 参照)。

323) このアンドレイ・フセヴォロドヴィチの同定については、当時チェルニゴフ公だったと考えられるフセヴォロド・ヤロ波尔コヴィチ [C41221] の息子と推定できる [Baumgarten 1927: tabl. XII n. 4]。

当時のチェルニゴフの支配公については、1246 年にミハイル・フセヴォロドヴィチ [G41] がサライで処刑されて ([イパーチイ年代記 (11): 注 368] 参照) 以降、年代記ではほとんど言及されていない。ドニエプル左岸に位置するチェルニゴフ公領はおそらくモンゴル総督クルムシの直接支配に編入されて公支配は弱体化し、オレーグ一族ではあるが、ミハイル [G41] の遠縁にあたるフセヴォロド・ヤロ波尔コヴィチ [C41221] の手に渡ったと思われる [Baumgarten 1927: tabl. IV n. 58]。本来は新郎の拠点地で行われるべき結婚式 (свадба) が、新婦の出身地ヴラジミル=ヴォルィンスキイで行われていることから、チェルニゴフ公権力の弱体化ぶりが推察される。このアンドレイ [C412211] は、亡命のようなかたちで岳父にあたるヴァシリコ [I112] の庇護を受けていたのかもしれない。

来た。呪われた忌まわしいブラルダイ³²⁴⁾ (Буронда) が進軍して来るというのである。二人の兄弟〔ダニールとヴァシリコ〕はこのことについてとても悲しんだ。なぜなら、〔ブラルダイは〕こう言って寄越したからである。「そなたたちがわしの味方であるなら、わしを出迎えよ。わしを出迎えない者はわしに仇なす者である³²⁵⁾」。ヴァシリコ公 [P112] は自分の甥のレフ [S2] とともに、ブラルダイに会うために出発した。ダニール公 [P111] は弟〔ヴァシリコ〕に同行せず、自分の代わりに自分の〔城市〕ホルムの主教イオアン³²⁶⁾ (Иван) を〔ブラルダイのもとへ〕派遣した。

ヴァシリコ公 [P112] はレフ [S2] および主教〔イオアン〕とともにブラルダイに会うために出発した。多くの贈物と飲み物³²⁷⁾ を持参し、シュームスク³²⁸⁾ (Шумьска) でかれ〔ブラルダイ〕と会合した。ヴァシリコ [P112] はレフ [S2] および主教〔イオアン〕とともに、贈物を持ってかれ〔ブラルダイ〕の御前へ参上した。この者〔ブラルダイ〕はヴァシリコ公 [P112] とレフ [S2] に対して大いなる怒りを発した³²⁹⁾。猥下〔主教イオアン〕は大きな恐怖に立ちすくんでいた。

その後、ブラルダイはヴァシリコ [P112] に言った。「そなたたちがわしの味方であるなら、

324) 「ブラルダイ」については、数年（2年）前の1256/57年のリトアニア遠征の記事では「神を恐れぬ悪しき」(безбожный злый)の形容語が付いていたが（上注294参照）、この記事では「呪われた忌まわしい」(оканный проклятый)と別の形容語が付されている。これは記者（編集者）の交代を反映しているだろう（上注321参照）。

325) このブラルダイの言葉で、「味方」(мирници)と「仇なす者」(ратный)の語が対比的に用いられている。この対比は、『キエフ年代記』で何度も引用されている格言「平和は戦争まで、戦争は平和まで」(миръ стоить до рати, а рать до мира)にも見ることができる（『イパーチイ年代記(5)：注73』などを参照）。

326) 「ホルム主教イオアン」(Иван)については、上注290でホルムの金口ヨハネ教会の献堂式を行った主教として言及されている。なお、教会の高位聖職者が公の代理人として政治・外交の使節の長として派遣されることは、当時の慣習としては普通のことだった。

327) この「飲み物」(питье)は、おそらくルーシの宮廷で飲まれていた酒(вино)を指している。タタール人との外交使節儀礼の中で贈物(дар)としての酒がとりわけ重要な役割を果たしていたことは、1246年のダニールのバトゥ＝ハンへの参内のエピソードからも見ることができる（『イパーチイ年代記(11)：注461以下を参照』）。

328) 「シュームスク」(Шумьска)は、ゴリナ川支流ヴェリヤ川(Велья)河岸の城砦。現在のウクライナ、テルノーピリ州の都市シュムシク(Шумськ)に相当する。ヴラジミルからだだと、南東方向に150kmほど離れている。ブラルダイは拠点地であるドニエプル下流域から南ブグ川を遡行する方向でポニジエ地方を通過してこの城市に到達したのだろう。

329) この「大いなる怒りを発した」は原文では、велику опалу створти。この表現は、君主が臣下に向ける激怒、叱責を意味しており、年代記記者もブラルダイとヴァシリコの主従関係を前提に記述している。ブラルダイが「激怒した」直接の理由は記されていないが、事態の進展から見て、タタール人のガーリチ＝ヴォルィニ地方の管理（貢税徴集や兵力・労力の徴発など）にとって、防備が整った城砦が各地に残され、いつでも抵抗の拠点になることを、ブラルダイは懸念して怒りを発したのだろう。

自分のすべての城市〔の防備〕を取り壊せ³³⁰⁾。〔そこで〕レフ [S2] はダニーロフ (Данилов) とストジェク (Стожек)³³¹⁾〔の防備を〕取り壊した。そして、そこから人を派遣して、リヴォフ〔の防備も〕取り壊させた。ヴァシリコ [I112] は人を派遣して、クレミヤネツ³³²⁾ (Кремянџц) とルチェスク³³³⁾ (Луческъ)〔の防備を〕取り壊させた。

【ブラルダイの怒りを知ったダニールはポーランドへ逃げる：1259】

ヴァシリコ公 [I112] はシュームスクから (ишь Шюмьска), [主教] イオアンを〔城市ホルムの〕自分の兄ダニール [I111] のもとへ先行して派遣した【850】。主教はダニール公 [I111] のところに着くと、起こったことをかれ〔ダニール〕に語り始め、ブラルダイの怒りについてもかれに証言した。ダニール [I111] は恐れをなして、ポーランド人のもとへ逃げ出し、またポーランド人のもとからハンガリー人のもとへと逃げた³³⁴⁾。

【ブラルダイは城市ヴラジミルを武装解除する：1259 年】

こうして、ブラルダイはヴラジミルへ向けて軍を進めた。ヴァシリコ公 [I112] はかれ〔ブラ

330) ブラルダイが要求した「城市を取り壊す」(розмегаги город) とは、城砦の城壁・城柵を取り壊して無防備状態に置くこと。以下の「〔土塁と壕の〕埋め戻し」(роскапати) も同じく、相手の降伏・恭順を保証させる示させる方策である。

331) 「ダニーロフ」(Данилов) と「ストジェク」(Стожек) は互いに 2km ほどしか離れていない城砦で、ストジェクは現在のテルノーピリ州シュムシク区スティジョク村 (Стіжок) に相当する。ダニーロフはそこから東北へ 2km 離れた丘のダニロフカ村 (хутор Даниловка) 遺構に同定されており、シュームスクからだ、西北西へ 20km ほど行ったごく近傍である。両方ともダニールの手で丘の上に新しく建設された城砦で投石機に対する防備に優れていた ([Котляр 2005: С. 315-316] 参照)。ヴァシリコは、恭順の証として、取りあえず近場の新しい城砦の防柵を壊したということになる。

332) 「クレミヤネツ」(Кремянџц) は、ベリヤ川 (Велья) とイクヴァ (Иква) 川の上流地帯に位置している。現在のウクライナ・テルノーピリ州クレメネツ市 (Кременець) に相当する。シュームスクからだ、西へ 28km ほどと非常に近い。1253 年頃のクレムシの来襲のときもこの城市に来ており (上注 169 参照)、この地方の中心城市の一つだった。

333) ストイ川 (Стырь) 中流河岸の「ルチェスク」(Луческъ) (現在のルーツク市 (Луцьк)) はヴォルィニ公領にとって中心的な城市で、シュームスクからだ北西へ 90km ほど離れている。

334) このダニール [I111] のポーランドおよびハンガリーへの逃走については別史料がある。1260 年 7 月 12 日に、オーストリアとハンガリー国境のクレッセンブルンにおいて、オタカル二世・プシェミスルがハンガリー王ベアラ四世の部隊に決定的な勝利を取めた。この、長期にわたるオーストリアの王位継承権の争奪抗争を決定づけた戦闘の際に、オタカル二世がローマ教皇アレクサンドル四世に送った書簡の中に「ルーシの王ダニールとかれの息子たち、その援軍にやって来た他のルーシ人、タタール人たち」と戦ったという記述がある。またこの戦いには「クラクフのポレスワフ公と〔その息子の〕若いウエンチツァ公のレシエク〔二世〕」も参戦していたとある [Майоров 2012b. С. 47-48]。つまり、ダニールの「逃亡」には、ハンガリー王への援軍をポーランドで組織して、ポーランド諸公とともにともにハンガリーへ遠征したという側面も想定することができるだろう。

ルダイ]に同行していた。かれ〔ブラルダイ〕が城市〔ヴラジミル〕へ到達する手前で、ジタニ³³⁵⁾(Житань)で夜営をしたとき、ブラルダイは〔城市〕ヴラジミルについて言った。「ヴァシリコ [I112] よ、城市〔ヴラジミル〕〔の防備を〕取り壊せ」。ヴァシリコ公 [I112] は、城市〔ヴラジミル〕についてひとりで思いを巡らしはじめた。なぜなら、それ〔城市〕が広大なため速やかに取り壊すことはできなかったからである。そして、〔ヴァシリコは〕城市〔の防柵〕を焼くよう〔使者を遣って〕命じ、一夜ですべて〔の防柵が〕焼き尽くされた。

翌朝、ブラルダイはヴラジミルに到来し、城市〔の防柵が〕すべて焼き尽くされているのを自分の眼で見た。そして、〔ブラルダイは〕ヴァシリコ [I112] の館で食事をして飲み始めた³³⁶⁾。食事をして飲み終わった〔ブラルダイは〕その夜、ピャチドゥニ³³⁷⁾(Пятідні)で休息した。

翌日、〔ブラルダイは〕バイムル³³⁸⁾(Баимур)という名のタタール人を〔ヴァシリコのもとへ〕派遣した。バイムルは公〔ヴァシリコ〕のもとに馬でやって来ると言った。「ヴァシリコ [I112] よ、ブラルダイはわしを派遣して、わしに城市〔ヴラジミル〕〔の土塁と壕を〕を埋め戻すように命じた」。ヴァシリコ [I112] はかれ〔バイムル〕に言った。「そなたに命じられたことをなすがよい」。〔バイムルは〕城市〔の土塁と壕を〕勝利のしるしとして埋め戻し始めた。

【ブラルダイはホルムを攻めようとするが、ヴァシリコの妙策によって降伏せず：1259年】

その後、ブラルダイが【851】ホルム(Холм)へとやって来た。ヴァシリコ公は自分の貴族たち、自分の家来たちとともに、かれ〔ブラルダイ〕に同行した。一行がホルムに到着すると、城市は〔城門を〕閉じていた。一行は〔城市に〕近づくと、そこから離れたところで幕営を張った。かれ〔ブラルダイ〕の軍兵は何もすることができなかった。なぜなら、その〔城市の〕中には貴族たち、身分の高い者たちがおり、城市の守りは投石機や弩弓によって堅固だっ

335) 「ジタニ」(Житань)は、西ブグ川支流ルーガ川(Луга)右岸にあった村で、現在のヴォルィニ州ヴォロディミル=ヴォルィンシキイ区ジタニ村(Житані)に相当する。ヴラジミルへは北西へ約9km行けば到達する。

336) タタール人との外交における酒にかかわる贈物や接待の重要性については上注327を参照。

337) 「ピャチドゥニ」(у Пятіднѣхъ) (イパーチイ写本の読みは у Пятідна) は、ルーガ川(Луга)左岸にある現在のピャチドゥニ村(Пятідні)に相当する。ヴラジミルの城市からは西へ7kmほど離れており、タタール人遠征軍の宿営に適した場所だったのだろう。

338) 「バイムル」(Баимур)は状況から判断して、ブラルダイの側近の高位の軍司令官だが、ウクライナ語訳の注は、名前の一致からだろう、かれをジュチの年少の息子トカ=テムル(Тука-Тимур, ベルシア語 Tūqā Tīmūr:のちのカザン、カザフ、クリミア諸汗国王朝の始祖)の息子バイムル(Бай-Тимур)〔バイ=テムル〕に比定している(Літопис руський, 1989: С. 421, прим. 4)。

たからである³³⁹⁾。

ブラルダイは城市〔ホルム〕が堅固で、これを攻略することはできないことを知ると、ヴァシリコ公 [П112] に次のように話し始めた。「ヴァシリコ [П112] よ、見よ、これはそなたの兄の城市である。行って、住民に話すがよい。〔城市を〕引き渡すようにと」。こうして、ヴァシリコ [П112] に3人のタートル人、すなわちクイチイ (Куичий)、アシク (Ашик)、ボリュイ (Болюй) という名の者たち³⁴⁰⁾を同行させて派遣した。さらに加えて³⁴¹⁾、ヴァシリコ [П112] が話すルーシの言葉を理解する通訳を付けた。かれらは城壁の下にやって来ると、〔ヴァシリコは〕住民に向かって話し始めた。かれ〔ヴァシリコ〕とともに派遣されたタートル人たちは〔次のヴァシリコの言葉を〕聴き始めた。「僕 (しもべ) の³⁴²⁾ コンスタンチン³⁴³⁾ (Костянтин) よ、また、そなた、別の僕 (しもべ) のルカ・イヴァンコヴィチ³⁴⁴⁾ (Лука Иванкович) よ。見よ、これはわが兄とわしの城市である。降伏せよ。〔ヴァシリコは〕こう言うと、小石をひとつ下方へ落とした。かれら〔住民たち〕に巧妙な手段で知らせたのである。戦うように、降伏しないように

339) 城市ホルムの防衛については、先のホルムの城市建设の記述の中で、塔 (вежа) の上から撃つことができた (上注 284) という記述がある。つまり、投石機 (порокы) や弩弓 (самострѣлы) を城市中心に建てた塔の上に持ち上げたのだろう。なお、コトリヤールはこの個所について、ホルムは丘の上に高く盛り土をした城砦だったため、タートル側の投石による攻撃に対しては強い防衛力を発揮した、ことを強調している [Котляр 2005: С.316-317]。

340) この名が挙げられている3人はヴァシリコが裏切らないようにする監視役だが、かれらの身分など詳細については不明。

341) 原文は、イパーチイ写本が к тому に対して、フレーブニコフ系写本は Хому と通訳の名前ともとれる表記になっている。ここでは、前者の読みを採用した。

342) 「僕 (しもべ) の」 (холопе) という呼格を用いた呼びかけが、政治・社会的従属関係をあらわす言葉として使われることについては [イパーチイ年代記 (11): 注 470] を参照。ここでは、ヴァシリコはガーリチ防衛にあたる貴族に対して、自分が「主人」であり、自分の命令に聴き従わねばならないことを、この言葉を用いることによって、監視役の3人のタートル人に知らせめようとしたのだろう ([Горский 2019: С. 362] 参照)。

343) 「コンスタンチン」 (Костянтин) はポロジシロ (Положишило) と称されるダニールの側近貴族で、1256年にはヤトヴァグ人のもとへ徴税のための使者として派遣されている (上注 211)。ダニールにとってはホルムの守備を託するに信頼できる人物だったことが分かる。

344) 「ルカ・イヴァンコヴィチ」 (Лука Иванкович) は、コンスタンチンと同様にホルムの貴族で軍司令官だったことが推定できる。父称をともなっていることから身分は高かったに違いない。

と。〔ヴァシリコは〕この言葉を三度口にして、三度石を下方へと投げた。この大いなる公³⁴⁵⁾ ヴァシリコ [I112] は、あたかも住民を救うために神から派遣された【852】ごとく、かれら〔住民たち〕に巧妙な手段でものの理（ことわり）を知らせたのだった³⁴⁶⁾。

コンスタンチンは、都市の胸壁の上に立って、智恵によってヴァシリコ [I112] からかれに与えられたものの理（ことわり）を理解して、ヴァシリコ公 [I112] に言った。「立ち去るがよい、さもないとそなたの額に石礫をお見舞いするぞ。そなたはもはやそなたの兄〔ダニール〕の兄弟ではない、かれ〔ダニール〕に仇なす者だ」。公〔ヴァシリコ〕とともに城下に派遣されたタター人たちは、これを聴くと、ブラルダイのもとに戻り、ヴァシリコ [I112] がどのような言葉を住民に語ったか、住民がそれに対してヴァシリコに何を語ったかについて報告した。

【ブラルダイはホルムから西へ向かいポーランド領内に進攻する：1259年】

その後、ブラルダイは速やかにルブリン³⁴⁷⁾ (Люблин) へ向けて出発した。そして、ルブリンからザヴィホスト³⁴⁸⁾ (Завихвост) へ向かい、ヴィスワ川 (рѣка Висла) に到着した。そして、ヴィスワ川の渡渉地点を見つけると、川の対岸へと渡り、ポーランドの地の掠奪を始めた。

345) ヴァシリコ [I112] に対する「大いなる公」(великий князь) の称号はこの個所が本年代記では初めてである。これまでこの称号は父親のロマン [I11] に対して使われることが最も多く、さらにヴラジミル＝スーズダリの支配公ユーレイ [K3] に用いられてきた。また、ヤロスラフ [K4] とポーランドのマゾフシェ公コンラート一世(上注1) に対しても死亡記事の中で用いられている。全体として本年代記では、この称号は死亡した公に対する称揚的な働きが強い。その意味では、称賛の文脈ではあれ生きているヴァシリコについてこの称号が用いられているのは、やはり編集者の交代によって、用語の理解が変わったことによるのではないか。

346) ブラルダイはヴァシリコに監視役と通訳をつけて、ホルム住民へ降伏勧告をするよう強いたが、ヴァシリコは実際に発した表向きの勧告の言葉とは裏腹に、その身振りによって徹底抗戦すべきことを伝え、ホルム側も了解したという、この興味深いエピソードの身振りについての解釈は難しい。歴史家イロヴァイスキは、この石を下方へ投げる身振りは投石の比喩であり、「降伏するのではなく、投石機を使って防衛せよ」とのメッセージであると説明している [Иловайский Т. 1(2) 1880: С. 472]。

なお、ヴァシリコが、機転を利かせることで敵を幻惑して目前の危機を回避したエピソードは、1230年のガーリチ貴族の反ダニールの謀議の記事にもあり ([イパーチイ年代記(11): 178頁, 注5] 参照)、ヴァシリコの聡明さを生き生きと伝えている。

347) 現在のポーランド、ルブリン県の都市ルブリン (Lublin) に相当する。ホルムからは西へ64kmほど離れている。なお、この先ブラルダイがとった、ホルム⇒ルブリン⇒ザヴィホスト⇒ヴィスワ川渡河⇒サンドミェシュの遠征行程は、従来、ダニール等のヴォルニニ公がポーランド (サンドミェシュの地) へ遠征を行うときのルートであり ([イパーチイ年代記(11): 注375,383] 参照)、ブラルダイのこの遠征路の選択にはヴァシリコ [I112] の関与(助言、案内など)があったことが推察される。

348) 「ザヴィフホスト」(Завихвост) は、現在のポーランドのザヴィホスト (Zawichost) に相当するヴィスワ川左岸の都市で、ルブリンからだと南西へ70kmほどのところにある。ここにヴィスワ川の渡河地点(渡渉地)があった。

【ブラルダイによるサンドミェシュ攻囲戦：1259 年 11 月】

その後、〔ブラルダイは〕 スドミール³⁴⁹⁾ (Судомирь) 〔サンドミェシュ〕 に到来し³⁵⁰⁾、〔この城市を〕 あらゆる方向から包囲して封鎖すると、城市の周囲に投石機を据え付けた。そして、昼夜を分かたず執拗に投石を行った。〔城内からの〕 矢によって、胸壁³⁵¹⁾ の内側に侵入することはできなかつた。4 日間戦闘が続き、4 日目に城砦の胸壁を撃ち落とした。

タタール人たちは城壁に梯子を立てかけ始め、こうして城内へと這い上って来た³⁵²⁾。先頭には **[853]** 二人のタタール人が戦旗 (хоругвь) を手に城壁の上へ這い登り、斬ったり突いたりしながら城壁の上を走りだした。その一人は城壁の一方の側を巡り、もう一人は別の側を巡り始めた。

一人のポーランド人がいた。かれは、貴族でも高い身分の者でもなく、平民だったが、甲冑もまともわず、上衣だけの姿で手槍を手に必死になって、あたかも強固な盾のごとく守り、記憶に値する仕事をなした³⁵³⁾。かれは、ひとりのタタール人に向かって突進し、これと衝突するや、そのタタール人を殺した。別のタタール人が背後から駆け寄ってきて、このポーランド人を打ち、ポーランド人はその場で殺された。

人々は城壁の上のタタール人たちを見て、内城へ向かって³⁵⁴⁾ われ先にと駆け出した。しかし、城門のところで足の踏み場もなく〔動けなく〕 なった。城門の橋の幅が狭かったのである。ある者は互いに押し合い、他の者は橋から壕へと藁束のように落下した。壕は見たところ非常に

349) 「スドミール」(Судомирь) は、ヴィスワ川左岸のマウオボルスカ地方の中心城市のひとつで、現在のサンドミェシュ (Sandomierz) に相当する。サヴィフホストからなら、ヴィスワ川左岸沿いに 15km 南へ遡れば到達する。(『イパーチイ年代記 (11) : 注 277] 参照)

350) フルシェフスキは、『ヴィエルコポルスカ年代記』(Kronika wielkopolska) の中の記述「使徒アンドレアス祭日〔11 月 30 日〕の前 (ante festum Andrea apostoli)」に拠って、ブラルダイのサンドミェシュ来襲を 1259 年 11 月に比定している [Грушевьский-Хронология: С.362]。

351) 「胸壁」(забороло) は城砦の土塁や市壁の土台の上に組み上げて建てた木製の防備柵のこと。数層になるよう高く組み上げられることもあり、敵の投石攻撃や侵入から城砦を守った。

352) この部分の戦闘場面の描写は、ヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ戦記』のスラブ語版第 1 書 18 章のヘロド王による宮殿襲撃の場面と表現が似ており、そこからの借用が想定される ([Мещерский 1958: С. 198] などを参照)。ただし、当時のサンドミェシュ城砦は急峻な丘の上にあり、この描写は現実を無視した全面的な借用というわけではないようである。

353) この「記憶に値する仕事をなした」(сотворити дело памяти достойно) の表現は 1281 年の記事でも繰り返し使われている。ヨセフス『ユダヤ戦記』第 6 書 3 章に「ロギンという若者が記憶に値する仕事をなした」«уноша, именемъ Логинъ дело сътвори достойно памяти» との表現があり [Мещерский 1958: С. 411] ([ユダヤ戦記 (3) : 46-47 頁] 参照)、状況も似ていることから、やはり借用が想定される。

354) 「内城」(дитиньць) とは、現在の王宮 (Zamek królewski) の場所をさしている。城市南端の小高い場所にあり、城市とは細い道でつながっている。

深く、死体で溢れていた。死体の上をあたかも橋のようにして歩かねばならなかった。城内の兵営は藁で覆い隠されていたが、それが次々と火で燃え上がった。〔サンドミュシュの〕城市が炎上し始めたのである。

この城市には幾つかの石造りの教会があり、大きくて立派で、美しく輝いていた³⁵⁵⁾。削った白い石材で建てられたもので【854】、それには〔避難してきた〕人々が満ちていた。教会の屋根は木材で覆われていたが、それは焼け始め、教会堂も炎上した。その中には数え切れないほどの人がいた。

〔防衛側の〕戦士たちだけがなんとか城市から逃げ出した。

翌日、典院たちが、司祭、輔祭たちとともに教衆を集めて、聖体礼儀を唱った。最初に自分たち自身が聖体を拝領し、その後には貴族とその妻子たちが〔聖体拝領をした〕。こうして貴賤をとわず全員が〔聖体に与った〕。そして、告解が始まった。ある者は典院たちに、他のものは司祭や輔祭に〔告解を行った〕。なぜなら、城内には多数の人々がいたからである。その後、〔人々は〕十字架を手に、蠟燭や香炉を携えて城外に出た³⁵⁶⁾。貴族やその夫人たちは結婚式の衣装で身を飾り、貴族の家来たちはかれらの前を、その〔貴族の〕子供たちの前を連れて〔歩いた〕。大いなる泣き声と慟哭があった。夫は自分の妻のことを嘆き、母親は自分の子供のことを嘆き、兄は弟の〔ことを嘆いた〕。かれらを慈しむ者は誰もいなかった。神の怒りがかれらに向けられたのだから。

かれら〔住民〕は城市から追い出され、タートル人はかれらをヴィスワ川沿いの防塁の

355) この教会は、サンドミュシュ首座教会の処女マリア教会で、カジミュシュ二世正義公の命令により建設され、1191年に献堂されている。現在の聖母生誕大聖堂（バジリカ）(Bazylika Narodzenia Najświętszej Maryi Panny) にの礎石部分に、わずかながら古い教会の跡が確認できる [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 212, przyp. 1320]。

356) サンドミュシュ住民が城外へ出た事情について『ヴィエルコポルスカ年代記』(Kronika wielkopolska) の第130章に次のように記されている。「ルーシ諸公、すなわちルーシ王ダニールの弟のヴァシリコ [I112]、それから〔ダニールの〕息子たちレフ [S2] とロマン [S3] は、包囲が長引いているのを見て、城砦に立て籠もる住民を欺こうと考えた。かれらは身の安全を保障して、住民と会合した。安全の保証をタートル人に願ひ、城砦と中の財産を差し出せば、命は助けるだろうと説得したのである。住民は(…)諸公の忠言に欺かれて(…)城門を開いた」[Великая хроника 1987: С. 184]。ルーシ諸公、ルーシ人のサンドミュシュ包囲の参加について本年代記には言及がないが、ヴァシリコとレフが、ホルムからルプリン経由でサンドミュシュまでブラルダイ軍に従軍していた（従軍を強いられていた）ことは事態の進展から見て疑いなく、これは本年代記記者の故意の沈黙によるものである。ロマン [S3] については、『ヴィエルコポルスカ年代記』に拠るかぎり、1258年にヴァイシュヴィルカスの手で捕虜になったが逃げ出して（もしくは解放されて）、父ダニールの庇護のもとに戻ったことが分かる（上注308参照）。[Щавелева 1978: С.312] も参照。

間³⁵⁷⁾に収容した。かれらは防塁の間に2日間身を置いて、その後かれらは打ち殺され始めた。男も女も全員で、かれらの中で〔生き残った者は〕一人もいなかった³⁵⁸⁾。

【ブラルダイは転戦して、サンドミェシュの地ルィセツを攻略する】

それから、〔タートル人は〕ルィセツ³⁵⁹⁾ (Лысьць) 【855】の城砦へとやって来た。かれらは〔城砦へ〕到来すると包囲した。〔ルィセツの〕城砦は森林の中の丘の上にあった。そこには石造りの聖三位一体教会³⁶⁰⁾ (Свято́й Трои́ць)があった。城砦は守りが堅くなかったため、〔タートル人は〕これを占領すると、貴賤を問わず〔住民を〕斬り殺した。その後、ブラルダイ (Бурандай) は戻って³⁶¹⁾、自分の移動幕舎 (вежа) へと帰って行った。

このようにして、ストミール〔サンドミェシュ〕の攻略 (Судомирському взятъе) は終わった³⁶²⁾。

6770 [1262] 年

【リトアニア人がマゾフシェを襲撃。シェモヴィト公は殺され、コンラート公は捕虜となる： 1262年6月23日】

リトアニア人がミンダウガスのところから〔派遣されて〕ポーランド人を掠奪するために進

357) この「ヴィスワ川沿いの防塁の間」(болоньи возлѣ Вислы)は、内城(現在の王宮(Zamek królewski))から南へヴィスワ川に下った場所に築かれた土塁のあった場所を指しているだろう。

358) 最終的なサンドミェシュの都市の陥落とブラルダイ軍による住民の殺害は、1295年の教皇ボニファチオス8世の勅書に基づいて、1260年の2月2日と推定することができる。つまり、サンドミェシュ攻囲戦は2ヶ月近く続いた大規模な戦闘だった [Kronika halicko-wołyńska 2017: s.211, przyp. 1314]。

359) 「ルィセツ」(Лысьць)は、歴史的にウィサ・グラ〔狐山〕(Łysa Góra)と呼ばれた山で、現在のシフィェンテイクシシュ県シフィェンテイクシシュ〔聖十字架〕山地(Góry Świętokrzyskie)の頂上地点に当たっている。サンドミェシュから北西方向に52kmほど離れている。ポーランド語訳注によれば、異教の霊場だった山頂の場所に11世紀初めにベネディクト修道会が修道院を建設したことが始まりとされている。ここで「城砦」(город)としているのは、住民が居住する場所というより、山上の立地を利した避難地を指しているのだろう [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 212, przyp. 1324]。

360) この教会について、ポーランド語訳注によると、現在ウィサ・グラの山頂にある聖十字架修道院の建物の基礎部分には、ロマネスク様式の聖堂の遺跡が確認されており、この聖堂を指していた可能性がある [Kronika halicko-wołyńska 2017: s.212-213, przyp. 1326]。

361) フレーブニコフ系写本は「戻って」(назад)だが、イパーチイ写本は「西へ」(на запад)となっている。後者は状況的に不合理であることから誤記と見なして、前者の読みを採った。

362) 本年代記の記述では、ブラルダイの遠征軍はサンドミェシュとその周辺を攻略した後に、自分たちの根拠地(ドニエプル川下流域)へ帰還したように書かれているが、タートル軍の分遣隊はクラクフまで到達し1260年の末まで大規模な掠奪と捕虜獲得を行っている。

軍した。オスタフィ・コンスタンチノヴィチ³⁶³ (Остафьи Костянтинович)[H441] もかれら〔リトアニア人〕と一緒にいた。かれは呪われた無法の者で、リャザンから逃亡してきたのだった。

リトアニア人はヨハネの日³⁶⁴の前夜、まさにクパラの日、エズドフ³⁶⁵ (Ездov) を急襲した。そこで、シェモヴィト公³⁶⁶ (Сомовит князь) を殺し、かれの息子のコンラート³⁶⁷ (Кондрат) を捕まえた。多くの捕虜を捕獲した。このようにしてから、〔リトアニア人は〕帰郷した³⁶⁸。

363) 「オスタフィ・コンスタンチノヴィチ」(Остафьи Костянтинович) はギリシア式の名「エフィスタフィ」(Евстафий) の異形。リャザン人の共通性と父称から、1242年の記事にある、ロスチスラフ [G411] の手でリャザンからベレムィシエリへ代官として派遣されていた、コンスタンチン・ウラジーミロヴィチ [H44] ([イパーチイ年代記(11): 240頁, 注347]) の息子に当たると推定されている ([Котляр 2005: С. 263][Носенко 2015: С.164-166] 参照)。1242年にダニール派遣軍に追われてオスタフィは父とともにガーリチからハンガリーに逃げ、その後、リトアニアのミンダウガスのもとに軍司令官として勤務したのだろう ([イパーチイ年代記(11): 241頁, 注350] 参照)。ここでは、公族でありながら、リトアニア人のミンダウガスに勤務して、ポーランドへの遠征の指揮をとっていたことから、年代記記者にとっては「呪われた無法者」(оканьный и безаконный) という形容がなされたのだろう。

ただし、ポーランド語訳注は、年代の懸隔があるとして公族説を斥け [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 213, przyp. 1329], リャザン出身の貴族(боярин) だったとしている(ロシア語訳注も同じ)。

364) 洗礼者ヨハネ生誕の日で6月24日に相当する。記事の時系列やポーランド史料によるシェモヴィト公の没年(下注366)から、年代は1262年と推定される。

365) 「エズドフ」(Ездov) は、現在のワルシャワ市内のワジェンキ公園(Park Łazienkowski)の周辺にあった城砦。現在のウヤズドフ区(Ujazdow)にその名称が残っている。ヴィスワ川河岸に築かれたマゾフシェ公領の城砦の一つで、当時シェモヴィト父子はここに拠点を置いていた。

366) 「シェモヴィト」(Сомовит) はマゾフシェ公シェモヴィト一世(Siemowit I Mazowiecki) (在位1248~1262年)(上注3参照)のことで、かれはマゾフシェ公就位の時点から一貫してダニール [I111] とは友好関係を保っており、対ヤトヴァグ人遠征も共同して行っている(1253年, 1255年)。かれの死の状況や時期については、ポーランド史料とほぼ一致している [Грушевський-Хронологія: С. 362-363]。

367) 「コンラート」(Кондрат) は、チェルスク公コンラート二世(Konrad II) (マゾフシェ公の在位1264年-1275年)を指し、シェモヴィト一世(前注)の長男で、この時はまだ12歳ほどだった。かれは、リトアニアで2年間虜囚生活を過ごしたのちに1264年に解放されてマゾフシェに戻り、弟のボレスワフ二世と共同統治を行った。1275年以降はチェルスク(Czersk)に公領を移し、1294年に没している。

368) このリトアニア人のマゾフシェ襲撃について、15世紀の歴史家ヤン・ドゥウゴシュ『ポーランド王国年代記』第7書1262年の項には、ルーシ人も襲撃に加わっていたこと、リトアニア人はルーシ人と同盟を結び、森林を密かに通って、夜襲を仕掛けてシェモヴィトと息子のコンラート、配下の騎士をエズドフ(Iaszowsko, Iaszdow, Iaszden)で捕らえ、大規模な掠奪をおこなったこと、ルーシ人はポーランド人へ憎しみを持っており、シヴァルン(Swamirus, Swarro,) [ダニールの甥になっている] が、シェモヴィト苛んで残酷に殺したこと、コンラートはミンダウガスの息子〔ヴァイシュヴィルカス〕のおかげで命がすくわれ、同じ年に買い取られて解放されたこと、などが記されている [Długosz ks.7-8, 2004: s. 167-168][Długosi Liber 7/8, 1975: p. 135-136]。また、同様の情報は『ヴィエルコポルスカ年代記』(Kronika wielkopolska)の第138章にも記されている [Великая хроника 1987: С. 188]。ただし、これまでのダニールとシェモヴィト公との同盟関係や直後の記事のヴァシリコとミンダウガスの対立関係から見て、この襲撃への組織的なルーシ人の参加は不思議である。

【リトアニア人がカメネツ方面を襲撃する。ヴァシリコは討伐隊を派遣する：1262 年夏～秋】

ミンダウガスは忘れていなかった。ヴァシリコ公 [I112] が勇者³⁶⁹⁾ [ブラルダイ] とともにリトアニアの地を掠奪したことを³⁷⁰⁾。そこで、[ミンダウガスは] ヴァシリコ [I112] 討伐の軍隊を派遣し、カメネツ³⁷¹⁾ (Каменец) の周辺を掠奪した。

ヴァシリコ公 [I112] はかれら [リトアニア人] に対して進軍することはしなかった。なぜなら、別の戦いを予定していた³⁷²⁾ からである。[ヴァシリコは] かれら [リトアニア人] に対してジェリスラフ³⁷³⁾ (Желистав) とステパン・メドゥーシニク³⁷⁴⁾ (Степан Медушник) を派遣した。かれら [派遣部隊は] かれら [リトアニア人] を追ってヤソルナ³⁷⁵⁾ (Ясолна) のところまでさえて来たが、かれらに追い付くことはできなかった。なぜなら、[リトアニア人は] 小勢で、捕虜を連れただけであり、それゆえに素早く逃げたからだった³⁷⁶⁾。

【リトアニア人がメリニク方面を襲撃し、多くの捕虜を獲る：1262 年夏～秋】

他の [リトアニアの] 軍隊はその **[856]** [週の] 日曜日にメリニク³⁷⁷⁾ (Мѣлник) 周辺で掠

369) 「勇者」(богатырь) はモンゴルの武将の称号で、ここではブラルダイを指している。かれが「勇者」と呼ばれていることについては [イパーチイ年代記 (11): 225 頁, 注 252] を参照。

370) 1256/57 年にブラルダイが大規模なリトアニア討伐遠征を行ったとき、ヴァシリコが援軍として従軍を余儀なくされたことを指している (上注 303 以降を参照)。

371) ヴォルィニの地に Каменец (Камень) の地名をもつ場所は複数あるが、情況から判断して、この「カメネツ」(Каменец: フレーブニコフ系写本は Камена) は、ブリビャチ川上流支流のツィリ川 (Цырь) 川) 河岸にある、現在のカメニ = カシルスキイ (Камінь-Каширський) を指している。ヴォルィニ地方北部に位置し、ウラジミルからだと、北北東に 95km 離れており、ピンスクからだと逆に南西方向に 95km 進まなければならない ([イパーチイ年代記 (10): 261 頁, 注 179] 参照)。

372) この「別の戦い」(другая рать) とは、次に述べられる、メリニク方面へのリトアニア人來襲に対する迎撃を指しているのだろう。

373) 「ジェリスラフ」(Желистав) は、ヴァシリコ [I112] とウラジミル [I1121] に仕える軍司令官として、これ以降 1285 年までの記事で言及されている。

374) 「ステパン・メドゥーシニク」(Степан Медушник) はこの部分が初出だが、ジェリスラフ同様に軍司令官と考えられる。

375) 「ヤソルナ川」(Ясолна) は、ブリビャチ川の左岸支流で、現在のヤセリダ川 (Ясельда, Ясольда, Jaselda) に相当し、河口はピンスクから東へ 23km ほどのところにある。カメネツ (前注) から北上してリトアニア人のヤセリダ川下流域の拠点ズディトフ (Здитов) (現在のベラルーシのズディタヴァ (Здзітава) に相当) までの間だと、100km ほど離れている。

376) ヴァシリコ [I112] が派遣した迎撃部隊がリトアニア人に追いつけなかった理由についての原文が曖昧で、ロシア語・ポーランド語訳でも主述語関係が不分明だが、ウクライナ語訳の通り、リトアニア略奪部隊が小勢で、物資・家畜を掠奪せずに、捕虜を捕らえて連れ去っただけだったので、かれらの逃げ足は速かった、と理解したい。

377) 「メルニク」(Мѣлник) は、西ブグ川中流域右岸に位置し、現在のポーランド、ビャウストク県のミエルニク村 (Mielnik) に相当し、ベレスチエの付属城市のひとつ。

奪を行った。かれら〔リトアニア人〕のところにはコヴディジャド・チュディアミノヴィチ³⁷⁸⁾ (Тюдияминович Ковдижадь) がいた。かれら〔リトアニア人〕は多くの捕虜を獲った。

【リトアニア人の来襲に対してヴァシリコは自ら遠征し、ネブリの戦いに勝利する】

ヴァシリコ公 [I112] は、自分の息子ウラジーミル [I1121]、貴族たち、家来たちとともに、かれら〔リトアニア人〕を追って進軍を始めた。神と至浄なるその母、尊い十字架の力に望みをかけていた。そしてかれら〔リトアニア人〕をネブリ³⁷⁹⁾ (Небль) の城砦まで追撃した。リトアニア人は湖畔にすでに布陣していた。そして〔リトアニア人は〕〔ヴァシリコの〕部隊を見ると、軍備を整え、自らのやり方で盾を手に3列になって待ち受けた。ヴァシリコ [I112] も、自分の部隊の軍備を整えさせ、かれらに向かって進軍を始めた。両軍が戦った。リトアニア人は耐えきれずに、一気に敗走に転じた。そして、逃げ切ることができなかった。湖が周囲を囲んでいたからである。こうして、〔ヴァシリコ軍は〕かれら〔リトアニア人〕を斬り始め、他の〔リトアニア人は〕湖の中で溺れた。こうして、かれら〔リトアニア人〕をすべて撃ち殺し、かれらの中で生き残った者は一人もいなかった。

【ヴァシリコはネブリの戦いの勝利をピンスク諸公とともに祝う】

そのことについて、ピンスクの諸公³⁸⁰⁾、フョードル³⁸¹⁾ (Федоръ) [B3213111] とデミド³⁸²⁾ (Демидъ) [B3213113] とユーライ³⁸³⁾ (Юрьи) [B3213112] が聴き知った。かれらは飲み物〔酒〕を持参してヴァシリコ [I112] のもとにやってくる、祝宴を催し始めた³⁸⁴⁾。自分たちの敵が撃ち殺され、自分たちの従士たちはまったく無傷であることを見たからである。ただ一人、ヴァ

378) 「コヴディジャド・チュディアミノヴィチ」(Тюдияминович Ковдижадь)の詳細は不明だが、文脈と父称の使用から見て、リトアニア人を指揮する族長(最高軍司令官)の名前だろう。この人物の力によってリトアニア軍の掠奪は大規模だったことから、ヴァシリコは自ら迎撃の遠征に出かけたのである。

379) 「ネブリ」(Небль)の城砦とは、現在のウクライナ、リヴノ州のプリピャチ川右岸の河跡湖であるノベリ湖(Нобель)に接する場所に建てられた城砦を指している。ピンスクからなら南西方向に35kmほどしか離れておらず、ヴォルィニ公領の北西境界にあり、ヴォルィニ公もしくはピンスク公が対リトアニア防衛のために建設した城砦であろう。

380) 「ピンスク諸公」(князи Пиньскци)についての本年代記の記述は、1244/45年の記事にピンスク公ミハイル [B321322] ([イパーチイ年代記(11):注403]参照)についての言及があり、1257年頃のダニールのリトアニア討伐の軍司令官としておそらく同じミハイルが言及されている(上注309)。ここに記名されている3人のピンスク公は、このミハイルの次の世代(息子、甥)の諸公と考えることができる。

381) 「フョードル」(Федоръ) [B3213111] は1262年のこの頃に、ピンスクを公支配していた公である。

382) 「デミド」(Демидъ) [B3213113] は、フョードル、ユーライに次ぐ年少者だろう。

383) 「ユーライ」(Юрьи) [B3213112] は1292年にピンスク公として没している。

384) この「祝宴」(веселитися)が行われたのはネブリの城砦の中だろう。ピンスクからは近く(上注379)、祝宴の酒を運ぶのも容易である。

シリコ [I112] の部隊のプレイボル³⁸⁵⁾ (Прѣбор) という、ステパン・ロディヴィチの息子 (сынъ Степановъ Родивича) が殺された。

その後、ピンスク諸公は帰郷し、他方ヴァシリコ [I112] は勝利と大いなる名誉をもってヴラジミルへ向けて出発した。[そのときヴァシリコは] **[857]** ヴァシリコ公 [I112] の足下に敵を屈服させるという、いとも奇しき事をなした神を誉め称賛した。

【ヴァシリコはネブリの戦いの戦利品を使節団に持たせてダニールに贈る。テルチでのダニールと使節団長との会合】

[ヴァシリコは] [使者の] ボリス (Борис) およびイゼボルク³⁸⁶⁾ (Изѣболк) に戦利品の分け前を [持たせて]、自分の兄の [ダニール [I111]] 王に宛てて派遣した。[ダニール] 王はハンガリー人のところへ出発していた。ボリスはテリチ³⁸⁷⁾ (Телич) でかれ [ダニール] に追い付いた。

[そのとき、ダニール] 王は弟 [ヴァシリコ [I112]] のこと、自分の甥のウラジーミル [I1121] のことをたいへん嘆いていた。かれ [ウラジーミル] が若かったからである³⁸⁸⁾。[すると、] かれ [ダニール] の家来の一人が入って来て、次のように語り始めた。「おお、御主人様、見よ、どこかの人員が盾と投げ槍を持ってやって来ます。馬を手綱で引いています」。[ダニール] 王は喜びに跳び上がると、両手を広げて、神を称賛して言った。「主よ、汝に栄光あれ。かのヴァシリコ [I112] はリトアニア人に勝利したのだ」。

[そこに] ボリスが到着して、王に分け前品を運んできた。すなわち、鞍つきの馬、盾、手槍、胄などだった。[ダニール] 王は自分の弟 [ヴァシリコ] と甥 [ウラジーミル] の健康について訊き始めた。ボリスは二人の健康状態について語り、すべての起こったことについてかれ [ダニール] に報告した。自分の弟と甥が壮健であること、敵を撃ち殺したことを [ダニール] 王は大いに喜んだ。[ダニールは] ボリスに贈物を与え、自分の弟のもとに帰した。

385) 「プレイボル」(Прѣбор) について詳細は不明。ヴァシリコの側近貴族と考えられる。

386) 「ボリス」(Борис) と「イゼボルク」(Изѣболк) はヴァシリコ配下の側近。フレーブニコフ系写本には「および」に相当する接続詞 и がなく、また、これ以降の使節行の物語にはボリスしか言及されないことから、ロシア語訳注では、「イゼボルク」はボリスの別名でありこの二人は同一人物のことを指していると推定している。たしかにこの可能性が高い。

387) 「テリチ」(Телич: フレーブニコフ系写本は Подтелич) は、ポーランドのティリチ (Tylicz) に相当し、カルパチア山脈を越えてハンガリー領に入る手前の、ポーランド側国境山脈地帯に位置している。ダニールはホルムからベレムィシェリを經由して、山越えでのハンガリー行きの上だったのだろう。

388) ウラジーミル [I112] はこの頃は 15 歳ほどで、初めての遠征参加だったと思われる。ダニールが「嘆いた」(бѣше печалюя) のは、自分の不在の間に甥のウラジーミル [I112] が遠征したが、若年のゆえに戦死したのではないかと危ぶんでいたからだろう。

【テルナフでルーシ諸公とボレスワフ五世は会合する（タルヌフの諸公会議）：1262 年末】

その後、ルーシ諸公とポーランドの公ボレスワフ³⁸⁹⁾との会合があった。かれらはテルナフ³⁹⁰⁾(Тернав)に集合した。ダニール公 [I111] は自分の二人の息子レフ [S2] と【858】シヴァルン [S5] とともに、ヴァシリコ公 [I112] は自分の息子のウラジーミル [I1121] とともに〔参加した〕。ルーシの地とポーランドの地 (земля Руская и Лядьска) について互いに約定が結ばれ、〔約定が〕尊い十字架〔の接吻儀礼によって〕固められた。こうして、かれらはそれぞれに帰郷した³⁹¹⁾。

【ミンダウガスの死：1263 年秋】

この会合の後、1 年が過ぎた。その秋に³⁹²⁾リトアニアの大いなる公³⁹³⁾ミンダウガスが殺された。かれはリトアニアのすべての地の専政支配者³⁹⁴⁾だった。

【ミンダウガス殺害物語：ミンダウガスはリトアニアの単独支配を始める】

われらは、かれの殺害についてこれから語ろう。

かれ〔ミンダウガス〕はリトアニアの地を公支配していた。そしてかれは、自分の兄弟たち

389) 「ポーランドの公ボレスワフ」(лядьский князь Болеслав)はボレスワフ五世純潔公(Bolesław V Wstydlivy)のこと。当時はクラクフ公およびサンドミェシュ公としてマウオボルスカ地方を統治していた。

390) 「テルナフ」(Тернав)は、現在のポーランドのマウオボルスカ県の都市タルヌフ(Tarnów)に相当する。首都クラクフから東へ75kmほどに位置している。クラクフとガーリチ=ヴォルィニ公領の主要都市との中間地点に位置していた。

391) テルナフ諸公会議における約定(ряд)の合意内容についてはまったく記されていないが、ミンダウガスによるリトアニア勢のルーシ(ヴォルィニ地方)およびポーランド(マウウボルスカ地方)への同時的な遠征に対する対抗策を話合ったと考えるのが時期的にも妥当だろう[Котляр 2005: С. 321]。他方、パシュートは諸公会議の開催を1260年として、直前のブラルダイの遠征に参加したルーシ諸公との敵対関係の調整を行ったと考えている[Пашуто 1950: С. 284]。

392) ミンダウガスの死の年代については、『ノヴゴロド第一年代記』の6771(1263)年の記事に「同族の陰謀で大いなる公ミンダウガスが殺された」[НПЛ: С. 84, 313]とあり、ポーランド史料も1263年としていることから([Грушевський-Хронологія: С. 363])、本記事と併せて1263年秋と比定することができる。パシュートはポーランド史料に拠って1263年8月5日より細かく特定している[Пашуто 1959: С. 383]。

393) このミンダウガスに対する「大いなる公」(великий князь)の称号は、公の死亡記事における称揚的な表現である(上注345を参照)。

394) この「専政支配者」(самодержець)の語は、本年代記の冒頭でロマン公 [I11] について用いられているが([イバーチイ年代記(10): 231頁, 注4)、ここでは前注と同様に、死者に対する称揚的な意味で使われたのだろう。

や息子たちを殺し始め、そうでない者は〔リトアニアの〕地から追放し³⁹⁵⁾、すべてのリトアニアの地を一人で公支配し始めたのだった。そして、ひどく高慢になり始め、大いなる栄光と高慢さで自らを高め、誰にも自分に対して対抗させなかった。

かれにはヴァイシュヴィルカス³⁹⁶⁾ (Войшелк) という息子とひとりの娘がいた。〔ミンダウガスは〕その娘をホルムのシヴァルン・ダニーロヴィチ [S5] に嫁がせた³⁹⁷⁾。

【ミンダウガス殺害物語：ミンダウガスの息子ヴァイシュヴィルカスのキリスト教への改宗と修道士受戒】

ヴァイシュヴィルカスはノヴォグルードク (Новогородч) の公支配を始めた³⁹⁸⁾。かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕は異教徒であり、多くの血を流し始めた。毎日 3 人、4 人が殺された。誰も殺されない日があると、そのことを嘆く有り様で、誰かを殺せば、また喜んだ。その後、神への畏れがかれ〔ヴァイシュヴィルカス〕の心に降り、おのれの中で思慮して、聖なる **[859]** 洗礼を受けようと望んだ。そして、そのノヴォグルードク (Новгородьць) で洗礼を受け、それからはキリスト教徒となった。

その後、ヴァイシュヴィルカスはガーリチのダニール公 [I111] のもと、ヴァシリコ〔公〕 [I112] のもとに行き³⁹⁹⁾、修道士の位を受けることを望んだ⁴⁰⁰⁾。その時、ヴァイシュヴィルカスはユーリイ・リヴォヴィチ [S21] に洗礼を施した⁴⁰¹⁾。

395) ミンダウガスの「悪行」についてはすでにこれまでに記事でも語られており、同族の殺害については、6723(1215)年の記事のプレヴィチ一族のヴィスマンタス (Вишимут) 殺害とその妻の略取を、追放については6760(1252)年の記事の、甥のタウトヴィラス (Тевтевил) とゲドヴィダス (Едивид) の追放 (上注 60) を参照。

396) 上注 181, 183 を参照。

397) シヴァルン [S5] とミンダウガスの娘との結婚については上注 104, 182 を参照。結婚は、およそ 1254 年に成立した。

398) このヴァイシュヴィルカスのノヴォグルードク支配は、いったんロマン [S3] に引き渡したこの城市を、再び取り戻してロマンを捕虜とした 1257/58 年以降のことを指している (上注 307 参照)。

399) 先の 6763(1255) 年の記事では、ヴァイシュヴィルカスは「ホルムのダニールのもとにやって来た」(приде Холмъ к Данилу) とあり (上注 183)、実際はホルムに来たのだろう。これはヴァイシュヴィルカスの洗礼以降のこととすると、1258 年 ~ 1260 年のことと推定できる。

400) このヴァイシュヴィルカスの得度について、ヴィルクルは、ダニールによる政治的な強制によるものという説を出している [Вилкул 2007]。

401) 「ユーリイ・リヴォヴィチ」[S21](Юрьи лвович) はダニールの息子レフ [S2] の長子で、生長してのちにガーリチ公となり本年代記にも何度も言及される。ヴァイシュヴィルカスがかれを「洗礼した」(крести) とは、生まれたばかりの赤子の洗礼親、すなわち代父となったということ。

それから、その後、ポロニナ⁴⁰²⁾ (Полонина) の修道院のグリゴリーイ⁴⁰³⁾ (Григорий) のもとに行き、修道士の剃髪を受け、修道院のグリゴリーイのもとに3年滞在した。そこから、グリゴリーイの祝福を受けて、聖山〔アトス山〕へ向けて出発した。グリゴリーイは聖なる人だった。まことに、かれの前にも、かれの後にも〔そのような人は〕いなかった。ヴァイシュヴィルカスは聖山に到達することはできなかった。なぜなら、その時、その地では大いなる騒乱があったからである⁴⁰⁴⁾。〔ヴァイシュヴィルカスは〕再びノヴォグールドクへ戻り、リトアニアとノヴォグールドクの間のネマン川に (на рѣцѣ на Немнѣ) 自らのために修道院を開き⁴⁰⁵⁾、そこに住んだ。

【ミンダウガス殺害物語：ミンダウガスは亡き妃の姉妹を、奸計によってその夫でナリシア公のダウマンタスから略奪する：1262年頃】

かれの父ミンダウガスは、かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕の生き方について、かれを非難した。かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕は自分の父親をひどく嫌っていた。その時、ミンダウガスの公

402) 「ポロニナ」(Полонина)の比定地について、ウクライナ語訳索引はホモラ川(Хомора)右岸の城市(現在のフメリヌィーツィクィイ州ポロンネ(Полонне))としているが説得的ではない。ロシア語訳注とコトリヤールはカルパチア山脈にあった修道院[Котляр 2005: С. 322]としており、こちらの可能性のほうが高い。ただし、具体的な地理についての説明はない。

403) ポロンスキ修道院の典院グリゴリーイ(Григорий)については、6776(1268)年の記事で「ルブリンの主席」(пробст) (司教に次ぐ地位の聖職者)として言及されている。

404) ポーランド語訳注はヴァイシュヴィルカスのアトス行きを1257年頃と推定している。かれのアトス山行きの経緯について、6763(1255)年の記事ではダニール公がハンガリー経由の行路を世話してやったが、行くことが出来ず、ブルガリアに戻った(上注188)とあるだけで、行けなかった原因は書かれていない。この「大いなる騒乱」(мятежь... великъ)とは、ブルガリアでは1256年8月にアセン朝のミハイル二世が殺害され、国内ではハンガリー王国やラテン帝国、ニケア帝国を巻き込む内争が展開された。そのような情勢の中で、ヴァイシュヴィルカスは聖山へ到達できなかったのだろう[Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 216, przyp. 1370]。

405) 1257年頃に開設されたこの修道院は、通説によれば、現在のベラルーシ、グロドノ州グネシチ村(Гнесичи)に近い、ラウリシェフ修道院(Лаўрышаўскі манастыр)とされている。伝説では、ヴァイシュヴィルカスはラヴレンチイ(Лаврентий)(通名ラウリシ(Лавриш))の修道名を名乗ったことから修道院が名付けられたもので、歴史的にリトアニア大公国の正教会の拠点地の一つであり、現在も男子修道院として残っている。ノヴォグールドクから近く、北東方向へ27kmほどしか離れていない。

妃⁴⁰⁶が亡くなった。〔ミンダウガスは〕かの女〔自分の妃〕を哀悼し始めた⁴⁰⁷。かの女の姉妹が、ナリシアの公 (за Нальщаньскимъ княземъ) ダウマンタス⁴⁰⁸ (Домонт) に嫁いでいた。ミンダウガスがナリシアに向けて自分の義理の姉妹を呼び出す使者を遣って、こう言った。「見よ、そなたの姉妹が死者となった。自分の姉妹を哀悼するために来たれ」。

かの女は哀悼するためにやって来たところ、ミンダウガスは自分の義理の姉妹を娶りたくなった。そして、かの女に【860】 対してこう言い始めた。「そなたの姉妹は死に臨んで、そなたを娶るようにとわしに命じた。〔妻は〕 こう言い遣したのだ。『どうか、他人の女が〔わたしの〕子供たち⁴⁰⁹を虐めることがないように』と」。そして、かの女を娶った。

【ミンダウガス殺害物語：ダウマンタスは復讐の計画にジェマイティア公トレニオタを引き入れる】

ダウマンタスは、そのことを聴くと、そのことについてひどく嘆き悲しんだ。何とかしてミンダウガスを殺そうと思慮していた。しかし〔殺すことは〕出来なかった。なぜなら、かれの兵力は少なく、かの〔ミンダウガスの兵力は〕多かったからである。ダウマンタスは、誰かと一緒にミンダウガスを殺すことができないかと方途を探った。そして、トレニオ

406) この「公妃」(княгини)は、1219/20年のリトアニア諸侯の使節の記事の中で、ミンダウガスがジェマイティアの侯でプレヴィチ族(Булевичи)のヴィスマンタスから略奪した(『イパーチイ年代記(10): 277頁』参照)その妻だった女性と同一人物とされている。なお、ヴィスマンタスは1251年のミンダウガスとの戦闘で、ヴィキンタス=タウトヴィラス陣営の軍司令官として戦死している(上注89参照)。かの女については、ミンダウガス戴冠についての騎士団側の史料に「マルタ」(Marta, Morta)という洗礼名が記されている[Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 217, przyp. 1372]。公妃の没年は1262年頃と推定されている。

407) この「哀悼する」(карити по ней)は特別な儀礼を行うことを指しており、以下に見るように亡き妃の姉妹を呼び出すための策略であったことが含意されている。

408) 「ダウマンタス」(Домонт; Daumantas, Даўмонт)は、1260年頃からナリシアの公として、姻戚であるミンダウガスとは同盟関係にあった。本年代記の事情によってミンダウガスを殺害した後、『ノヴゴロド第一年代記』1265年の記事によれば、ミンダウガスの息子のヴァイシュヴィルカスがリトアニア、ナリシアに遠征を行ったときに、300人のリトアニア人がプスコフに逃げ込み、そこで正教徒としての洗礼を受けている(НПЛ: С. 85, 314)。その中にダウマンタスがいたことは確実であり、チモフェイ(Тимофей)の洗礼名を得て、1266年にはプスコフの公として勤務している。

409) これは下注414に名指されている「ルクリ」「レベキイ」を指している。上注396でミンダウガスの息子とされているヴァイシュヴィルカス及びシヴァルンに嫁いだ娘(上注397)はすでに成年に達していることから、かの女の子供ではなく、ミンダウガスの先妻の子供と考えるべきだろう。

タ⁴¹⁰ (Тренята) という、ミンダウガスの姉妹の息子を探し出した。そして、かれとともにミンダウガスを殺そうと相談した。トレニオタはそのときジェマイティア〔地方〕にいた。

6771〔1263〕年

【ミンダウガス殺害物語：ダウマンタスは計略によってミンダウガスと二人の息子を殺害する：1263年夏～秋】

{ そのとき, } ミンダウガスは自分のすべての軍勢を、ブリャンスク⁴¹¹の公(бряньский князь) ロマン⁴¹² [G415]を討つべくドニエプル川の向こうへ派遣していた⁴¹³。

ダウマンタスがかれら〔ミンダウガスの軍勢〕とともに戦争のための行軍を始めたが、好機を捉えて戻ってしまった。〔ダウマンタスは〕言った。「占いによれば、そなたたちと行軍してはならないとのことだ」。〔ダウマンタスは〕戻ると、速やかに軍をまとめて、ミンダウガスを急襲し、その場でかれを殺した。そして、かれの二人の息子ルクリ(Рукль)とレペキイ⁴¹⁴(Репекый)をかれ〔ミンダウガス〕と一緒に殺した。このようにしてミンダウガスは殺害されて最期を遂げた。

410) 「トレニオタ」(Тренята: Тронята, Тройнат)は、ジェマイティアを公支配していた人物。かれの出自については、ミンダウガスの姉妹の夫であるヴィキンタス(上注61)がやはりジェマイティア公であることから、ヴィキンタスの息子と解釈する説が有力である。その場合、トレニオタはミンダウガスにとって血のつながりのある甥ということになる。13世紀の『リヴォニア韻文年代記』(Livländische Reimchronik)には、1260/61年のドイツ騎士団との戦いの中でミンダウガスが派遣した司令官「同族のトレニオタ」(mit sinem mâgen Traniâte)として言及されている(〔Магузова, Назарова 2002: С. 242〕)。

411) 「ブリャンスク」(Брянск)は、現在のロシアの都市ブリャンスク(Брянск)に相当し、チェルニゴフ公領に属していた。リトアニア人から見ればドニエプル川を左岸から右岸へと渡り、支流のデスナ川沿岸まで到達しなければならない長路の遠征になる。

412) ロマン[G415]についてはこの個所が初出。ミハイル(チェルニゴフ聖公)[G41]の息子としては年少だったのだろうチェルニゴフ公領北西のブリャンスクの公だったが、この直後1263年から1288年頃までチェルニゴフの公座に就いている(〔Войтович 2006: С. 419〕)。

なお、この前後にロマンの娘オリガがウラジーミル・ヴァシリコヴィチ [I1121]と結婚式を挙げており、ヴラジミル公ヴァシリコ [I112]とは姻戚関係を持っていた(下注420参照)。この関係が上述のロマンのチェルニゴフ公座就位に役だったことだろう。

413) このミンダウガスの派遣部隊のブリャンスク遠征については、下注421でやや詳しく述べられている。

414) 「ルクリ」(Рукль)と「レペキイ」(Репекый)は、1262年頃に亡くなった公妃マルタ(上注406)との間にできた息子たちで、臨終の際に公妃がかれらの運命を思って哀訴していることから、まだ年少だったと考えられる(上注409も参照)。

【ミンダウガスの死後、トレニオタはタウトヴィラスを殺してリトアニアの支配権を握る：1263 年後半】

ミンダウガスが殺されると、ヴァイシュヴィルカスは同じ事を恐れて⁴¹⁵⁾、ピンスク (Пиньск) へと逃亡して、そこで暮らしていた。

他方、トレニオタはリトアニアの全ての地とジェマイティアの公支配を始めた。そして、〔トレニオタは〕自分の兄弟〔従兄弟〕のタウトヴィラス⁴¹⁶⁾を呼び寄せるために、ポロツク (Полоцьск) に使者を遣って、こう言った。「兄弟よ、ここへ来られよ。われら二人で〔ミンダウガスの支配〕地と【861】獲物を分けようではないか」。かれ〔タウトヴィラス〕はかれ〔トレニオタ〕のところへやって来た。タウトヴィラスは、トレニオタを殺そうと願って、〔仲間たちと〕謀議を始めた。他方、トレニオタもまたタウトヴィラスを討とうと謀議をしていた。そして、〔この〕タウトヴィラスの謀議について、かれ〔タウトヴィラス〕の貴族であるポロツク人プロコピイ (Прокопий) が、〔トレニオタに〕密告した。トレニオタは先手を取って、タウトヴィラスを殺し⁴¹⁷⁾、一人で公支配を始めた。

【トレニオタはミンダウガスの家来によって殺害される：1264 年】

その後、ミンダウガスの馬丁をしていた4人の従者が、どうしたら自分たちがトレニオタを殺すことができるか評議を始めた。〔ある時〕かれ〔トレニオタ〕が入浴するために風呂へ出かけた。かれら〔従者たち〕は自分たちの時機が来たと見て取ると、トレニオタを殺した。このようにして、トレニオタにも殺害によって最期のときがきた。

【トレニオタの死後、ヴァイシュヴィルカスがリトアニアの支配権を握る：1264 年】

ヴァイシュヴィルカスはこのことを聴くと、ピンスク人とともにノヴォグールドクへ向けて出陣した。そして、そこでノヴォグールドク人を引き連れると、リトアニアへ向けてこれを公

415) 「同じ事」とは、父ミンダウガスと同様に、ヴァイシュヴィルカスもダウマンタスによって殺害されたということ。

416) ダニールのもとに亡命していたタウトヴィラスは、1254年のミンダウガスとダニール [I111] の講和によって、ミンダウガスのリトアニア支配を認めて、ダニールのもとを去り (上注 181)、1254 ~ 1263 年の期間はポロツクで公支配を行っていた。

417) このトレニオタによるタウトヴィラス殺害について、『ノヴゴロド第一年代記』6771(1263)年の記事では、キリスト教的視点から次のように書かれている。「ミンダウガスの殺人者たちは、かれの財産をめぐって仲間割れを起こし、ポロツクの善良な公タウトヴィラスが殺された。ポロツクの貴族は鎖に繋がれ、ポロツク人に対してタウトヴィラスの息子を殺すよう依頼された。かれ〔タウトヴィラスの息子〕は自分の家臣とともにノヴゴロドへ逃れた。それからリトアニア人は自分たちの公をポロツクに据え、かれらの公とともに捕らえていたポロツク人を解放して、和を結んだ」[НПД: С. 84, 313]。

支配すべく出発した。すべてのリトアニア人は、主人〔ミンダウガス〕の息子である〔ヴァイシュヴィルカス〕を喜んで受け入れた。

6772〔1264〕年

【ヴァイシュヴィルカスによるこれまでの敵手の大規模な迫害、多数が国外へ逃亡する：1264年】

ヴァイシュヴィルカスはリトアニアの全地の公支配を始めた。かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕は自分の敵たちを打ち殺し始めた。その数は無数と言えるほど多かった。他の者たちは、目にとまった場所へどこにでも、散り散りに逃げて行った。かの忌まわしく、呪われた、無法のオスタフィ (Остафи) 一人だけが殺された。われらはかれについてすでに書いたことがある⁴¹⁸⁾。

【リトアニア人のブリャンスク遠征とウラジーミル・ヴァシリコヴィチの結婚：1263年秋】

さて、先に述べたミンダウガス殺害の年、ブリャンスクの公ロマン [G415] のもとで結婚式があった。かれは、**[862]** オリガ (Олга) という名の自分の愛しい娘を、ウラジーミル公 [I1121]、すなわち、ヴァシリコ [I112] の息子にしてガーリチの大いなる公ロマン [I11] の孫である〔公に〕嫁がせようとしていた⁴¹⁹⁾。

その時、リトアニアの軍隊がロマン [G415] を討つべく到来した⁴²⁰⁾。かれ〔ロマン〕は、かれら〔リトアニア人〕と戦って、かれらに勝利した。かれ〔ロマン〕自身は負傷した。自らの少なからぬ雄壮さを示したのである。そして、〔ロマンは〕勝利と大いなる名誉をもってブリャンスクへ帰還した。喜びのため自分の身体の負傷を自覚することはなかった。

そして、〔ロマンは〕自分の娘を嫁がせたのである。かれには他に3人の〔娘〕がおり、かの女〔オ

418) 「オスタフィ・コンスタンチノヴィチ」については上注 363 を参照。かれはミンダウガスに軍司令官として勤務していたことから、父親ミンダウガスを嫌っていたヴァイシュヴィルカスによって、父親の重臣として殺されたのだろう。

419) 1259 年後半には、ヴァシリコの娘オリガが、チェルニゴフのアンドレイ・フセヴォロドヴィチ公 [C412211] と結婚しており (上注 323 参照)、ヴァシリコ一族はチェルニゴフ諸公とは婚姻を通じてとりわけ緊密な利害関係を持っていた。

420) リトアニア人部隊のブリャンスク遠征は 1263 年秋頃と推定される。ミンダウガスはこのとき自分の部隊の大部分を派遣してしまい、手薄になったところをダウマンタス等によって襲われ、殺害された (上注 413 を参照)。

なお、ミンダウガスにとって、タタール人の攻略によって公の支配力が低下したチェルニゴフ地方は、格好の掠奪の対象地だった。過去にもミンダウガスの部隊がチェルニゴフの地へ遠征を行ったことについては、かれの軍司令官フヴァル (Хвал) が行った「大殺戮」についての記事がある (上注 258)。この遠征もそのような掠奪遠征の一つと考えられる。

リガ)は4番目で、これがかれにとって最も愛しい[娘]だった。[ロマンは]かの女に伴わせて、自分の最年長の息子ミハイル [G4151] と多くの貴族たちを派遣した。

【ヴァイシュヴィルカスのリトアニア支配の始まり：1263 ~ 1264 年】

われらは先のことに戻ろう。

ヴァイシュヴィルカスがリトアニアを公支配をすると、シヴァルン公 [S5] とヴァシリコ [I112] がかれ[ヴァイシュヴィルカス]を助けるようになった。[ヴァイシュヴィルカスは]ヴァシリコ [I112] を自分の父であり主人と呼ぶようになったからである。

【ダニール公の死とかれの事蹟についての讃詞：1264 年】

他方、その時、[ダニール [I111]] 王は大病を患い、それによって自らの生涯を終えた。その[遺骸は]、かれ自身が建設した[城市]ホルムの聖なる聖母教会⁴²¹⁾に安置された。

このダニール王 [I111] は、善良で勇敢で賢明な公だった。多くの城市を建設し、[多くの]教会を建て、これを様々な美しいもので飾った。自分の弟ヴァシリコ [I112] に対する兄弟愛によって敬われていた。このダニールは第二のソロモンだった。

【ヴァイシュヴィルカスは帰服していないデルトヴァとナリシア地方の城砦を攻略する。シヴァルンは援軍として遠征に参加する：1264 年】

その後、[863] シヴァルン [S5] はヴァイシュヴィルカスを助けるために出陣した。ヴァシリコ公 [I112] は、自分の軍隊をすべて自分のところからかれ [ヴァイシュヴィルカス] のために派遣した。ヴァイシュヴィルカスはヴァシリコ [I112] を自分の父であり主人と呼んでいたからである。

シヴァルン [S5] は援軍としてリトアニアのヴァイシュヴィルカスのところへやって来た。ヴァイシュヴィルカスは、シヴァルン [S5] と自分の父であるヴァシリコ [I112] の援軍を見て、大いに喜んだ。そしてかれは軍備を整えると、重装備の軍勢をもって進軍し、デルトヴァの地⁴²²⁾ (Дявельтв) とナリシアの地 (Нальщаны) の城砦を占領し始めた。城砦を占領すると、自分の敵どもを撃ち殺し、それから帰郷した。

421) このホルムの聖母教会については、6768(1260)年の項に詳しい記述がなされている(上注292を参照)。

422) 「デルトヴァの地」(Дявельтв)については、6723(1215)年の記事で、ユデキ等4人のリトアニア諸侯の拠点地 Дяволт として言及されている(『イパーチイ年代記(10):277頁]参照)。ほぼ、現在のリトアニアのアウクシュタティア地方の西側(東側は「ナリシアの地」)に相当する。ヴァイシュヴィルカスがノヴォグールドクを中心とする黒ルーシー帯を拠点としていたとすれば、かれは北へ向かって遠征したことになる。

参考文献

- Великая хроника 1987 — «Великая хроника» о Польше, Руси и их соседях XI–XIII вв. / Под ред. В. Л. Янина; Сост. Л. М. Попова, Н. И. Щавелева. М., 1987.
- Вилкул 2007 — Вилкул Т. Галицько-Волинський літопис про постриження литовського князя Войшелка // Український історичний журнал 2007, № 4, С. 30–37.
- Влодарский 1961 — Влодарский Б. Ятвяжская проблема в польско-русских связях 10-13 вв // Международные связи России до XVII в. М., 1961. С. 116-130.
- Войтович 2006 — Войтович Л. В. Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Войтович 2011а — Войтович Л.В. Галицько-волинські етюди. Біла Церква, 2011.
- Горелик 1987 — Горелик М. В. Ранний монгольский доспех (IX – первая половина XIV в.) // Археология, этнография и антропология Монголии. Новосибирск: Наука, 1987.
- Горский 2019 — Горский А. А. Русское средневековое общество: Историко-терминологический справочник. СПб., 2019.
- Грамматический анализ — Грамматический анализ ГАЛИЦКО-ВОЛЫНСКОЙ ЛЕТОПИСИ (Рукописные памятники Древней Руси: Электронный архив: Русские летописи) http://www.lrc-lib.ru/rus_letopisi/gv/index.php.
- Григорьев 2004 — Григорьев А. П. Сборник ханских ярлыков русским митрополитам Источниковедческий анализ золотоордынских документов. СПб., 2004.
- Грушевський-Хронологія — Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.
- Гудавичюс 2005 — Эдвардас Гудавичюс. История Литвы с древнейших времен до 1569 года. Т. 1. М., 2005.
- Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения(до начала XIV в.). СПб., 2015
- Иловайский Т. 1(2) 1880 — Иловайский Д.И. История России. Том 1. Часть 2. М., 1880.
- Карпов 2011 — Карпов А. Ю. Батый. М., 2011(Жизнь замечательных людей).
- Кибинь 2014 — Кибинь А. С. От Ятвязи до Литвы : русское пограничье с ятвягами и литвой в X-XIII веках. М., 2014.
- Колесов 1986 — Колесов В. В. Мир человека в слове Древней Руси. Л., 1986
- Комендова 2014 — Комендова Йитка. Опавский поход Даниила Романовича: чешский взгляд // Colloquia Russica. 2014, 4, С. 185–192.
- Котляр 2005 — Галицко-Волинская летопись: Текст. Комментарий. Исследование / сост. Н.Ф. Котляр, В. Ю. Франчук, А. Г. Плахонин. под ред. Н.Ф. Котляра. СПб., 2005.
- Крип'якевич 1984 — Иван Крип'якевич Галицько-Волинське князівство. Л., 1984.
- Майоров 2011 — Майоров А. В. О происхождении имени и уточнении даты рождения Даниила Галицкого // Україна: культурна спадщина, національна свідомість, державність. Зб. наук. пр. Львів, 2011. Вип. 20. С. 453-478.
- Майоров 2012а — Майоров А. «Король Руси» в битве на Лейте // Русин. 2012, №3(29) С. 54-77
- Майоров 2012б — Майоров А. В. Первая уния Руси с Римом // Вопросы истории. 2012. № 4. С. 33-52.
- Майоров 2014 — Майоров А. В. Греческий оловир Даниила Галицкого: из комментария к Галицко-Волинской летописи. // ТОДРЛ Т. 62, 2014.
- Маслова 2013 — Маслова С. А. Баскаческая организация на Руси: время существования и функции // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2013. № 1(51). С. 27-40.

- Мартынюк 2016 — Мартынюк А. В. «Хронографу же нужна есть писати все», или как Даниил Галицкий не взял Оломоуц, а летописец превратил поражение в победу // Письменность Галицко-Волынского княжества: историко-филологические исследования / Jitka Komendová a kol., Olomouc. 2016. С. 117-134.
- Мартынюк 2017 — Мартынюк А. В. «Австрийский стол» князя Романа Даниловича // Данило Романович і його часи (Colloquia Russica. Series II, vol. 3). Івано-Франківськ-Краків, 2017. С. 133–143.
- Матузова, Назарова 2002 — Матузова В. П., Назарова Е. Л. Крестonosцы и Русь. Конец XII в. - 1270 г.: Тексты, перевод, комментарий. М., 2002.
- Мещерский 1958 — Мещерский И. А. История иудейской войны Иосифа Флавия в древнерусском переводе М.; Л. 1958
- Моргунов 2009 — Моргунов Ю.Ю. Древо-земляные укрепления Южной Руси X-XIII веков. М., 2009.
- Назаренко 2000 — Назаренко А. В. Городенское княжество и городенские князья в XII в. // Древнейшие государства Восточной Европы за 1998 г. М., 2000. С. 169-188.
- Носенко 2015 — Носенко А. Константин „Рязанский” и Евстафий Константинович: к вопросу о княжеском происхождении и родственных связях // Colloquia Russica. Series I, vol. 5: Русь и Центральная Европа в XI–XIV веках. Материалы V Международной научной конференции, Спешская капитула, 16–18 октября 2014 г. Краков – Братислава, 2015. С. 161-172.
- Пауткин 1998 — Пауткин А. А. Ожнорусские летописцы XIII в. и переводная историческая литература // Герменевтика древнерусской литературы Вып. 9, 1998. С. 127-134.
- Пашуто 1950 — Пашуто В.Т. Очерки по истории Галицко-Волынской Руси. М., 1950.
- Пашуто 1959 — Пашуто В. Т. Образование Литовского государства. М., 1959.
- Петр из Дусбурга — Петр из Дусбурга. Хроника земли Прусской / Пер. В. И. Матузовой. М., 1997.
- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- Романова 2017 — Романова Г. Я. Объяснительный словарь старинных русских мер. М., 2017.
- Ужанков 2009 — Ужанков А. Н. «Летописец Даниила Галицкого» // Проблемы историографии и текстологии древнерусских памятников XI - XIII веков. М., 2009. С. 287-422.
- Щевелева 1978 — Щевелева Н. И. К истории второго нашествия монголо-татар на Польшу // Восточная Европа в древности и Средневековье. М., 1978. С. 307-314.
- Baumgarten 1927 — Baumgarten, N. de, Généalogies et mariages Occidentaux des Rurikides Russes du X-e au XIII-e siècle, *Orientalia Christiana* 9, no. 25, 1927.
- Dąbrowski 2012 — Dariusz Dąbrowski. Daniel Romanowicz. Król Rusi(ok. 1201–1264). *Biografia polityczna*. Avalon: Kraków. 2012.
- Dąbrowski 2016 — Dariusz Dąbrowski. Król Rusi Daniel Romanowicz. O Ruskiej rodzinie książęcej, społeczeństwie i kulturze w XIII w. Avalon: Kraków, 2016.
- Długosi Liber 7/8, 1975 — Ioannis Długosi Annales seu Cronicae incliti Regni Poloniae. Liber 7/8. Varsaviae, 1975.
- Długosz ks.7-8, 2004 — Jan Długosz, Roczniki czyli Kroniki sławnego Królestwa Polskiego, ks. 7–8, 1242–1299. Warszawa, 2004.
- IPSB — IPSB (INTERNETOWY POLSKI SŁOWNIK BIOGRAFICZNY) <http://ipsb.nina.gov.pl/Home>

Jusupović 2016 — Adrian Jusupović Elity ziemi halickiej i wołyńskiej w czasach Romanowiczów (1205-1269). Kraków, 2016.

KHW(KR) — Kronika halicko-wołyńska(Kronika Romanowiczów), wydali, wstępem i przypisami opatrzyli Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović przy współpracy Iriny Juriejew, Aleksandra Majorowa i Tatiany Wiłkuł [w:] Pomniki Dziejowe Polski, Seria II - Tom XVI. Kraków-Warszawa, 2017.

Kronika halicko-wołyńska 2017 — Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović Kronika halicko-wołyńska. Kroniką Romanowiczów. Avalon Kraków-Warszawa, 2017.

赤坂 2005 — 赤坂恒明『ジユチ裔諸政権史の研究』, 風間書房, 2005年。

イパーチイ年代記(5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(5)『キエフ年代記集成』(1151～1158年)」『富山大学人文学部紀要』(65号, 2016年8月)。

イパーチイ年代記(8) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(8)『キエフ年代記集成』(1181～1195年)」『富山大学人文学部紀要』(68号, 2018年2月)。

イパーチイ年代記(9) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(9) — 『キエフ年代記集成』(1196～1199年)」『富山大学人文学部紀要』(69号, 2018年8月)。

イパーチイ年代記(10) — 中沢敦夫, 今村栄一「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(10) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』(1201～1229年)」『富山大学人文学部紀要』(70号, 2019年2月)。

イパーチイ年代記(11) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(11) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』(1230～1250年)」『富山大学人文学部紀要』(71号, 2019年8月)。

栗生沢 2007 — 栗生沢猛夫『タタールのくびき — ロシア史におけるモンゴル支配の研究』, 東京大学出版会, 2007年。

ハルパリン 2008 — チャールズ・J・ハルパリン著中村正己訳『ロシアとモンゴル — 中世ロシアへのモンゴルの衝撃』, 株式会社図書新聞, 2008年。

水上 2005 — 水上則子「ブイリーナにおける славу поют の用法」『ロシア語ロシア文学研究』(日本ロシア文学会), 37号, 2005年。

ユダヤ戦記(1)～(3) — フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記』(1-3巻, 秦剛平訳, ちくま学芸文庫, 2002年)。

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果である。共同執筆者の宮野裕は岐阜聖徳学園大学教育学部准教授であり, 今村栄一は名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスのプロジェクト調整員である。

本稿は, 2019年度JSPS科研費, 基盤研究(C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」(19K00469, 研究代表者: 中沢敦夫)の助成を受けて行われた研究に基づいている。